

令和6年度

ふじのくにグローバル人材育成事業

成果報告書

〈最終版〉



ふじのくにグローバル人材育成基金で
高校生や教職員の「海外での学び」を応援しています

静岡県教育委員会

目次

ふじのくにグローバル人材育成事業概要	1
参加者等一覧	2
報告書	
(1) 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組	
ア 令和5年度長期留学	6
イ 静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）	16
ウ 教職員の海外研修	24
エ グローバルハイスクール研究指定	36
(2) 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成	
ア 海外インターンシップ	
① ジヤトコ株式会社	48
② ヤマハ発動機株式会社	60
③ 株式会社呉竹荘	74
(3) トビタテ！留学 JAPAN 「拠点形成支援事業」	
ア マイ探究コース	88
イ 社会探究コース	98
ウ スポーツ・芸術探究コース	102
エ ふじのくに地域探究コース	
① ものづくり・地域産業コース	104
② 多文化共生・多様性コース	112
③ 観光交流促進コース	140
④ 農林水産業みらいプロジェクトコース	142
⑤ 静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース	148
⑥ 観光交流×アジアコース	170
⑦ チーム応募	174
支援企業・団体一覧	186

ふじのくにグローバル人材育成事業概要

国際化が進む現在において、本県が地域間競争に勝ち抜き、持続的に発展していくためには、社会に変革を起こしていくグローバルリーダーとして未来を創る人材の育成が必要です。

静岡県教育委員会では、2016年4月に「ふじのくにグローバル人材育成基金」を創設し、国際的に活躍しようとする意欲ある高校生やグローバル教育を推進する学校を支援しています。

(1) 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組

区分		概要		応募(人)	参加(人)
海外体験促進	短期留学	県関連事業留学	県及び県教委が主催、共催、後援又は募集している事業に静岡県代表として参加 〈済州青少年国際フォーラム〉 【募集】1校4人程度【期間】10/31～11/4 【補助】上限100千円	20	4
	教職員の海外研修	本人企画	海外教育機関等で専門分野や現代的な課題の研究等を実施 【期間】7～12月 【募集・旅費支給】 ①1週間以上3週間未満 4人・上限500千円 ②1か月程度 1人・上限1,000千円	9 ①8 ②1	6 ①6 ②0
グローバルハイスクール研究指定		学校の特色を生かした課題研究を中心に、海外の大学や研修機関等と連携してフィールドワーク等を実施する学校を指定 【指定校】6校【指定期間】2年程度【補助】上限2,000千円		6校	3校 + 継続3校
合 計				生徒4、教員6 学校6	

(2) 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成

区分		概要		応募(人)	参加(人)
海外インターンシップ		県内企業の海外支社や海外工場における就労体験等を実施 【募集】生徒11人、事務局職員2人程度 【期間】国内研修2日、海外研修3泊4日程度(7～8月) ※旅費・参加費県負担		48	33 引率6
ものづくり等の世界大会参加		ロボット競技等のものづくりに関する世界大会へ参加 【対象】専門学科等の生徒 【補助】上限300千円(国内開催は100千円)		0	—
合 計				生徒33、引率6	

(3) トビタテ！留学JAPAN(新・日本代表プログラム)「拠点形成支援事業」

区分		概要		応募(人)	参加(人)
拠点形成支援		官民協働海外留学支援制度「トビタテ！留学JAPAN(新・日本代表プログラム)『拠点形成支援事業』」採択に伴う事業実施 ・静岡県の特性を踏まえた探究活動等を伴う留学の支援により、将来、本県の発展のために活躍できる人材を育成するとともに、令和5～7年度の3年間で、ノウハウの蓄積と事業の定着を図る。		88	49
合 計				生徒49	

参加者等一覧

(1) 国際感覚豊かな人材の育成に向けた取組

ア 長期留学・短期留学

今年度は本事業は休止しておりますが、昨年度の長期留学派遣者5人の報告書を掲載します。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
静岡英和女学院高等学校	中北 恒子	アメリカ合衆国	R5年7月29日～R6年6月1日	6
静岡英和女学院高等学校	原田 華	カナダ	R5年8月27日～R6年7月1日	8
加藤学園暁秀高等学校	オガタ 夏蓮	フランス	R5年9月1日～R6年7月	10
静岡英和女学院高等学校	清水 ほのか	カナダ	R5年8月29日～R6年7月3日	12
静岡県立静岡高等学校	梅村 舞子	カナダ	R5年9月1日～R6年6月26日	14

イ 静岡県関連事業留学（済州青少年国際フォーラム）

静岡サレジオ高等学校の生徒4人が静岡県の代表として参加し、さまざまな国の高校生と交流しました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
静岡サレジオ高等学校	香川 有沙	韓国	10月28日～11月2日	16
静岡サレジオ高等学校	中島 敬太	韓国	10月28日～11月2日	18
静岡サレジオ高等学校	仁木 悠人	韓国	10月28日～11月2日	20
静岡サレジオ高等学校	山崎 稀菜	韓国	10月28日～11月2日	22

ウ 教職員の海外研修

それぞれが企画・計画した留学先で、専門分野や現代的な課題の研究等を実施しました。6人の教職員が海外での研修を行いました。

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
浜松市立南陽中学校	杉谷 紘史	フィリピン	11月24日～12月7日	24
浜松市立豊岡小学校	宮崎 慎也	フィンランド	10月19日～10月27日	26
浜松市立河輪小学校	山本 紗綾	オランダ	8月24日～8月31日	28
沼津市立愛鷹中学校	井出 那利子	オーストラリア	9月2日～9月13日	30
焼津市立大井川東小学校	横井 幸南	オーストラリア	7月26日～8月2日	32
伊豆の国市立葦山小学校	渡邊 優	オーストラリア	11月29日～12月7日	34

エ グローバルハイスクール研究指定

学校の特色を生かした課題研究を中心に、海外の大学や研究機関等と連携してフィールドワーク等を実施する学校を指定しています。

学校名	期間	掲載ページ
静岡県立静岡城北高等学校	令和5年度～	36
静岡県立葦山高等学校	令和5年度～	38
静岡県立富士宮東高等学校	令和5年度～	40
静岡県立吉原高等学校	令和6年度～	42
静岡県立榛原高等学校	令和6年度～	44
静岡県立浜北西高等学校	令和6年度～	46

(2) 「ものづくり県」の次代を担う人材の育成

ア 海外インターンシップ

県内企業の海外工場での就業体験等を実施することで県内企業の実力を肌で感じ、将来的に県内企業で活躍する意識を高めました。県内3企業の海外拠点にて開催しました。

① ジヤトコ株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立沼津東高等学校	中田 幌大	タイ	8月25日～8月28日	48
静岡県立吉原工業高等学校	渡邊 斎	タイ	8月25日～8月28日	50
静岡県立科学技術高等学校	村上 慧	タイ	8月25日～8月28日	52
静岡県立島田商業高等学校	秋野 帆香	タイ	8月25日～8月28日	54
静岡県立浜松城北工業高等学校	木村 早希	タイ	8月25日～8月28日	56
静岡雙葉高等学校	木川 響稀	タイ	8月25日～8月28日	58

② ヤマハ発動機株式会社

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立沼津工業高等学校	田中 來夢	台湾	8月19日～8月22日	60
静岡県立沼津商業高等学校	小野田 実桜	台湾	8月19日～8月22日	62
静岡県立静岡東高等学校	佐藤 ひなた	台湾	8月19日～8月22日	64
静岡県立島田工業高等学校	曾根 光葵	台湾	8月19日～8月22日	66
静岡県立掛川工業高等学校	高良 彪惺	台湾	8月19日～8月22日	68
静岡県立袋井商業高等学校	奥宮 葉月	台湾	8月19日～8月22日	70
静岡県立浜松工業高等学校	鈴木 颯良	台湾	8月19日～8月22日	72

③ 呉竹荘

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立下田高等学校	近藤 風花	インドネシア	8月5日～8月8日	74
静岡県立伊豆中央高等学校	植松 沙南	インドネシア	8月5日～8月8日	76
静岡県立静岡西高等学校	原田 健虎	インドネシア	8月5日～8月8日	78
静岡県立焼津中央高等学校	原川 達也	インドネシア	8月5日～8月8日	80
静岡県立浜松北高等学校	廣本 美優	インドネシア	8月5日～8月8日	82
静岡県立浜松湖北高等学校	田中 彩瑛	インドネシア	8月5日～8月8日	84
浜松学芸高等学校	黄 桜子	インドネシア	8月5日～8月8日	86

(3) トビタテ！留学JAPAN拠点形成支援事業

静岡県の特性を踏まえた探究活動等を伴う留学を支援し、将来、本県の発展のために活躍できる人材を育成する事業です。1期生49人が留学しました。

ア マイ探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
静岡県立静岡農業高等学校	太田 海帆	アメリカ合衆国	12月2日～12月27日	88
静岡県立静岡城北高等学校	水野 凜果	オーストラリア	8月21日～9月15日	90
浜松学芸高等学校	松井 慶	カナダ	7月15日～9月6日	92
日本大学三島高等学校	眞野 亜月	アメリカ合衆国	8月5日～8月22日	94
静岡県立清水南高等学校	名倉 花	デンマーク	8月18日～9月2日	96

イ 社会探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
角川ドワンゴ学園N高等学校	石橋 美心	ドイツ	9月2日～10月4日	98
静岡県立静岡高等学校	石川 智美	カンボジア	7月28日～8月14日	100

ウ スポーツ・芸術探究コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
静岡聖光学院高等学校	崎山 湊太郎	ニュージーランド	7月29日～9月27日	102

エ ふじのくに地域探究コース

① ものづくり・地域産業コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	西本 結希	英国	7月22日～8月9日	104
静岡県立静岡高等学校	小澤 大音	アメリカ合衆国	7月22日～8月5日	106
静岡県立静岡城北高等学校	松永 珠実	ドイツ	7月15日～8月9日	108
静岡県立磐田農業高等学校	河村 来馳	中国	8月3日～8月16日	110

② 多文化共生・多様性コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国内	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	小林 理子	シンガポール	7月15日～8月2日	112
浜松開誠館高等学校	白井 一志	ネパール	7月28日～8月10日	114
静岡県立静岡城北高等学校	安田 ころろ	カナダ	8月5日～8月24日	116
静岡英和女学院高等学校	森 千尋	カンボジア	8月5日～8月19日	118
静岡市立高等学校	大石 怜采	オーストラリア	7月28日～8月10日	120
静岡県立浜名高等学校	澤木 美依奈	カナダ	7月29日～8月23日	122
静岡県立藤枝東高等学校	長谷川 葵	フィリピン	8月2日～8月20日	124
静岡県立静岡東高等学校	岩崎 優衣	オーストラリア	8月5日～8月23日	126
日本大学三島高等学校	鈴木 美海	英国	7月22日～8月23日	128
静岡英和女学院高等学校	秋野 ちひろ	フィジー諸島	8月1日～8月27日	130
静岡県立静岡東高等学校	小泉 芽生	フィンランド	7月31日～8月13日	132

静岡県立富士宮東高等学校	増田 惺奈	シンガポール	8月5日～8月23日	134
静岡県立袋井高等学校	稲山 瑠衣菜	オーストラリア	7月15日～8月9日	136
静岡雙葉高等学校	山崎 さら	オーストラリア	7月28日～8月17日	138

③ 観光交流促進コース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立藤枝東高等学校	木村 優奈	カナダ	7月15日～8月2日	140

④ 農林水産業みらいプロジェクトコース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
藤枝明誠高等学校	多々良 大和	カナダ	7月22日～8月23日	142
静岡県立浜松西高等学校	川島 和	オーストラリア	12月9日～12月22日	144
静岡サレジオ高等学校	内野 友鈴	シンガポール	8月12日～8月30日	146

⑤ 静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	増田 匠飛	ニュージーランド	8月5日～8月23日	148
静岡県立掛川西高等学校	平澤 一真	ニュージーランド	8月20日～9月15日	150
静岡県立駿河総合高等学校	渡邊 心	アメリカ合衆国	8月5日～9月27日	152
静岡サレジオ高等学校	佐藤 桜香	アメリカ合衆国	12月2日～12月20日	154
静岡県立富士高等学校	齋下 日和	英国	8月27日～9月13日	156
静岡県立浜松西高等学校	吉田 恋菜	フィンランド	8月13日～9月13日	158
静岡サレジオ高等学校	安部 心葉	アメリカ合衆国	7月14日～8月3日	160
静岡サレジオ高等学校	福地 まや	オーストラリア	7月29日～8月23日	162
静岡県立駿河総合高等学校	本杉 璃乃	オーストラリア	7月29日～8月16日	164
静岡サレジオ高等学校	土屋 侑大	フィジー諸島	7月24日～8月27日	166
静岡聖光学院高等学校	阪脇 鉄平	ニュージーランド	7月10日～8月10日	168

⑥ 観光交流×アジアコース

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
角川ドワンゴ学園N高等学校	井上 颯	台湾	9月30日～10月25日	170
静岡県立藤枝東高等学校	水野 美咲	インドネシア	7月10日～7月26日	172

⑦ チーム応募

学校名	氏名(敬称略)	滞在国	期間	掲載ページ
静岡県立静岡高等学校	中谷 里緒	アメリカ合衆国	8月5日～8月23日	174
静岡県立静岡高等学校	澤田 優菜	アメリカ合衆国	8月5日～8月23日	176
静岡県立静岡高等学校	山本 蒼甫	アメリカ合衆国	7月22日～8月16日	178
静岡県立静岡高等学校	杉岡 理々華	アメリカ合衆国	7月22日～8月16日	180
静岡県立小山高等学校	鈴木 天華	ニュージーランド	7月15日～8月2日	182
静岡県立小山高等学校	平山 佳誉	ニュージーランド	7月15日～8月2日	184

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		アメリカ公立高校交換留学		訪問国		アメリカ合衆国		
校内発表会の有無		有		(有の場合)	日にち	7月3日	(対象)	全校
学校名	静岡英和女学院高等学校		氏名	中北恒子		学年	高校3年生	

1 目的・応募理由

私は中学生の頃から留学をしたいと強く思っており、高校2年生で両親に留学をしたいと言いましたが、経済的に無理だと言われました。しかし私はどうしても英語圏で英語だけを使って生活し、英語を使って全ての授業をしたいと両親に伝えたらそこまで言うならと言ってようやくさせてもらえることになりました。しかし、私は三人兄弟の長女であるがゆえに学費、教材料、生活費などで大きなお金がかかるため両親の収入は低くはありませんが事情により家計が圧迫し、苦しい状況にありました。なので少しでも両親の負担を取り除きたいという思いで応募しました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

1 学期

- I 限 Human Development and Wellness
- 2 限 English A (Write & Grammar American literature)
- 3 限 Into to 2 Dim Art
- 4 限 Algebra 2A
- 5 限 Advanced Science Zoology
- 6 限 Hospitality & Culinary A
- 7 限 U.S. History
- 3:00-5:30 Dance practice

2 学期

- 1 限 Geometry B
- 2 限 English B (Write & Grammar American Literature)
- 3 限 Advanced 2 Dim Art
- 4 限 Algebra 2B
- 5 限 Drawing 1
- 6 限 Hospitality & Culinary B
- 7 限 U.S History B
- 3:00-6:00 Softball practice





私は日本の高校2年生の7月後半から10ヵ月間、アメリカの公立高校に交換留学生として留学していました。留学先では、高校3年生に入り、現地の生徒と同じ授業を取り、1学期では、ダンス部2学期ではソフトボール部に所属していました。休日は1週間学校で習ったことの復習をし、来週授業で習う所の予習をしたり、英語検定の勉強をしたりしていました。勉強面以外ではホストファミリーと外出したり、ペットの世話をしたりしてファミリータイムを特に大切に過ごしていました。その中でコミュニケーションと言うの一番大切なことなので、ホストファミリーにかかわらず、いろいろな人と自主的にコミュニケーションを取るよう意識してがんばりました。

私は初めのホストファミリーの状況や環境が悪く、一度ホストさんを11月に変更しました。変更後のホストファミリーはとても親切で暖かくて家族の一員として迎え入れてくれました。家族構成は若いご夫婦とペットの犬と猫でした。彼らと一緒に過ごす生活は、日本の生活とは異なりとても新鮮でした。夕食は家族毎晩一緒に食べる習慣があり、会話を楽しみました。ホストファミリーには、心から感謝していて彼らの支えがあったからこそ、この留学は成功したのだと思います。

3 感想等

私はアメリカ人の人たちと一緒に学び同じような学校生活を体験すると同時にその中から自然とつく英語力も期待して留学を決めました。この1年は、最大のピンチとも言える大困難がありました。大きな喜びに満ちた成長の年となりました。渡米してまもなくホストファミリーの状況に問題があり、新しいホストに変更できることになりました。学校生活は勉強も友人関係も部活動も初めは全て大変でしたがとても楽しい充実した日々を過ごすことができました。勉強面では予習、復習などを行うことによって9週間連続オールAを取るなど、勉強に専念することができました。この経験を通じて、私は自分自身を強くし、適応力と自立心を高めることができました。留学は私にとって最高の選択だったと思っています。この私の夢と一緒に叶えてくださったことに心から感謝申し上げます。ありがとうございました。これからも夢へ向かって一歩一歩頑張って進んでいきたいです。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	Hippo Year Long Program		訪問国	カナダ		
校内発表会の有無	<input checked="" type="checkbox"/> 有 ・ 無	(有の場合)	日にち	7月10日	(対象)	<input checked="" type="checkbox"/> 全校 ・ 学年
学校名	静岡英和女学院高等学校	氏名	原田 華		学年	3

1 目的・応募理由

今回この長期留学でカナダに行き、たくさんの英語を聞き、自分の言葉を増やしてきたいと思いました。現地で生きた英語だけでなく、多民族国家であるカナダで他の国の言語も習得してきたいと思っていました。また、将来は国際・言語関係の仕事につきたいと考えており、そのためにもまずは基本である英語の習得を目標に、今回長期留学に申し込みをしました。毎日英語に囲まれた環境で10ヶ月間過ごし、英語で日常会話や少し難しいことも考え、話すことができたと思います。これからも英語を話し続け、ここで習得してきたことを忘れないように過ごしていきたいと思います。

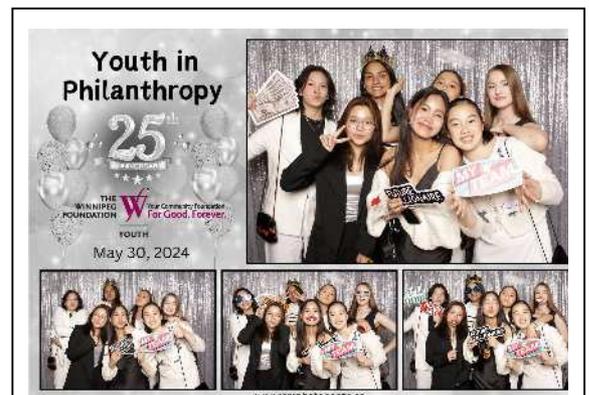
2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

私のホストファミリーはマザー、ファザー、11歳のシスターと猫と犬でした。マザーは料理が好きで、毎日美味しい料理を作ってくれました。また、私もマザーにたくさんのカナダ料理を教わり、一緒に作りました。ファザーは、サッカーの審判をしていました。仕事の帰りや休みの日は、サッカー場にいました。また、Tim Hortons(コーヒーショップ)が大好きで、1日に何回も買いに行っていました。私も、一緒にTim Hortonsに行きました。シスターはとても明るく、優しい子でした。私が元気がないと声をかけてくれたり、一緒にテレビを見たりして過ごしました。



学校では、英語、美術、食育、数学、生物などを履修しました。日本とは違い、授業が全て選択制なので、前期と後期で授業を選ぶことができます。

部活は、Youth in Philanthropy Club に所属しました。そこでは校内外のボランティア活動を調べて参加したり、ウィニペグの学校同士で繋がり、募金やその他の寄付をします。様々な文化や背景を持つ誰もが一緒に活動できます。私たちにできることは小さなことですが、皆で協力することで大きなものになります。一人ひとりが意識して行動していくことが大切です。日本の学校ではできない経験ができたと思います。



冬休みに、ホストファミリーと一緒にアメリカのオーランドに行きました。アメリカに行くのは初めてだったので、ずっと楽しみにしていました。アメリカの旅行中も、遊園地やレストランなどに連れて行ってもらい、貴重な経験をすることができました。私を受け入れ、一緒に連れて行ってくれたホストファミリーに感謝の気持ちでいっぱいです。

3 感想等

留学をして学べたことは、人々の心の温かさです。カナダの人々は、本当に優しい人が多いと感じました。またカナダは多民族国家であるため、多様性を受け入れる社会性が形成されていると感じました。私が慣れない雪道で滑って転んだ時、通りがかりの男性が手をさしのべてくれ、足を怪我したのを見て絆創膏をくれて、優しく声をかけてくれました。とても感動しました。また、初めてのバスで迷っていると、おばあちゃんが声をかけてくれて、バス停まで案内してくれました。また授業では、何度も自分の国について紹介する機会がありました。私も、日本の食べ物や文化について話しました。どの人も興味を持って話を聞いてくれました。私は、日本にいる家族だけではなく、カナダで出会ったホストファミリー、友達、先生、日本の学校で支えてくれている先生方と友達、その他多くの人に支えられて私が今カナダにいるのだと感じました。

10ヶ月間、たくさんの経験をすることができました。支えてくださった先生方、友達と私の家族にたくさんの感謝と best regard をおくります。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		公益財団法人 AFS 日本協会		訪問国		フランス		
校内発表会の有無		有		(有の場合)	日にち	7月22日	(対象)	バイリンガル 中学・高校全員
学校名	加藤学園暁秀高等学校		氏名	オガタ夏蓮		学年	1	

1 目的・応募理由

私が高校1年生という時期に、年間交換留学を志した理由は、その国の日常に溶け込むことでか得られない経験を通し、自分自身の器を大きく広げたいと思ったためである。私はそれまで、まるで「泡」の中にいるような、安定し、守られた家庭・学校環境に身を置いてきたが、自ら敢えてリスクを取り、チャレンジングな環境に身を置くことで、新しい世界観や価値観に出会い、自分自身を大きく成長させたいと思った。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

私の住んでいた場所は、大西洋側の南フランスに位置し、スペインの国境沿いにある Saint-jean-de-luz という小さな港町である。ホストファミリーの家は、町の中心街にあり、数分歩けばビーチに行ける距離にある。ホストマザー、ホストシスターとホストブラザーが三人で住んでいたアパートで、私のフランスの留学生活は始まった。ホストマザーは健康志向で、毎日新鮮な野菜をふんだんに使った料理を作ってくれ、私を優しく受け入れてくれた。ホストシスターは明るく、社交的な性格であったため、すぐに友人を作ることができた。10月まで続いた夏には、家族や友達と毎日のようにビーチに行った。たくさんの飲食店やお店が並ぶローカルな商店街が近所にあり、休日はそこを一人歩きし、カヌレを買うのが日課であった。私が通っていたホストスクールは Saint-Thomas-d' Aquin という私立学校で、当時私は日本では高校1年生であったが、ホストシスターと同じ高校3年生のクラスに入ることになった。学校までは家から6分程の近さなので、徒歩で通学し、昼食は一旦家に戻って食べた。フランスの昼休憩は長く、日によって違うが1~2時間程度になる。昼休憩の間は、学校内のカフェテリアで食べたり、学校外に出て近くの公園で食べたり、余裕があればレストランに行くことができる。また、水曜日の午後は授業がなく、6週間毎に2週間のバカンスもあり、定期的に勉強から離れ、自由に羽を伸ばすこともできた。服装も自由で、生徒は皆、思い思いの格好をしていた。このように、自由とゆとりのある教育環境のせいか、生徒の授業態度は日本のものと大きく違っていた。生徒は授業に積極的に参加し、深く思考することを楽しみ、先生が質問すると4、5人は必ず手をあげる。疑問があれば、先生にすぐに聞く。自分の間違いを恐れないのだ。そのため、生徒は皆、自信に溢れて堂々としており、とても成熟しているように見えた。フランスの学校での経験を通し、学校の役割や学ぶことの本質についてとても考えさせられた。

街の中心で飾ってあったクリスマスの木



アパートから見える街の景色



3 感想等

私がこの留学を通し、ここに書ききれない程たくさんのことを学んだが、主に二つのことについて記したい。

一つは、人と人とのつながり、普遍的な価値の共有についてである。これについて深く感じたのは、生活にようやく慣れ、仲の良い友人もでき、学校外の活動も始め軌道に乗ってきた1月にホストチェンジを経験したことによる。私を迎えてくれたホストファミリーのアパートの家賃が値上げとなり、急な引越しを余儀なくされ、引越し先のホストマザーの実家に私の部屋を用意できなかったためである。ホストマザーからのその話があった時、既に私は違う町のホストファミリーに行くことが決まっており、ホストスクールも変わるようになっていた。突然の話に頭が真っ白になり、しばらくの間、心の整理がつかなかった。それ以降、学校では上の空となり、友人たちにこのことを伝えることに躊躇したが、正直に話すことにした。新しいホストファミリーの所へ移る日となり、荷物の最終確認をしていると、ホストマザーから驚きの話があるとされた。それは数日前に、私の友人がホストを申し出てくれ、手続きが済んだので、今日から友人の家に行くことが決まったのだと言う。その時私は、その友人が私の力になりたいと行動に移してくれたことに深く感謝した。フランスに来る前は、留学により主に語学や文化の違いを学ぶことができると考えていたが、それは周辺的なことで、私が最も学んだことは、国籍、人種、文化、宗教などが違っていても人と人は共感し合える、普遍的な価値を共有することができるということである。このような経験を世界中の人々が得ることができたのならば、差別や偏見、引いては戦争をなくすことができるのではないだろうか。

二つは、フランスは社会や学校教育が「自由」や「余暇」を重んじ、人生を心から楽しむことができる社会経済システムである一方、日本はなぜそれがなかなか実現できないのかという問題意識である。日本の高校は、大学入試のため暗記中心、勉強漬けであり、進路指導も偏差値に基づいて行われるのが一般的である。世界的に見ても、日本の10代は自己肯定感が低く、自殺率も高い。また、大人の世界でも働き方改革と言われて久しいが、少しずつ前進しつつも、多様な生き方や働き方を実現できる社会とはなっていない。宮沢賢治は、「世界ぜんたいが幸福にならないうちは個人の幸福はあり得ない」という言葉を残したが、まず個人の幸福が実現して、その結果社会全体の幸福が実現するのではないだろうか。その個人の幸福の条件として、人々が「自由」を持つ権利を意識し行動することではないかと、フランス社会を通して考えるようになった。まだ漠然とした問題意識であるが、今後様々な学びを通してこの問題点を深めていきたいと思う。

どんなリスクであっても挑戦する勇敢な人を、英語ではRisk Takerと言う。自分の快適な場所から抜け出し、リスクを取ることで人は大きく成長すると、小さい頃から両親に教えられてきた。人は人生において必ず乗り越えなければならない壁に当たり、その壁を壊して前に進み、成長する。快適な場所から抜け出し、リスクを取った留学を終えた今、私は一つの大きな山を乗り越え、その山の頂上でしか見れない景色を見ることができた。このかけがえのない経験を一生の宝とし、これからもリスクを恐れず、様々なことにチャレンジしてゆきたい。

ホストシスターと



友達とプロムで



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		一年留学プログラム		訪問国		カナダ	
校内発表会の有無		有 ・ 無		(有の場合)		日にち	7月12日
						(対象)	全校 ・ 学年
学校名	静岡英和女学院高等学校		氏名	清水ほのか		学年	3年

1 目的・応募理由

- ① 英語の上達
- ② コミュニケーション能力の向上
- ③ 視野を広げる
- ④ 異文化交流
- ⑤ 自立
- ⑥ 将来の夢に向けての勉強

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

前期3教科、後期3教科、年間を通して学ぶ授業が2教科、計8教科の授業を受けました。

(1コマ60～70分) 私は前期の授業で英語・宗教学・数学、後期は美術・英語・フード、年間を通して行う授業には英語とイヤーズブック（その年のアルバムを作成）を履修しました。午前午後各2コマずつと午前中にはフォーカスブックという自分の苦手とする教科を集中的に勉強する時間があり、課題等で分からないことがあればその時間に友人や先生に教わり、予習復習・テスト勉強に時間をあてる事が出来るのでとても良い時間でした。

ホストファミリーとは、休日にホストブラザーのサッカーを見に行ったりホストマザーとパンやお菓子を作ったりして過ごしていました。ホストファミリーはアフガニスタン系でアフガニスタン料理をよくふるまってくれました。宗教についても教えてもらう機会があり、興味深かったです。滞在中とても親切にいただき、家族の一員として受け入れてもらえて感謝しかありません。



6月の中旬以降は留学も終わりに近づいてきたということで、色々な友人と会いに行くことが多かったです。今までのように気軽に会えることがなくなるので多くの友人が私と

過ごす残り少ない時間のために予定を計画してくれて嬉しかったです。次にいつカナダに行くことができるかわかりませんが、これからも連絡を取り続け、いつかまた友人たちのもとへ会いに行くことを約束しました。友人たちも日本へ会いに行くので案内をしてねと言ってきて、とても嬉しかったです。

留学をして、かけがえのない友人を得、貴重な経験をさせてもらいました。

3 感想等

留学当初は英語力向上が主な留学の目的でしたが、カナダで生活していく中で語学力の向上以上に多くのものを得られたと思っています。

コミュニケーション力やチャレンジ精神、異文化について多くの学びがありました。大切な友人も増えました。

また、カナダに来てから自己肯定感が強くなったと感じています。元々はそこまで自己肯定感も高くなくメンタルも強くなかった私ですが、カナダに来て周りからの見られ方や自身の考え方が変わりました。

私がどんな発言や行動をしても誰も気にしない上に笑ったりもされません。自分の好きなことを貫き、人の目を気にしないカナダ人のスタイルがとても気に入りました。

以前は人目を気にしていたところがありましたが、今では気にすることなく生き生きと過ごせていると思います。

支えてくださったすべての方々に感謝します。そしてこれからの人生にこの経験をいかすことができるように努力していきたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		高校生交換留学		訪問国		カナダ	
校内発表会の有無		有・無	(有の場合)	日にち	9月18日	(対象)	全校・学年
学校名	静岡県立静岡高等学校		氏名	梅村 舞子		学年	2

1 目的・応募理由

私は、かねてより海外の高校生が学ぶ教育システムや授業カリキュラムにとっても興味を持っていました。また海外での学校生活や日常生活を通して、語学力の習得だけではなく、日本と異なる習慣や文化を自ら体験し、将来日本と海外の架け橋となり社会貢献したいと思っていました。そこで、現地の高校で現地の高校生と共に学校生活を送ることができる交換留学を決断し、交換留学試験の合格を経て、10ヶ月間カナダの現地校で学ぶ機会を得ました。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

2023年9月から2024年6月までの10ヶ月間、カナダの公立高校に交換留学をしました。私が通った高校は、中学3年生から高校3年生にあたる学年の生徒約1000人が在籍している高校です。大規模校ということもあり先生の人数も多く、広大な敷地を持つ学校にはシアターや温水プールなども完備され、公立高校でありながら恵まれた学習環境で過ごすことができました。授業は1日に60分×5コマで、午前3コマ午後2コマあり、お昼休みが1時間でした。カナダの高校では、学期の初めに自分でどの授業をどの時間に受けるかを選択し、その時間割に基づいて毎日同じスケジュールで授業を受けます。日本の高校のようにクラスルームは無く、毎時間、自分が受ける授業の教室に自分が行くというスタイルです。主要教科だけでなく、専門的な内容も学べる幅広い分野の授業が用意されていたので自分の興味関心も深まりました。

授業外では、Youth in Action というクラブに入り、ボランティア活動や社会問題解決に向けた活動を行いました。多くのコミュニティーに参加することで、校内外での新たな出会いや発見の機会が増え、創造的な考え方を身につけることにつながったと思います。



高校の体育館で行われた集会の様子



雪に覆われた高校の中庭

また、休日は現地の同級生とショッピングをしたり映画を見たりして過ごしました。その他ホストファミリーとカナダ各地の風光明媚な所にも行きました。国土面積が広いカナダは、それぞれの地域に特有の文化が根付き、各地に魅力的な名所があるため、同じ国でありながら違う国にいるような感覚になりました。

カナダは冬が長くとても寒いため（私の過ごした町は -20°C 前後でした）、ウィンタースポーツが盛んです。中でもアイスホッケーは国民に愛されるスポーツとして有名です。私も留学期間中に何度かプロのアイスホッケーの試合を見に行きました。初めて見たアイスホッケーの試合は迫力満点でした。



ショッピングモールの様子



プロのアイスホッケーの試合

3 感想等

カナダでの10ヶ月間は、とても有意義でした。カナダの高校ではたくさんの友人に恵まれ、その友人たちと一緒に高校生活を送ることで確かな英会話力と英語でのコミュニケーション力が身につきました。また、授業を英語で受けることにより英語の4技能の力が飛躍的に向上したとともに、英語で物事を考える力が養われました。学校の休み時間にピアノで日本の曲を披露したり、書道を紹介したりする機会もあり、カナダの高校生が日本に興味を持つきっかけを作ることができたと思います。

長期留学は異文化、多国籍の環境の中に身を置いて生活するため、困難に直面することもありましたが、その分、かけがえのない経験もできたと思います。様々なバックグラウンドを持った人々との交流を通じて、互いを尊重し合い異文化共生を目指す重要性を改めて感じました。この経験を生かし、社会に貢献することができるようにこれからも努力をして様々なことにチャレンジしていきたいと思います。



Anne of Green Gables (赤毛のアン) の舞台になったプリンスエドワード島



旅行で訪れたカナダの首都オタワの国会議事堂周辺

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有	(有の場合)	日にち	12/9	(対象)	全コース
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	香川有沙		学年	2	

1 目的・応募理由

今回私が参加した済州国際青少年フォーラムでは29の地域から様々な背景を持った人々とともに生活をして意見を発信し合う場です。普段とは大きく異なり会話は英語で行う必要がある環境下に身を置くことで授業や課外活動で学んだ英語を実際に活用することができ英語でのコミュニケーション能力を高めていきたいと考えています。グローバル化が進む中で将来、同じような考えを持つ人々とだけ関わっていくことはほとんどなく様々な文化背景を持った人と関わる事が更に増えていくと思います。活動の中でそれぞれの文化に基づいた多様な考えを受け入れ、自分の考えや意見を積極的に発信する経験を積みたいです。自分の意見を相手に聞いてもらうのを待ってもらうのではなく自分から行動を起こしていきたいです。また、日本人としてではなく静岡県民としてこのプログラムに参加し各地域の魅力を知り、そして静岡の魅力を見たいです。多文化共生が促進される今、将来さらに多様な背景を持つ人々と関わっていくことを想定して必要になるであろう知識、経験をこのプログラムを通して学びたいと考えています。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

1 日目

- ・ゲーム（韓国の伝統）
- ・パネルディスカッションメンバーとのオリエンテーション
(common ground)



2 日目

- ・開会式
- ・自然散策（gotjawal）
- ・パネルディスカッション（プレゼンテーション準備）
(動画撮影組とプレゼンテーション準備組に分かれる)

3 日目

- ・プレゼンテーション準備（動画撮影）
- ・プレゼンテーション
- ・K-pop 教室（aespa の supernova）



4 日目

- ・ 済州島めぐり (yeomiji、 seogwipo olle market、 citrus museum)
- ・ 閉会式
- ・ culture night (各地域の伝統芸能の発表)
(ダンス、歌、プレゼンテーション)



1-4 日を通して

- ・ ランダムで組まれた他地域の人とのルームシェア
(台湾出身のルームメイトと 2 人部屋)
- ・ 食事 (基本的にはルームメイトと共に)
- ・ 韓服体験 (右の写真はルームメイトの韓服姿)



3 感想等

このプログラムで世界には様々な人がいて文化を超えて互いを理解し合うことができることを学びました。基本的な言語は英語であったのですが、日本語は多くの国に知られており、日本語で話しかけられることも多かったです。ありがとうやこんにちはといった簡単な言葉であっても一つでも相手が知ってくれているととても嬉しくなり、相手とさらに関わりたいと考えるようになることを痛感しました。そのためには英語を流暢に話せるようになることだけでなく他言語習得にも努めていきたいです。それだけではなく、日本のいただきます、ごちそうさまといった食事に関する文化を知っており、一緒に食事をする際には毎回一緒に言っていました。そのような多文化への理解の深さに感銘を受けました。静岡、日本のことだけでなく幅広い地域に関心を寄せて行く必要があると考えました。また、英語能力の向上のためにより一層、普段の勉強を大切にして日常のコミュニケーション、ディスカッションといったどんな場面であっても思いを伝えられるようにしていきたいです。英語を使う中でイントネーションも大切な要素の一つですが、それよりも自分の意見を文法や単語を駆使して伝えることが重要であるとも考えました。このような貴重な機会で得た経験を活かし、これから更に世界に関心を向け実際に当事者として多文化共生社会を作っていくことをイメージしながら勉強していきたいです。グローバル化に伴い、多文化共生が求められる世の中に変化しつつある中で今回の経験を通して相手のことを理解しよう、知りたいという気持ちがあれば難しいことではないと思いました。常に尊敬の意を持ち、自分の考えを恐れずに自分から発信することを大切にしてこれからも更に様々なバックグラウンドを持つ人々と関わっていききたいと思います。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有	(有の場合)	日にち	12/9	(対象)	全コース
学校名	静岡サレジオ高等学校		氏名	中島敬太		学年	高校一年

1 目的・応募理由

済州国際少年フォーラムでの主な目的は様々な文化の人たちと交流して多文化社会での共存や課題について議論し、多文化に対する考えを深めることです。議論だけではなく他の文化の人と一緒に時間を過ごす中での新しい発見や経験などを得るのも目的の一つです。日本では普通だけど多文化では普通じゃないことや、逆に多文化では普通だけど日本では普通じゃないことを多く学ぶことができると思います。これから日本も多文化社会に近づくと予想されているので今回のフォーラムでこれからの生活に活かせるような知識や経験を得たいと考えています。自分の知識を広めるだけではなく、他の地域からの人たちに日本や静岡県について色々共有し、魅力を伝えられたらと思っています。フォーラムでのほとんどの人とは母国語が違うので英語で上手にコミュニケーションをして、トラブルがない楽しい5日間にしたいです。

2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

1日目は韓国の伝統的なゲームをしたり、参加者のみんなと関わることができたフリータイムもありました。ルームメイトにも紹介され、自己紹介などを行いました。

2日目と3日目では自分のトピック（多文化社会で共存するための活動計画）について自分と他の17人の多文化からの高校生とディスカッションをし、他のグループの人々に自分たちのディスカッションで考えた内容を発表しました。発表はプレゼンテーションだけではなく、動画や歌など様々な方法で発表しているグループがありました。山登りやシトラスミュージアムにも行きました。



最後の日には各市（国）の文化や伝統的なものを紹介し合うカルチャーナイトがありました。歌やダンス、お菓子や飲み物を使っ

て多くの文化について学ぶことができました。済州で人気のある市場に行って買い物をたくさんしました。

3 感想等

初めて韓国に行けて日本では経験できないものをたくさん経験できてフォーラムに参加できてよかったと思えました。フォーラムではたくさんの友達ができている人たちと話すことができました。部屋には中国からの人とカンボジアからの人がいて、最初は少しコミュニケーションが大変でしたが5日間三人で平和で楽しい時間を過ごせてとても良かったです。トピックについての発表もステージでの発表に慣れない中で大変さはありませんでしたが、国籍を超えて議論しあい、作成したムービーは会場でもとても良い評価をもらえ自身にとってもチームにとっても良い総括となりました。ディスカッション中はみんなが一生懸命で、担当の先生も優しく、アイデアをたくさんくれて助けてくれました。プレゼンテーションだけではなく、カルチャーナイトやカルチャーツアーなどの様々なアクティビティーもあったため、グループ以外の人たちともたくさん交流することができ、たわいもない日常の会話からもたくさんの学びを得ることができました。今回のフォーラムでは多文化について考えを深めたり、新たな知識を得ることもできましたが、衣食住を共にすることでそれ以外の生活面などでも成長できたと思っています。新しいことや人に自ら挑戦する、話しかけてみるなどと今までは自分からではなく相手任せになっていたところをもっと積極的に自分から進んでできるようになった気がします。また、他の国の人たちと話していたときに「こんにちは」や「かわいい」、「いただきます」などちょっとした日本語を話してくれた人たちもいて嬉しく感じました。なかには日本語を勉強しているという人もいて、自分も日本語と英語だけではなくいろんな言語を話せるようになったらコミュニケーションも楽になるし多文化の人とのつながりも深められるのではないかと感じました。学んだことや経験したことを将来に活かし、今度このようなフォーラムがあった際には積極的に参加したいと思いました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有	(有の場合)	日にち	12/9	(対象)	全コース
学校名	静岡サレジオ高等学校		氏名	仁木悠人		学年	高校1年

1 目的・応募理由

このチェジュで行われた国際青少年フォーラムでは主に2つの目的を持って参加しました。

1つ目では国際フォーラムに参加した29もの多種多様な文化を持った国、そしてその国の人々とそれぞれの考え、価値観、意見を共有し協議することで新たな視点から世界の問題、特に私は目まぐるしく変化する国際社会の間で起こる争いについて様々な立場、環境、思想、考え方もつ同年代と話し合うことでそれぞれの共通を見つけ合いそれに沿った誰にも不利益の与えない解決策を見つけ出すことで平和に付いて考えることに重きをおいて考えました。また2つ目にそれぞれの共通言語である英語を通しコミュニケーションを行うことでそれぞれの理解し、そのうえで英語の技能を伸ばすこと。



2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

我々はこのたび、県の済州国際青少年フォーラムに参加し様々な経験をしてまいりました。初日は各国の方々と話すアイスブレイキング、他の地域から来た日本人や同じパネルの生徒と親睦を深めました。また同じパネルの人と私の場合は中国の武漢から来た人がルームメイトとなり、その後の約1週間をともに過ごしました。言語の通じない初対面の人との一週間は自分にとって新しい経験になりました。

2日目からは本格的に議題である紛争解決や、平和という言葉自体の定義、争う理由などについて話し合い、それぞれの価値観や意見を交換しました。他にも韓国の森林の中を散歩し自然

環境について学びました。

3 日目は話し合いをより発展させ、結論を導き出し、スライドを作り発表しました。

4 日目は済州の各地を周り視察をしました。植物園や地域の特産品であるみかんについての施設、繁華街にも足を運び、様々な韓国式の露店や韓国食、韓国スイーツを体験しました。その後閉会式へ移り表彰や修了証書授与を受けました。ほかにもカルチャーナイトという各国の伝統発表会を視聴し多くの国の伝統や食文化、踊りや習慣などを学び、最終日 5 日目に日本に帰国しました。

3 感想等

同年代の中でも最年少だった私はフォーラム開始直後は少し不安で言語の壁や年の差自分の英語の能力が周りよりも劣っていることを感じました。しかし、そんなことを気にしないで関わってくれる多くの人々に助けられ、同じ日本人や日系人の多いハワイの人々は特に私のことを気にかけてくれました。他にも少ししか喋れない英語で話しかけてくれる韓国人や様々な国の人々の暖かさを感じ改めて国と国を超えた助け合いを体験しました。その結果このフォーラムで多くの友人を作ることができ、日本のサブカルチャーについてや友人たちの食文化や生活様式、その国での現在の流行についてなど様々な話をすることができました。コミュニケーションが難しい中でも話しお互いを思いやるということは現在の日本でも同じことで、帰国後、静岡県で多くの外国人労働者が多くの中で当人やその子どもが言語の壁を感じるという話を聞いたとき私は済州での自分と重ね合わせて、そのような人たちの助けになりたいとより思うようになりました。

また、私はこのフォーラムを通して海外の特に東南アジアの人々と多く関わったことを一番新鮮に感じました。中東オマーンや、北欧フィンランド、カナダ、ハワイの人々も多く、たくさんの方の考え、立場、言語、価値観が飛び交う会となりました。現地の高校生のおもてなしや町や観光地への視察も、日本とは距離的にはとても近い地域でありながらも様々な国家としての文化の違いを改めて感じました。また在済州日本国総領事館の武田総領事に静岡とチェジュの農業に関するつながりを教えていただいたお話は特に印象に残りました。静岡のみかんやお茶がこの島の農業の発展に大きく影響したことには驚かされました。

このような特別な会に参加させていただいて本当にありがとうございました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		済州国際青少年フォーラム		訪問国		韓国	
校内発表会の有無		有	(有の場合)	日にち	12/9	(対象)	全コース
学校名	静岡サレジオ高等学校		氏名	山崎稀菜		学年	2年

1 目的・応募理由

私が済州国際青少年フォーラムに参加した目的は2つあります。

1つ目は、物事に対する考え方や視点を変化させることです。同じトピックに対して異なる環境で生まれ育った人々と様々な意見を持ち寄り、ディスカッションを行うということは自分自身が今まで考えたことがないようなアイデアや視点を生み出すことができるだろうと考えました。さらに、異なる文化に触れることによって自分が知らなかった国のことを知ることのできる自分の視野が広がることにつながるのではないかと考えました。

2つ目は語学力の向上です。このフォーラムではディスカッション以外の生活でも英語を使用して5日間過ごします。「自分が思っていることを英語で伝える」ということは日常生活で実践する機会が少ないため学んでいる英語を活かす良い機会だと考えました。



2 研修内容等（語学研修等の授業日程、休日の過ごし方、ホストファミリーなど）

パネルディスカッションと済州島の文化を知るためのアクティビティで構成されていました。

1日目：パネル内での自己紹介・ゲーム

2日目：開会式、カルチャーツアー（森林公園）、パネルディスカッション

3日目：パネルディスカッション、プレゼンテーション、K-popを学ぶ

4日目：カルチャーツアー（博物館、市場、植物園）、閉会式、カルチャーナイト

5日目：帰国

【開会式】

様々な方のスピーチを聞き、このフォーラムでどのようなことを学ぶのか、大切にすべきことは何なのかなどを教えていただきました。

【カルチャーツアー】

ディスカッションをするグループと共に英語会話をしながら様々な場所を巡り、濟州島の歴史や生活文化を学ぶことができました。

【パネルディスカッション・プレゼンテーション】

私は「プラスチックの使用を減らし、持続可能な消費パターンを開発するための行動」というトピックのディスカッションに参加しました。自分たちが書いたエッセイをもとに、どのような発表をしたら楽しんでもらえるかなどを考えプレゼンテーションを行いました。

【カルチャーナイト】

私達は、法被を着て清水港まつりで披露される「かっぱれエイサー」を披露しました。様々な国の文化や伝統、ダンスや歌などを知ることができとても興味深かったです。

【部屋での生活】

私はベトナム出身の子と中国出身の子の2人のルームメイトと同じ部屋でした。初日は全員とても静かで何を話せばいいのかわからず最低限の日常会話のみでしたが、日が経つにつれてお互いの文化について紹介し合ったり一日を振り返ってどうだったかなど様々な会話が生まれるようになりました。

3 感想等

はじめは自分の思っていることがしっかりと伝わるのか、自分を受け入れてくれるのかなど様々な心配や不安があり自分から話し出すことができませんでした。しかし、話しかけてくれる友達や話を引き出してくれる友達が多く、心配や不安はすぐになりました。自分の意見を英語で言うということはとても難しいことでしたが、伝わったときや賛同してくれたときはとても嬉しかったです。もちろん自分の英語力が足りず悔しい思いをすることやもどかしさを感じる場面もたくさんありましたが、それが原動力となりこれからもっと英語を勉強して様々な国の人ともっと話したいという強い気持ちも生まれました。また、このフォーラムで学んだこと、考えたことを実現するために自分自身の行動をもう一度見直し、これから生活していきたいとも思います。このような貴重な機会をいただき、自分自身を成長させることができたと感じると同時にまだまだ伸ばすことができる部分もあるのだと再認識することができました。



第二言語習得を促進する指導

浜松市立南陽中学校 教諭 杉谷 紘史



国名 フィリピン共和国
令和6年11月20日～12月3日

この20年ほどの間に、日本ではさまざまな英語教育の改革が行われ、子供たちの英語力は着実に進んできた。しかし、国が目標とする英語力のレベルまで到達できていない人数は思うように伸びていない。第二言語の習得においては、母国語や発達環境などが影響を与えているが、日本と同様に欧米から離れていて、英語を第二言語として教育を行っている国でも、日本よりも英語の習得が進む国も見られる。今回はその中の国の1つであるフィリピンでの英語習得の指導法等について調査したいと考え、本研修に臨んだ。

— 訪問先の概要 —

- ・ Claro M. Recto Information and Communication Technology High School
- ・ Pampanga High School
- ・ マニラ日本人学校
- ・ The Beacon School

Claro M. Recto Information and Communication Technology High School (G7～10・中1～高1年代) アンヘレス市にある公立学校。住宅街の中に位置し、限られた敷地の中にある学校。もとは小学校のみであったが、2008年から現在の学校の形となった。生徒数は年々増加し、現在は1800名を超える。中1と中2は7時から15時で授業を行っているが、他の学年は教室数が足りないため、中3は6時から12時、高1は12時から18時に授業を行っている。教育省の方針として、入学希望者は基本的には全員、受け入れている。

Pampanga High School (G7～12・中1～高3年代) サンフェルナンド市にある最大の公立学校。広大な敷地をもち、100年以上の歴史をもつ学校。校舎は複数あるが、生徒数が5000人を超えるため、学年ごとに6時から12時と12時から18時までを授業時間として、時差登校を行っている。普通コースの場合は基本的に全員が入学できるが、放課後にスポーツや演芸などの特別授業を受けることができるコースに入学したい場合は試験に合格しなければ入ることはできない。

マニラ日本人学校 (E1～H3・小1～中3年代) タギッグ市にある日本大使館附属の私立学校。海外にある日本人学校の中でも規模が大きい。小学部と中学部を合わせて約450人の児童生徒が在籍し、敷地も広く、設備も充実している。英会話を行う専用の教室や外国人講師が勤務するなど、英語教育に力を入れている。英語教育に対する保護者からの期待も大きい。また、現地理解教育として、フィリピンの歴史や文化などを授業や修学旅行などを通して学んでいる。

The Beacon School (K～G8・幼～中2年代) マカティ市にある私立学校。約300人の生徒が在籍する小規模なインターナショナルスクール。フィリピン国籍の子供が大半であるが、母国語は英語である。一部、英語を第二言語とする生徒も在籍しているため、彼らを対象とした特別な取り出し授業も行っている。フィリピンで初めて国際バカロレア教育を導入した学校。

— 調査結果 —

「英語」を使った授業

フィリピンの公立中学校では主に8教科が教えられている。教科の特性や母国語の確実な定着を図るため、タガログ語と歴史、道徳の3つは母国語で行われている。それ以外の英語や数学、理科などの5教科は教員からの指示や生徒の受け答えまで全て英語によって、授業が行われている。生徒の実態に応じて使う英語のレベルを変えたり、母国語によって補足したりすることはあるが、必要最低限である。インターナショナルスクールは全て英語、日本人学校は英語の授業のみとそれぞれの学校の目標に沿った取り組みとなっている。



授業中の生徒の様子

どの学校の英語の授業においても、授業のスピード感が重視されていた。リズムよく教員から出される質問や指示を子供たちは集中して聞き、テンポよく反応していく。教員側を子供たちに母国語に置き換えるような時間を与えるのではなく、英語の質問や指示をしっかりと英語で考えるように授業の進め方が意識されていた。

教育省の取り組み

フィリピンでは、日本の文部科学省にあたる教育省が学校教育において、さまざまな役割を果たしている。教育省が行う重要な役割の1つとしてカリキュラムの設定がある。細かい授業の進め方などは各教員に任されているが、1年間の中でどのような内容をどのように学習していくかは教育省が設定している。そのため、教員は子供たちへ指導することが明確になっている。教員による指導内容に差が少ないため、学期ごとの定期試験において英語や数学、理科などの教科は教育省が作成した試験問題を解いたりすることもある。子供たちへの評価に関しても、英語の授業では、パフォーマンステストで50%、ライティングテストで30%、提出課題で20%を評価と割合が定められているため、他の教員間や学校間での相違はあまりなく、統一された評価が可能となっているようである。



英語科教員研修会の様子

教育省は他にも子供たちの情報が記録されている文書をデジタル化して、ネット上で管理し、関係教職員のみが見られるようなシステムにしている。このことにより、紙媒体への記録の記入などがなくなり、教員の業務が改善されるだけでなく、子供の学習履歴なども蓄積されていくため、子供たちへの個に応じた指導が可能となっている。また、教員の指導技術を向上するために、研修の設定にも意欲的である。校外での研修会を定期的で開催したり、校長など管理職の教員が研修を受け、校内研修で伝達したりするなど教育に関する新しい情報を教員へ伝えている。研修を受けることによって、子供たちへの質の高い授業につながっている。

子供たちの学ぶ意欲

フィリピンの子供たちが幼少期や小学生の間にどれだけの量の英語に触れてきたかは個によって異なる。そのため、英語教育が始まる段階では理解力に差がある。しかし、その後、子供たちは授業の中で英語に触れる機会が多かったり、英語を学ぶことの必要性を普段の生活の中で感じたりするため、英語を学ぶ意欲は総じて高い。また、フィリピンの教員は子供の称揚が上手く、子供たちは褒められたいこともあって意欲的に授業に取り組んでいる。

日本の中学生は入試など限定的な場面で英語の習得を必要としていることが多い。もちろんフィリピンでも、高校や大学入試、将来の職業選択のために勉強していることもある。しかし、英語が生活に身近であることや将来なりたい姿がはっきりとしているため、英語学習に取り組む意識が日本に比べると圧倒的に高い。フィリピンとは違い、そのような環境下でない日本の子供たちにも、どのようにして高い意識をもたせることができるかが今後の課題である。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通じて学んだフィリピンの教育事情などについて、本校の教職員へ校内研修の場で紹介した。また、今後は地区の研修会などでも学んだことを発信していきたい。

本校の生徒には、担当する英語の授業でフィリピンの学校のことや文化などについて写真や実物を踏まえながら紹介した。また、フィリピンの学校や学校関係者とのつながりもできたので、生徒同士の交流を行うことができると考えている。

今後も第二言語の習得についての研究を進め、今回の研修で得たことをさらに意味あるものとしていきたい。

感想

フィリピンの公立学校は日本の学校に比べて、施設や設備の面で不足している部分はあるものの、そこに勤める教員は限られた中で最大限のことを行おうとしていた。教員の行う仕事量に対して、給与が少ないため、教員を志望する人間が少なかったり、高い給料を求めて海外へ働きに行ったりする人が多いようである。しかし、そのような中で、目の前にいる子供たちの成長のためにできることをしたいというフィリピンの先生たちの姿勢には見習うべき点が多かった。国や言語、教育システムなどさまざまな点が異なっても、子供たちの成長のために活動しているということは変わらないのだと実感することができた。自分自身も常に学び、子供たちのために指導力を高められる教員でありたい。

— おわりに —

今回の研修は自分自身の指導力向上につながる貴重な機会となりました。このような研修の機会を与えていただいた、ふじのくにグローバル人材育成基金に関係する皆様から感謝申し上げます。今後の教職員人生に必ず生かしていきます。

児童一人一人に寄り添った指導の実現を目指して

浜松市立豊岡小学校 教諭 宮崎 慎也



国名 フィンランド
令和6年10月27日～11月9日

「ICTを活用した教育の充実」「特別なニーズをもった児童と共に高め合うインクルーシブな学級経営」「第二言語としての英語習得」の3点を研修課題の中心としたい。

研修課題の設定理由は、フィンランドではジョブシャドーイングという研修スタイルで、これらの点について実際に現地の様子を体感できると同時に授業者との事後研修でフィードバックを得られる点も考慮した。

— 訪問先の概要 —

- ・ヴァンター市 カルタノンコスケン小学校（1年生から9年生）児童・生徒数約850人 教員数 約70人
- ・ラハティ市 カサッカマキ小学校 児童数約310人 教員数・カウンセラー・アシスタント計24人
- ・ヘルシンキ市 ラウッタサーリ小学校 児童数約220人 教員数20人

— 調査結果 —

個に対する温かな関わり

今回のフィンランド訪問で最も印象的だったのは、先生の児童への関わり方だ。ほとんどの先生が児童と近い距離で目と目を合わせてじっくりと話をする姿を非常に多く目にした。参観しながら私は、児童が「先生は自分のことを大切にしてくれている」と感じるだろうと思った。日本と比べて学級の児童数が少ないからできると片付けてしまえばそれまでだが、これからの自身の教員生活に生かしたいと感じた点だった。



2年生 2クラス合同授業

3人目のみ以外の先生が、個別指導中

ICTを活用した教育の充実

プロジェクター、スクリーンとしても活用できるホワイトボード、複数台のテレビモニター、実物投影機が各教室に標準装備。学校保管の1人1台端末の活用に加え、担当教師の許可のもと児童自身の1人1台のスマートフォンによる「Kahoot!」を用いた授業も行われていた。また「Wilma」という保護者が児童の出欠席や学習状況をインターネットを通じて把握できるシステムも運用されていた。さらに「WhatsApp」という携帯アプリを用いて教師が側面黒板に書かれた宿題を授業の進行と同時にクラスの保護者に送信する様子も見られた。これにより欠席児童のみならず、出席している児童の保護者も学習内容の進捗をリアルタイムで知ることができていた。様々な場面でICTを活用し効果的・効率的な業務が行われていた。

特別なニーズを持った児童と共に高め合うインクルーシブな学級経営

訪問先の先生にインクルーシブ教育について尋ねると、多くの先生に共通していたのは、「フィンランドにも特別支援学級や特別支援学校はあるが、理想は、私のクラスでなるべく全ての子供が共に学習することだ。」という発言だった。どの教室に行ってもイヤーマフがいくつも置いてあり、衝立の陰で学習できる環境が用意されていた。教室には児童数以上の椅子や机が常にあり、その中にはソファやビーズクッションのようにリラックスして座れるようデザインされたものもあり、そこで学習することも認められていた。また、ランチではベジタリアン用のメニューや、乳糖不耐症への配慮で、数種類の乳飲料も用意されていた。学校内での教育に限らず、フィンランド人の根底には、個々に求めるものが違うのは当然で、可能な限りその選択肢を提供するという考えがあるように感じた。こうした考えが多様な価値観を許容できる風土を育てるのだと感じた。

第二言語としての英語習得

母語であるフィンランド語に加え、多くの国民が英語を流暢に話し、スウェーデン語も読み書きは問題なく使用できるレベルとのことだった。多くの小学校で英語は1～3年生から、スウェーデン語は6年生から学習する。さらに小学校4～6年で選択外国語として、ドイツ語、スペイン語、フランス語の中から4つ目となる言語も学習する。私自身の体感としては、小学校4年生ぐらいを境に英語でのやりとりが可能となり始め、中学生ともなると、どの子もスラスラと英語を話しているように見えた。英語が流暢な理由について、多くの先生がSNSの普及を挙げた。もともとフィンランドで英語のテレビ番組を見ることもできたが、SNSの発達により、児童が英語に触れる機会が激増した。英語の習得についてはメリットが大きく、若い世代ほど英語の習熟ができていると話していた。英語を話せる場所があることや、英語で娯楽に親しむ機会などが児童の英語力向上に寄与しているようだった。英語授業の内容についても、20年ほど前までは文法重視だったが、今は「話す・聞く」に力を入れていると話していた。訪問で実感したことを今後の外国語指導に生かしていきたい。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

訪問中は現地校の子供たちと所属校の児童でオンラインによる簡単な国際交流を実践した。帰国後は担当学年の各クラスにてフィンランドの学校の様子や文化、学習内容等についてスライドショーで紹介を行った。所属校の教職員には、事前にフィンランドに関する質問を募集し、質問事項について現地調査の結果を伝達した。今後は研修で学んだことを自身の教育実践に生かすと共に、浜松市の発達支援教育を根幹に据えた教育活動・国際理解教育の推進に貢献したいと考えている。

感想

「ICTを活用した教育の充実」「特別なニーズをもった児童と共に高め合うインクルーシブな学級経営」「第二言語としての英語習得」の3つの視点全てで、フィンランドの教育の強みを体感することができた。ここで得た知見を今後の教育実践に生かしていきたい。

今回の訪問で「充実した施設・設備」「少人数クラス編成による手厚い教育支援」「多言語学習」「休み時間や給食のシステム」「教室の自由度の高い雰囲気」等、日本との違いを実感することが多かった。一方で子供たちにより良い教育を届けたいという熱意は、日本もフィンランドも変わることがなく、訪問先の先生方がより良い教育について、研修で活発に意見を交わす姿が印象的だった。教員同士の関係作りについても学ぶことが多かった。例えば、ラウッタサーリ小学校では、同じ学校の中でメンターとなる先生とペアを組み、カルタノンコスケン小学校では、「ウェルビーイング」や「授業改善」といったテーマごとに先生が小グループを作っていた。カサッカマキ小学校では、先生が1、4、7年生、2、5、8年生、3、6、9年生で縦割りの小グループを編成していた。このように意図をもって先生同士が小グループで自由な雰囲気で見聞交換をできる場を設定することで、お互いの教育観を共有したり、より良い授業実践につなげたりしていることに感銘を受けた。教員同士のよりよいコミュニケーションについても所属校の研修体制に取り入れられる可能性を感じた。今後の自身の教職生活で実践していきたい。

— おわりに —

2週間の研修をフィンランドで行うことができ、自分の教育観を広げることができました。自ら研修テーマや研修先、研修方法を設定可能だったことで、充実した学びの多い研修となりました。

最後に、本研修を実施するにあたり「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった企業・団体の皆様には心より感謝申し上げます。今後、フィンランドで得た知見を他の先生方に共有したり、自らの実践に生かしたりしていきたいと強く思っています。

オランダに学ぶ共生社会の在り方

浜松市立河輪小学校 教諭 山本 紗綾



国名 オランダ王国

令和6年 8月24日～9月1日

子供たちが自ら考え行動したり、協働的な活動を通して課題解決をしたりするための教授法の研修を通して、「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体化充実の実現につなげていく。また、自校を含め浜松市で増加傾向にある外国人児童生徒をはじめとした子供たちの多様化に伴い、個性を大切にし、他者を尊重する心情の育成を目指し、イノベティブな教育を学ぶ。

訪問先の概要

- ① SALTO International School ② SALTO Montessori De Trinoom ③ Automotive Campus
- ④ SintLucas ⑤ Jenaplanschool Hanevoet

- ① SALTO International School：4歳から12歳の子供がオランダ語と英語の両方を学習するインターナショナルスクールで、IPC（国際初等カリキュラム）を基盤としたバイリンガル教育を行っている。
- ② SALTO Montessori De Trinoom：モンテッソーリ教育のシステムを取り入れた小学校。子供たちは、グループごとに配置されたテーブルで一緒に活動をし、21世紀型スキルの習得に重点を置いた学習活動に取り組む。
- ③ Automotive Campus：自動車産業に関する企業、知識機関、教育機関が一体となった施設。約600人の学生を含む1250人以上の人々が、未来のモビリティ・ソリューションに取り組んでいる。
- ④ SintLucas：デザインや映像の分野に関する職業訓練を行う高等教育施設。個人学習だけでなく、実際のプロジェクトに取り組むカリキュラムがある。
- ⑤ Jenaplanschool Hanevoet：4歳から12歳までの子供が通うイエナプラン教育を基盤とした小学校。適正、学習、作業ペースに応じたグループ（複数学年）で教育を行っている。

調査結果

感情の共有

視察先の初等教育機関で必ず目にしたものが、「カラーモンスター」の掲示である。感情を色で表現することを通じて、自分あるいは相手の感情を視覚的に理解することができる。学級では、自分の名前が書かれたクリップをその日やその時の気持ちの場所に挟むことで、気持ちを学級内で共有している。誰かが「悲しい」気持ちにある時は、学級全体でその子の悲しみを共有し、寄り添う時間を作る場合もある。感情の共有は、人間関係を構築する上で重要な働きをもっており、知識や視野を広げることにもつながっている。「カラーモンスター」以外にも、自分にとって嫌なことがあ



視覚教材「カラーモンスター」

たとき、意見が対立したときにどのような流れで対処・解決をすることができるかイラストと言葉で示された掲示物や、遊びに誘うことが苦手だけれど誰かと一緒に遊びたい子のための「一緒にあそびませんか？」と書かれたベンチがあった。自分の気持ちを他者と共有することの有効性を幼少期から繰り返し学び身に付けることは、気持ち以外の面（知識や文化など）でも対話することの大切さに気付くことができる。

自立と責任感を促す自主的な学習

児童一人一人には「week task（一週間にやる課題）」が与えられ、それを基に学習を進めている。内容は、四則計算・スペル・リーディングなど大きな枠組みがあり、その中で何をするか細かく書かれている。児童は問

題集やタブレット端末を用いて課題をこなし、終わったらweek taskにチェックをしていく。個々に取り組む児童が多いが、必要であれば教師と一緒に学んだり、質問をしたりすることができる。低学年のうちは課題が明記されているが、高学年になると枠組みのみ提示され、自分で学習を計画し作り上げている。この方法は、児童が課題に対して当事者意識をもつことができ、主体性を持って取り組む姿勢やマインド計画、進捗状況に責任をもつことを促すことにつながっている。

学ぶ「場」や「方法」の自由度が高い。イェナプランやモンテッソーリ教育を基盤とした学校では、2学年もしくは3学年の児童で学級が構成されている。そのため、誰もが「教える」「教わる」両者の立場を経験することができる。一人で黙々と課題に取り組む児童がいれば、友人とともに助言をしながら取り組む児童たちもいた。「場」は教室内にとどまらず、廊下にも学習スペースが設置されていた。静かに学習したい子のための防音用イヤーマフを自由に使用することができたり、じっとすることが苦手な子のために揺れる椅子があったり、教具・教材にとどまらず個別最適化につながる学習環境が整備されていた。



同じ課題、異なる学習方法

多様性と相互理解

SALTO International Schoolは様々な国籍の児童が通っているため、それぞれの文化を尊重した取組を行っている。在籍児童の母国の祝いごとがあるときは、学校全体でその文化を体験する時間を設けたり、多国語の本を図書コーナーに置いたりする工夫がされていた。そのような取組は、互いの文化を理解する大きな機会となり、子供たちからも異なる文化に対する関心の高さを感じられた。

Jenaplanschool Hanevoetでは、ワールドオリエンテーション（日本の総合的な学習の時間と近いもの）という学習時間がある。ワールドは諸外国の世界だけでなく、自分と他者で構成される世界や自然という捉えだ。前項共通のテーマを基に、各グループでテーマを定め、そのテーマに沿って学習を進める。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通して学んだ学習環境の在り方について、校内研修で報告する。視察先の多くの先生方は、「子供を信じて、任せる。人は失敗から成長を得る。」ことを大切にされていたことや、共有することの重要性について話していたことが印象的だった。目の前のパソコンと向き合い、黙々と仕事をするイメージが強い日本の職員室環境を、もっと対話と笑顔のあふれる場にするために、オランダの教育機関で働く先生方を見習った行動を率先して行いたい。

感想

オランダの教育が世界的に注目されるのは、教育に対する大人たちの考え方が大きな影響を与えている。オランダには「6点文化」という「6割できれば良い、そこそこで大丈夫。」と考える文化背景がある。あまり人と比べない、好きなことを伸ばしたい子供とそれを後押しする大人の姿が、子供の幸福度につながっていると感じた。また、教具や教材、学習環境の工夫をすることで学びを楽しいものにすることができると再確認できた。学びの中で多くの対話をし、互いを知ることが自分も世界を構築する一員であることを実感できる。悲しみも喜びも共有する、人と関わることに労力を惜しまないオランダの人々の姿勢を見習い、大人であり教師である自分がそのような姿を子供たちに見せていくことで、対話を通して相互理解し合う人間の育成に関与していきたい。

— おわりに —

この度は、オランダの教育視察をする機会をいただき、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった皆様には、心より感謝申し上げます。視察を通して多くの方々と出会い、刺激を受けるとともに知見を広げることができました。今回の経験を今後の教育活動に生かし、教育の発展に貢献していきたいと思っております。

シドニー日本人国際学校におけるバイリンガル・バイカルチュラル教育の現状



国名 オーストラリア

令和6年8月30日～9月14日

沼津市立愛鷹中学校 教諭 井出 那侑子

私は、今年度沼津市の英語の教科リーダーを務めさせていただくことになり、「学びを深める」ことについて、どのような効果的な方法があるのかを考えてきた。そのような中で、多文化共生で多様性を認め合うオーストラリアでは、異なる文化背景をもつ児童・生徒がどのように学びを深めていくのかという点に興味をもった。シドニー日本人国際学級では、英語と日本語を母語とする児童・生徒と一緒に生活し、それぞれ習熟度の異なる言語レベルの児童・生徒が、教科によっては一緒に授業を受けている。日本の学校においても、近年では外国人児童・生徒数が増加し、個別に日本語指導をしたり、国際学級を設け、日本語指導をしたりする学校もある。そのような現状の中、学級に外国人児童・生徒がいる良さを授業の中でも生かし、全員にとってわかりやすい、深い学びのある授業実践のヒントを得たいと考え、研修テーマを設定し研修に臨んだ。

－ 訪問先の概要 －

① シドニー日本人国際学校 ② Monte Sant' Angelo Mercy College ③ Macquarie University

- ① 小学1年生～中学3年生までの日本人学級と小学1年生～小学6年生までの国際学級があり、日本の教育課程とNSW州の教育課程による授業が行われている。技能教科はミックス授業といって日本人学級と国際学級の生徒が共に授業を受けている。
- ② 1875年に設立されたカトリックの中高一貫教育の女子校。NSW州の教育課程とバカロレア教育の過程によるカリキュラムを実施している。
- ③ 1964年に設立された文学部、理工学部、医学・健康・人間学部など複数の学部のある質の高い教育活動を行っている大学。広大なキャンパスはアボリジニの土地にあり一部は国立公園となっている。

－ 調査結果 －

プレゼンテーション、ディベートやディスカッションを重視した教育

オーストラリアの教育制度は、国の指針である「オーストラリアのカリキュラム」を元に、各州が独自の教育課程をもち教育を実践しているが、一般的には、就学1年前から中学3年生までが、義務教育である。その後、自分の進路に合わせて進学や就職の準備を行う。自己表現力をつけるため、プレゼンテーションやディベート等に力を入れて行っている。幼稚園では、「Tell & Show」といって、自分のお気に入りのものをみんなに紹介するという活動を行っている。教育学部においても、講義式が主流ではなく、昨今の教育問題に関して学生が自ら問題を提起し、それについて調べ、ディスカッションするという、問題解決型の授業を実践している。



Macquarie 大学でくつろぐ学生

「わからない」と当たり前と言えることの大切さ

シドニー日本人国際学校では、文化背景の異なる児童・生徒と一緒に授業を受け、学校行事を行っている。わからないことがあるのは当然のことで、「どういうことですか?」「わかりません。」「～ということ?」等の質問やつぶやきが自然に発せられ、それに対して学級の仲間や先生が教えたり、一緒に考えたりしていた。日本に住んでいると、分かって当然と考えてしまったり、相手の反応を予測してしまったりすることがあるが、シドニー日本人国際学級では、知らないことやわからないことを、積極的に聞いていた。先生方は、それぞれの文化の良さを引き出すように、児童・生徒のつぶやきをひろったり、声掛けをしたりして、授業が活気のあるものとなっていた。日本人学級と国際学級の生徒は、技能教科を一緒に受けるが、その中でも自然に教え合いが行われていた。先生、児童・生徒が自然に日本語と英語を使い分けることで、それを聞いている周りの子供たちも場面に合わせて言語を覚えたり、理解を深めたりしていた。

国際学級では、日本語科の授業があるが、そこでも英語と日本語が飛び交い、上手に使い分けコミュニケーションをとりながら、言語を習得していた。異なる母語の同じ年齢の児童・生徒が共に生活をしたり、遊んだりすることで、その年齢に合った言語を身に付けることができることがよくわかった。日本でも各学級にいる外国人の児童・生徒に対して、教えてあげるといふ態度ではなく、互いに知らないことを学び合う、というスタンスで一緒に過ごすことが大切で、「わからない」ということを恥ずかしながら言える信頼関係を築いたり学習環境を整えることが学びを深める大前提となることが、わかった。



体育のミックス授業の様子

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通じて学んだことや感じたこと、見聞きしたことなどを、沼津市の英語教科リーダーとして、英語の研修会で報告したり、日々の授業の中で、生徒に紹介したり、研究授業の授業作りに役立てていきたい。また、本校では、海外に行ったことがある生徒が少なく、海外に行くことに対して、難しいことと考えていたり、大きな抵抗感をもっていたりする生徒が多い。そこで海外を身近に感じてもらうために、オーストラリアの学校、公共の交通機関、スーパーの様子などを、授業の中で生徒に示した。また、日本とオーストラリアを比べることで、世界に誇れる日本の良さについても再認識し、オーストラリアのおおらかな国民性や雰囲気などについても、生徒にエピソードを交えて話をすることで、生徒が世界に目を向け、海外に興味をもつきっかけとしたい。

感想

「学びを深める」ことに関して、授業における教師の仕掛けである問いが重要になってくるが、前提として、人と違う意見をもつことや、自由な発想で意見を言える教室内の環境や雰囲気、子供たちのつぶやきを見逃さずに拾い、それを元に授業を進めていくことが大切だと実感した。シドニー日本人国際学校の先生方の真摯に生徒に向き合い、授業実践する姿勢を常に心掛け、外国人児童生徒がいる場合は、通常の指示や指導だけでなく、場合によっては「やさしい日本語」や英語や児童・生徒の母語を用い、全員にとってわかりやすい授業作りを目指したい。そして、多様な意見を言いやすい環境を作り、児童・生徒のつぶやきを大切にする教育実践をしたい。

— おわりに —

本研修を実践するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった企業・団体のみなさまには、心より感謝申し上げますとともに、本研修で学んだことや得たことを日々の授業で役立てたり、研修で還元したりしていきたいと考えております。ありがとうございました。

オーストラリアから学ぶ多様性

焼津市立 大井川東小学校 教諭 横井 幸南



国名 オーストラリア
令和6年7月26日～8月3日

現在日本では、外国人児童生徒が増えており、今後も増えていくとされている。その中で互いの文化や考え方を理解し互いに尊重しあいながら生活していくことが静岡県教育振興計画でも示されている。そこで、多文化多国籍国家であるオーストラリアの文化や生活を知り、学んだことを子供たちに伝えることによって、グローバル化が進む日本でお互いの存在や考え方を大切にし、日本人としてのよさや文化を大切にしていける子供たちの育成につながると考え本研修を希望した。

さらに小学校における外国語活動・外国語科の充実に向け、子供たちの「他国について知りたい。」「聞いてみたい。」という意欲を引き出すため、まず自分自身が他国の文化や生活について学ぶことが必要だと考えた。

— 訪問先の概要 —

Mount Carmel College

Mount Carmel Collegeは焼津市の姉妹都市である、オーストラリアのタスマニア州ホバートにあるキリスト教系の女子校である。学校は4学期制で、クラスごとに赤・緑・黄色の3つのチームに分かれており、ドラマや運動などでチームごとに協力した取り組みを行っている。幼児から高校生までが通っており全校で約500人。日本の小学校にあたるPrimaryでは、270人程の児童が学んでいる。外国人児童生徒は全体の約15パーセントおり、中国やインド、マレーシアやインドネシアなど多くの国とつながりのある児童が在籍している。Mount Carmel Collegeでは英語や歴史、数学、社会、体育の他に宗教教育や日本語、芸術（音楽やドラマなど）の教科を学習している。一人一台の端末も導入されており、それらを活用した授業が行われている。それに加えて、Positive EducationやWellbeingについて授業も行われていた。その授業では自分の体や心を大切にしたり、自分の強みについて考えたりする時間が設けられていた。

— 調査結果 —

日本語教育

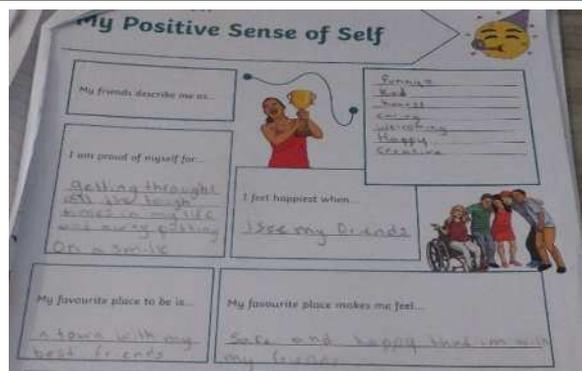
Mount Carmel Collegeでは、3歳～16歳までの子供たちが通っているが、一番幼い3歳の子供から日本語や日本の文化に触れる時間が設けられていた。オーストラリアの多くの学校では幼い時期から英語だけでなく、他の言語を勉強する機会が設けられている。インドネシアや日本語を勉強している学校が多いそうだがMount Carmel Collegeでは古くから関係がある日本語の授業を取り入れている。Primaryでは、授業の開始時に箏や尺八、三味線による日本音楽の演奏をICT機器を用いて聴き、日本の文化に触れてから授業を行っていた。授業では児童はひらがな表を見ながら、「ごはん」や「ぎょうざ」などの英語を日本語に変えて書いたり読んだりする授業が行われていた。最後には日本の動画を全体で視聴し、日本の伝統的な食べ物や文化について知る時間も設けられているなど、自国だけでなく他国の文化も知り、尊重しようという雰囲気を感じることができた。



日本語の授業（ひらがな表を活用して書く様子）

Positive education ・ Wellbeingの授業

Mount Carmel College ではPositive education や Wellbeingの授業も行われている。オーストラリアでは精神疾患が社会問題になりつつあるため、小学校段階から自分のことについて知ったり、どのように気持ちをコントロールしたらよいかを学んだりする機会が設定されていた。週に1度、専門の先生が授業を行い、自分のよさや自分の特性を知ったり、「こんな時にはどうしたらいいか。」を考えることで実際の生活に生かせるよう授業を行ったりしていた。



Positive educationのノート

多文化共生を支える多様な授業

Mount Carmel Collegeでは日本語の学習だけでなく、他の文化の学習を通して多文化共生の気持ちを醸成していることが分かった。日本のように、社会科の授業でも他国について学んでいた。カトリック系の学校であるので「religion」という宗教の授業がある。しかしこの授業では、キリスト教についての授業だけでなく他の宗教についても学び、互いの考え方を尊重して生きていくことができるようにされていた。

— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通じて学んだことについては、まず校内の職員と共有し、子供たちにオーストラリアの文化や生活について報告する機会を設ける。子供たちがオーストラリアとの生活や文化の違いに興味を抱き、他国への興味をもつとともに、外国語の授業への意欲を高めたり、日本のよさについて気付いたりするきっかけになるようにしていきたい。また機会があれば自校以外の場でも報告していきたい。

感想

オーストラリアの学校では、多様な人種が共に学んでいる様子を目で見て学ぶことができた。特に日本語教育が熱心に行われていることには驚いた。日本語だけでなくPositive educationやWellbeing、religionなどの授業を通して自分や自分たちの文化の大切さを感じることができる機会がたくさん設定されているからこそ、他の文化を受け入れることができるのだと感じた。今後は子供たちと関わっていく中で、相手のよさを受け入れることの大切さを伝えるだけでなく、その子自身のよさを本人が感じ取ることができるようにしていきたい。

また、自分自身もオーストラリアとの生活や文化の違いで知らなかった部分が多くあった。子供たちに本研修で感じたことを伝えて、文化や生活の理解の違いに目を向け、日本のよさに改めて気付いたり、他の国について知る楽しさを感じたりするきっかけを作っていきたい。

— おわりに —

本研修を実践するにあたり、「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった皆様には心より感謝申し上げます。自分自身で学びたいテーマについて、行き先や研修方法を設定することができ、充実した学びのある研修となりました。今後も多くの子供たちが、幅広い文化や考え方をお互いに受け入れられるよう、海外の文化や生活、日本のよさについて伝えていきます。

幼児期・児童期における英語教育の在り方やカリキュラムの考察



国名 オーストラリア

令和6年 12月1日～12月7日

伊豆の国市立菰山小学校 教諭 渡邊 優

テーマ設定理由

伊豆の国市では市の方針として昨年度より、幼・保育園から外国語（英語）活動が実施されている。本校でも1年生から外国語活動が行われており、外国語教育の早期教育の良さを感じている。一方、カリキュラムや指導法についての課題も多く感じている。英語専科として外国語活動の授業を行う中で、本研修を通して今後の保幼小中の外国語教育の発展に繋がりたいと思い、本テーマを設定した。

— 訪問先の概要 —

・Sydney Japanese International School (国際部・日本人部)

・Konomi kindergarten International

・Sydney Japanese International School (国際学級・日本人学級)

シドニー日本人国際学校は、日本人学校と国際学級の2つのカリキュラムで学べる一つの学校である。日本人学級では、文部科学省の学習指導要領に準拠した教育課程を編成しており、日本語による授業を行っているほか、英語科教員による「話せるようになること」を目標とした英語の授業を週5時間実施している。国際学級では、英語での授業を基本としており、NSC州の要領に準拠した教育課程を編成している。図画工作や体育、音楽などの教科において、日本人学級と国際学級の合同授業も実施しており、両国の言語に触れながら互いの国の言葉や文化を受け入れたり、理解したりすることを目的としたカリキュラムを設けている。

・Konomi Kindergarten International

木の実幼稚園は、シドニーにおいて日本人による最初のインターナショナルな幼稚園として1990年8月に創設され、英語と日本語の二カ国語による質の高い保育を行っている。園児たちが自分の体験をより深く理解できるように保育計画を立てている。バイリンガル教育の中で、オーストラリアと日本の文化が融合したカリキュラムが特色である。また、行事を通じた学びを実践することで、園児たちの想像力を養いながら、個々のアイデンティティを育てている。

— 調査結果 —

Sydney International School 英語学習について～どの様に学んでいくのか～

シドニー日本人国際学校の国際学級では、5歳になる年（日本の年長）から義務教育が始まる。私は主に、Kindyクラス（5歳）やYear 1の（小学校1年生）の授業を参観させて頂いた。私が驚いたのは、Kindyクラスの子供たちが、担任の話す英語をしっかりと聞き取っていたり、お互いに話をしたりしていたことだった。また、フォニックスを大切にしていることが印象に残った。入学当初から毎日発音の練習をくり返し行っているとのことだった。

参観させて頂いた授業では、1クラスの中で3つに分かれ、Reading, Writing（文章構成）、タブレット学習を行っていた。Readingでは、先生が読み絵本を聞きながらどんな話なのか内容を理解したり、単語の意味を学習したりしていた。1つ1つの単語の練習をするのではなく、絵本の中のイラスト、前後の文章の意味、先生が出すヒント（動作）から内容を捉えていた。また、文章構成を学ぶグループも、最初から文法を学ぶわけではない。例えば複数形を学ぶ時、何回もイラストと文章を見せることで、子供たち自身が違いに気づき、2つ以上の時に「s」が付くということ、自然に理解するようにしていた。タブレット学習では、既習事項を1人ずつタブレットを使って復習をしていた。



Sydney International School 他言語を学ぶことについて

国際学級（普段英語で話す）の子供たちが、日本語を学ぶ授業も参観させて頂いた。国際色豊かなオーストラリアは、それぞれ家庭環境も様々で、家に帰れば英語、ロシア語、中国語、様々な言語で会話をする子供たちがどの様に他言語（日本語）を学ぶのか興味深かった。教師側もその時間はできるだけ全て日本語で話すことを心掛けることを大切にしていた。教室の環境を日本風にしたり、子供たちが興味を持ちそうな日本のおもちゃ（けん玉、こま等）も置いてあったりもした。担任の先生からの話では、様々な言語を家庭で使う子供たちは、家に帰ってもなかなか日本語を使う機会がない（必要感を感じない）ため、まずは、学校生活で使う言葉に絞って、日本語を教えていき、子供たちが日本語を使う必要感を得られるようにしているということを知った。

Konomi Kindergarten International 幼児期からの言語学習

木の実幼稚園では幼児期より、人権教育・人前で話すこと・食育・ICT教育・STEM教育など様々な事を大切にし、園児一人一人の自我意識の確立を目指していることが分かった。幼児期の子供がこれを達成するためには、担任が一人一人の事をよく見て理解することが必要である。園では、子供一人一人の記録を取り、その子に合った指導や対応をしていることが、大変素晴らしいと思った。

“Show and Tell”の活動では、幼稚園の時から自分の想いをもち、皆の前で話すことを大切にしていた。テーマに沿って話をし、例えば、「自分たちで園でペットを育ててみたい」というテーマで話した際には、自分たちの手でペットを育てるには、どんなことが必要なのか計画を立てて話す姿もあったと聞いた。これらの話し合いの活動が、小学校に入った時にも大いに生かさせると感じた。



— 研修を終えて —

研修成果の活用・還元

本研修を通して、外国語の授業の中で活用できることも多くあると感じた。①子供たちに新しい言葉を教える時は、ただ発音を繰り返してALTの後に続いて言ったりするのではなく、ICTや視覚的に分かる教材を用意し、子供たち自身がどんな意味なのか考え想像することで力を付けていく。②単元を学ぶ時のゴール（目的）をはっきりさせ、目的を達成するためにどんな言葉を学んだり、どんな話し方が必要なのか考えたりして学習に取り組みせていく。③他国の文化を多く伝えることで、英語を学ぶことの楽しさや必然性を感じるようにもしていく。④1、2年生の授業にフォニックスを取り入れ、低学年の時からたくさんの音に触れることで、中学年や高学年の外国語学習に繋げていく。以上4つのことを実践し、今後も英語を楽しく学ぶ環境を整えていきたい。

感想

外国語（英語）を学ぶことの大前提として、「どれだけ必要感を感じられるか」が大切だと思った。本校で外国語の授業を行っていても、子供たちの中には外国語を学ぶ必要感を感じていなかったり、翻訳機能を使って会話をしたりするから学ばなくても大丈夫だと考えている児童もいる。教師側が、できるだけ他国の文化を紹介したり、英語を学ぶことでどんな良いことがあるのか伝えたりすることで、子供たちに英語を学ぶことの必要性を感じてもらうことが重要だと改めて認識した。また、何より相手とのコミュニケーションを取ることや、英語を学ぶことが楽しいと感じられるようになってほしいと思いを強く抱き、それに向けて、教材研究や授業を行っていききたい。

— おわりに —

本研修を実施するに当たり「ふじのくにグローバル人材育成事業」に支援して下さった企業・団体の皆様には、心より感謝申し上げます。今回の研修で学んだことを、これからの教育活動にも生かしていきたいと思えます。

グローバルハイスクール

県都「静岡市」における社会的な課題について海外高校生と協働し
取り組むことを通して、国際的な役割を担う人材を育成する
(静岡県立静岡城北高等学校)



1 グローバル教育の概要

本校は、グローバル科併置のメリットを生かし、広い視野で地域の課題を発見・解決する探究活動を通して、将来の Shizuoka を支え、行動する人材を育成するため、学校全体でグローバル教育を推進している。グローバル科では、『『グローバル課題探究』を軸とした3年間のシラバス』に基づき教育活動を展開し、海外の高校生や留学生の視点を取り入れた探究活動と、その集大成である海外異文化体験の充実・改善に力を入れている。また、令和5年度に第2学年を中心に行った民間のオンライン英会話を活用した外国人講師との英語相互交流授業の成果と課題を踏まえ、令和6年度からは全校実施を開始した。全生徒の英語コミュニケーション能力の向上につながることを期待する。

2 実施計画と具体的内容

- (1) 探究を軸としたグローバル科海外異文化体験プログラムの改善
 - ①系統的・循環的な「グローバル課題探究」
 - ②海外異文化体験
- (2) オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業に関する実証研究
 - ①民間のオンライン英会話を活用した探究的な授業の実践
 - ②英語力の測定
- (3) 探究を軸とした全校体制のグローバル教育システムの構築
グローバル科の活動の普通科への波及



3 令和6年度における取組

- (1) 探究を軸としたグローバル科海外異文化体験プログラムの構築(充実・改善)
 - ①系統的・循環的な「グローバル課題探究」(グローバル科1～3年生)
 - ア グローバル科縦割り授業(通年)
科内の交流、探究活動の共有、先輩から後輩への助言など
 - イ 静岡大学留学生との相互交流
5/10 留学生来校(グローバル科2年生) 12/13 静岡大学訪問(グローバル科1年生)
 - ウ サマーセミナー(8/6～8)
県内のALT7人と3日間の英語研修(グローバル科1年生)
 - エ グローバルな交流(グローバルな舞台で活躍している社会人との交流)
6/14 山口佳奈子氏(デロイトトーマツコンサルティング勤務)「コンサルティングの知見に基づいた問題解決のプロセスの体験」
11/1 井島知哉氏(三井物産勤務)「身近な社会問題に関するワークショップ」
1/10 白畑知彦氏(静岡大学名誉教授)「第二言語習得研究の魅力について」
 - オ グローバル社会見学(1/23～24)
東京学芸大学附属国際中等教育学校、神田外語大学、合同会社DMM訪問(グローバル科1年生)
 - カ 留学生の受入れ(9月～11月インドネシア、9月～翌7月台湾)
 - ②海外異文化体験(11/30～12/8)(グローバル科2年生)
カリフォルニア州立ロスアラミトス高校でのプレゼンテーション・授業参加、ホームステイ



(2) オンラインによる外国人講師との英語相互交流授業の導入と実証研究

①民間のオンライン英会話の英語授業での活用

令和5年度は第2学年の全生徒を対象に、令和6年度は全校生徒を対象に、カリキュラム上の英語授業にオンラインによる外国人講師との相互交流を導入した。学習指導要領に基づき、教科書の内容に関する「探究的な問い」について、生徒一人ひとりがそれぞれの英語力や価値観に応じて個別に外国人講師と考えを深め合い、そこでの学びをクラスで共有し、新たな問いに向かうというサイクルを基本とした。年間20回実施した。

②英語力の測定

生徒同士による対話よりもオンラインによる外国人講師との対話を通して、生徒の英語を聞く能力が向上することがわかった。外国人講師から与えられる言語的な修正フィードバックが質・量ともに豊かであることがこの結果の要因として考えられる。現在、英語を話す能力の分析を行っている。

(3) 探究を軸とした全校体制のグローバル教育システムの構築

- ①1・2年生校内探究活動発表会(1/29) ②英検面接ボランティアの生徒による面接練習(年10回) ③グローバル係による学校HPでの情報発信



4 研究の成果と課題

令和5年度、4年ぶりに海外研修を再開し、カリフォルニア州立ロスアラミトス高校との相互訪問を行った。対面交流が生徒の成長に及ぼす影響の大きさを再認識した。また、探究サイクルにおける海外研修の位置付けや実施内容についての課題を見出した。さらに、本校を会場に日本文化を学ぶ米国人生徒と普通科の1・2年生の全生徒が交流できたことは、普通科のグローバル教育推進に大きな意義があった。

令和5年度の海外研修では、生徒がそれぞれの探究発表を現地の高校生の前で英語で行った。大変チャレンジングな取組であり、それぞれの生徒が得られたものは大きかった。一方、生徒・教員双方にとって負担が極めて大きく、準備不足の生徒は十分な成果を得られなかったことが課題となった。このことを踏まえ、令和6年度は、「持続可能な海外研修」をテーマに内容を改善した。生徒を複数のグループに分け、日本や静岡の文化を探究し紹介する内容に変更した。これにより、聴衆である現地高校生の興味をより喚起し、エンゲージメントを高められただけでなく、本校生徒が協働する力を高めることもできた。グローバルハイスクール事業があったからこそ、本校は2年連続で海外研修を実施できた。本校の目指す探究ベースの海外研修の方向性を探り、現時点での最適解を得られたことに大変感謝している。

コロナウイルス感染症拡大の「silver lining」とも言える「一人一台端末」を活用したオンラインによる「個別最適な学び」の具現として、英語授業にオンライン英会話を導入した。学習指導要領に基づき、教科書の内容に関する探究的な問いを設定し、生徒は外国人講師と議論を重ねた。本校外国語科にはこの取組に関する指導のノウハウが蓄積されてきている。生徒の英語力については、生徒同士の対話と比較して、リスニング能力の向上に肯定的な影響を及ぼすことが統計的に認められた。現在、スピーキング能力の伸長について検証している。

日本人の英語力向上は、グローバル市場が拡大する中で喫緊の課題である。日本人生徒同士が疑似的に英語で対話を行うことに加え、比較的安価に外国人講師との交流する環境を実現できるこの取り組みの成果について、検証を続けることに価値があると考えられる。来年度以降もオンライン英会話の授業での活用について研究を継続し、効果的な授業モデルの構築を目指したい。



1 グローバル教育の概要

本校は、地域社会等から、地域に根差して国際社会で活躍するグローバルリーダーとして将来の国家・社会を担い人類の発展に貢献する人材の育成を要請されている。特に、大学等に進学後、あるいは地域外で就業後に出身地域にUターンするなどして、それまでのキャリアを生かして地域社会の発展を推進する人材の育成が求められている。生徒が自ら地域課題等を設定し、その解決を図るための方法を考えるとともに、課題を解決するための資質、能力を向上させることを目標として、海外での実地研修や国内での大学等との連携等の在り方について研究し、実践する。

2 目標及び方法

(1) 地域の現状を知り、地域の課題を認識するとともに生徒が自ら地域への関わり方について考察することを通して、課題の解決に主体的に取り組もうとする態度等を育てる方策を試し、検証する。

○地域学習（《1年》校外学習、《1年理数科》地球科学研修、《2年文系探究コース》伊豆半島研修）

(2) 国内外での実地研修や大学等外部機関との連携を通して、地域課題等を解決するために必要な資質、能力を向上させる方策を実践し、検証していく。 ※（ ）内は連携機関

○イギリス研修（国際教育文化交流協会） ○English browsing room

○《2年理数科》アメリカ海外研修旅行（Polytechnic School）

○《2年文系探究コース》シンガポール等海外研修旅行 ○オンライン英会話（静岡県立大学）

○サイエンスダイアログ（日本学術振興会） ○グローバル・スタディーズ・プログラム（ISA）

○アメリカ現地校との交流（Polytechnic School）

3 実施内容

(1) 地域学習

ア 校外学習《第1学年》

本校入学直後、1年生全員で本校周辺の史跡等を周遊し、本校が所在する地域について学習する。コースは、韮山城址→江川邸（国重要文化財）→本立寺（学祖：江川坦庵公、開設者：柏木忠俊公墓墓所）→韮山反射炉（世界文化遺産）→願成就院（国宝仏像安置）をホームルーム単位で分散して訪問する。

イ 地球科学研修《1年理数科》

在住する伊豆半島の地質について、専門家による講義とフィールドワークにより知識を深めるとともに、地質学的、生物学的見地から伊豆半島の成り立ちについて考察する。

ウ 伊豆半島研修《2年文系探究コース》

在住する伊豆、駿東地域について、地域の実情や地域資源を知り、問題点を考えるとともに、地域を活性化するための方策等を考察し、提言する力を身に付ける。



校外学習



地球科学研修



伊豆半島研修

(2) 国内外での実地研修、外部機関との連携

ア イギリス研修

夏季休業中の10日間、1、2年生の希望者40人がイギリス・ボーンマス市の語学学校で語学研修を受け、ホームステイを体験した。2年間で約80人が参加した。

イ アメリカ海外研修旅行

11月の6日間、2年生理数科生徒がアメリカ・ロサンゼルスを訪れ、最先端の科学技術を見聞するとともに、現地の高校生と交流しホームステイを体験した。2年間で約80人が参加した。

ウ シンガポール等海外研修旅行

11月の5日間、2年生文系探究コース約70人がシンガポール等を訪問、異文化体験を行った。



エ オンライン英会話

静岡県立大学言語コミュニケーション研究センターの外国人教員とオンラインで結び、英会話のトレーニングを実施。週2回×10週を前、後期の2期実施。2年間で56人が取り組んだ。

オ サイエンスダイアログ

日本学術振興会を通して派遣された大学の外国人研究者による英語での講義。理系、文系をそれぞれ1回、計年2回実施。2年間で約180人が参加した。

カ グローバル・スタディーズ・プログラム

ISAによるプログラム。夏季休業中の5日間、他校生とともに外国人留学生とワークショップを行い、外国人とのコミュニケーション能力の向上を図った。2年間で20人が参加した。

キ English browsing roomの開設

英文の書籍や視聴覚資料を配備。生徒が一人一台端末等を使って視聴できるようにした。

ク アメリカ現地校との交流

理数科海外研修旅行で訪問するロサンゼルス近郊パサディナ市の Polytechnic School との交流。今年度、教員2人が来校し、来年度の本校訪問や姉妹校提携について協議した。



4 成果と課題

(1) 成果

- ・生徒の海外渡航ニーズに対応、コミュニケーションの機会が増え、英語学習、異文化体験への意欲を喚起することができた。
- ・探究活動を行う上での参考となり、その充実に生かすことができた。

(2) 課題

- ・海外での実地研修は、景気の動向、為替相場等の影響により家計の負担が大きくなった。
- ・希望する生徒、理数科や文系探究コースの生徒に限定され、全校生徒に対応できなかった。
- ・海外研修旅行等の体験や学習成果を地域課題の解決と直結させるプログラムの工夫が必要である。



1 グローバル教育の概要

誰もが住みやすい地域（富士宮市）を創る人材を育てるため、地域に根ざした国際交流の推進として、友好都市である台南市の市立永仁高級中學校と互いの地域の魅力への理解を深める交流を行い、友好都市のこれからの絆を強める。また、多様性を享受する心を育むため、地域に住む外国にルーツを持つ人々と共に学ぶ共生共育を通して、その人々が地域で暮らす中で抱える課題を共有し、課題解決への道を探究する。

2 実施計画と具体的内容

- (1) ACC 国際交流学園の学生や地域で働く外国人と料理教室や部活動参加を通して交流を深める。
- (2) 台南市の高校との交流を通して海外への興味を広げ、修学旅行海外コースへの参加希望者 50 名以上とする。また、永仁高級中學校とのオンラインや対面での交流を継続したり、外国ルーツ生徒の校内発表や、生徒が様々な制度を利用して海外渡航経験を積むことで、生徒の海外への興味を広げる。
- (3) 民間試験（実用英語技能検定を予定）を活用し、英語力向上へのモチベーションと総合力を測る。指標として、受検者数の増加率と合格者数を用いる。受検者数前年比 120%、受検級合格率 70%、準 2 級以上の合格者 15%以上を目標とする。

3 各年度における取組

令和 5 年度

通年 ・ オンライン英会話実施（1 年生） 「論理表現」の授業で、月に 2 回程度、英会話実施

・ ACC 国際交流学園学生との交流

International cooking day（5 回）

部活動交流（弓道・茶道・華道・情報処理・バドミントン・バレーボール）

随時 ・ 6 月 留学生、外国にルーツを持つ生徒が文化祭で体験発表（ドイツ、ボリビア、パキスタン）

・ 12 月 海外研修（台湾）生徒 8 人派遣、台南市の永仁高級中学校生徒と交流

・ 2 月 富士宮市国際交流フェスティバル参加

令和 6 年度

- 通年 ・オンライン英会話実施 全学年の論理表現の授業で、年間 22 回、フィリピンの方と英会話
- ・ACC 国際交流学園学生との交流
- International cooking day (6 回)、部活動交流 (生活科学・茶道・華道)
- 随時 ・5 月 外国にルーツを持つ生徒が文化祭で体験発表 (中国)
- ・8 月 ドイツ人スポーツ少年団受け入れ
- 生徒と昼食の調理、黒板アート体験、ディスカッション等で交流
- ・8 月 ACC 国際交流学園文化祭で書道部が書道パフォーマンス披露
 - ・10 月 ブラジル人短期留学生受け入れ (10 月 15 日から 11 月 9 日)
 - ・10 月 富士宮市台南紹介イベント参加 (台南研修報告実施)
 - ・2 月 富士宮市国際交流フェスティバル参加
 - ・11 月 ドリームプロジェクトでパレスチナ人を招聘、交流
 - ・11 月 修学旅行 コース別修学旅行で台湾訪問 (20 人)
 - ・12 月 海外研修 (台湾) 生徒 7 人派遣
- 富士宮市と友好関係都市である、台南市の永仁高級中学校生徒と交流
- ・海外体験又は交流体験発表 (ドイツ、シンガポール、モンゴル、台湾)

4 研究の成果と課題

オンライン英会話の実施は、生徒が英語を話すことへの抵抗感を低くして、海外ルーツの方と交流する様々な機会に参加する意欲を高めた。令和 6 年度には、「ふじのくにグローバル人材育成事業」等への応募を 5 件行い、2 名がそれぞれシンガポールへの短期留学、モンゴルへの高校生相互交流事業に参加した。個人でイギリスに語学留学した生徒もいた。

実用英語技能検定の受検者は、令和 6 年度はグローバルハイスクール事業実施前の令和 4 年度と比して、受検者数で約 1.5 倍であった。対して、受検級合格率は令和 6 年度 34%と、令和 4 年 (48%) に比して減少している。交流に対するハードルは低くなったが、英語の実力に結びつかなかったことが成果でもあり、課題でもある。

台南市立永仁高級中学校生徒や ACC 国際交流学園の学生との交流は、共通の活動を通して相互理解を深めることにつながっている。オンライン交流、部活動交流など様々な形で、地域に根差した国際交流を継続していく。

グローバルハイスクール

テーマ：吉高 Spirit を持って未来を切り拓くための5つの力の育成～グローバルに生きる人間性を高める、グローバルな活動の構築～
(学校名) 県立吉原高等学校



1 グローバル教育の概要

国際科を中心としながら異文化体験、異文化理解、国際交流を通じて多様性を身につけるとともに、異文化体験報告会を通じて普通科の生徒へも理解を広げています。また、オンライン交流や台湾姉妹校交流に普通科の生徒が参加し、学校全体へグローバル教育を浸透させています。

2 実施計画と具体的内容

実施計画	具体的内容
海外体験	国際科海外異文化体験
	台湾姉妹校交流馬公高級中学訪問
	モンゴル国・ドルノゴビ県高校生相互交流事業参加
国内（校内）における活動 （国際理解、異文化理解、留学生との交流、語学学習）	オンライン交流、異文化体験発表会、留学生受入 サマーセミナー、ウインターイングリッシュキャンプ
	国際理解講座（本校生徒）
	国際理解公開講座（地域中学生及び高校生参加） （日本語学校留学生、静岡大学留学生、地域の外国人との交流）
生徒の主体的な活動	フェアトレード講座、浴衣着付け講座、 外国人生徒学習支援ボランティア

3 各年度における取組

○国際科海外異文化体験（令和6年11月28日～12月7日）

令和6年度はマレーシア、シンガポールにおいて、ホームビジット、産業見学、体験学習、文化交流、大学訪問等を実施。着付け講座で教わった浴衣を着て街に出ると現地の方からたくさん話しかけられました。大学訪問では講義を受け、マレーシアについて学びました。



○台湾姉妹校交流馬公高級中学訪問（令和6年12月25日～28日）

今年度は普通科の生徒も含めて10人の生徒が参加。ホームステイと学校による授業、部活動への参加。そして馬公高級中学の生徒と一緒に市内散策と、異文化の体験と同世代の交流をはかりました。短い期間ではありましたが、別れがとても辛くなるほど充実した交流でした。



○国際理解講座（令和6年8月27日、12月22日）

講師に、はままつ国際理解教育ネットの中澤純一氏と小林祐樹氏を迎え国際理解についての講義を受けた後、日本語学校への留学生、静岡大学の留学生と交流をはかりました。2回目は公開講座とし、地域中学生、高校生も参加しました。本校生徒が日頃の成果を発揮しリードしました。



○異文化体験発表会（令和6年10月23日、3学期にも開催予定）

留学や国際科海外異文化体験など海外を経験した生徒による体験談を通して、全生徒への異文化理解、国際理解の促進をはかっています。本校への留学生からの発表もありました。



4 研究の成果と課題

オンライン交流、サマーセミナー、国際理解講座など校内で実施する交流と、実際に海外へ出ることによって、生徒の国際理解、異文化との交流に対する興味関心も高まっている。海外交流を今後も継続させたいが、海外に出る費用が高騰しており、姉妹校交流等の参加者に対して、補助、支援がないと、行きたい気持ちはあっても断念せざるを得ない生徒が出る懸念がある。

グローバルハイスクール

テーマ：グローバルな視野と進取の気性を育み、異文化を理解する心を涵養し、外国人との共生など持続可能な社会に生きる力を身に付け、地域に貢献する人材育成の在り方について探る

静岡県立榛原高等学校



1 グローバル教育の概要

本校では、文部科学省による「地域との協働による高等学校教育改革推進事業（グローバル型）」を令和元年度から3年間、静岡県の「オンリーワン・ハイスクール（グローバル・ハイスクール）」を令和3年度から3年間それぞれ指定を受け、この関連事業を「HAFプロジェクト」（HAIBARA ACHIEVING FUTURES PROJECT）と名付け、「地域と世界を結ぶ有為な人材育成の望ましい在り方についての研究」という副題をつけて取り組んできた。コロナ禍で中止していたグローバルな研修の再開やより改善・深化したHAFプロジェクトを継続的に推進し、「地域と連携した教育活動を通して、地域についての認識を深め、グローバルな視野を併せ持つ生徒の育成」「地域と連携した教育活動を通して、自ら課題を設定し、他者と協働してよりよい解決に向け主体的に判断し、表現する力を身に付ける生徒の育成」を目指す。

2 実施計画と具体的内容

- 1) 実社会とのつながりを考え、地元企業の地域貢献やグローバル展開を知る（企業訪問）
- 2) グローバルの知識・理解を得て、考察・探究する態度を身に付ける（海外研修・オンライン交流）
- 3) 英語によるコミュニケーション力を育てる（イングリッシュキャンプ、英検取得推進）
- 4) 地域の人と協働、地域貢献する態度の育成（地域リーダー育成プロジェクト（牧之原市事業）への参画）
- 5) グローカル部による地域・国際的課題の解決策の探究、実践活動

3 各年度における取組

- 1) 企業訪問
 - ・普通科2年選択科目「発展地域創造探究」の選択生徒を中心に、矢崎総業株式会社 Y-CITY（裾野）を訪問し、企業の地域貢献やグローバル展開について学んだ。（2年希望者18人参加）
 - ・海外研修（ベトナム）において、地元企業の海外事業所（矢崎ハイフォンベトナム有限責任会社）を訪問した。（1、2年生希望者26人参加）

2) 海外研修・オンライン海外交流

(1) 海外研修

「地域経済社会と諸外国が密接に関係していることを理解するとともに、グローバルな視野と国際感覚の醸成を図る。」を目的に2019年度の台湾研修以来の海外研修（ベトナム）を実施した。

日程：2024年12月21日（土）～25日（水） 参加者：1、2年生希望者26人、引率教員3人

12/21(土)	学校出発 13:00、中部国際空港見学	常滑市泊
12/22(日)	中部国際空港→ハノイ空港、ハノイ旧市街散策、スーパー買い物体験	ハノイ市泊
12/23(月)	ホーチミン廟など観光、矢崎ハイフォン・ベトナム有限責任会社訪問	ハロン市泊
12/24(火)	ハロン大学日本語を学ぶ学生との交流、世界遺産ハロン湾クルーズ	機内泊
12/25(水)	ハノイ空港→中部国際空港、午前学校着	

(2) オンライン海外交流

- ・グローバル部（最大32人）：昨年度から継続して、台湾の「国立金門高級中学」と交流した。2、3人のグループ対グループまたは1対1の英語を使った交流やクリスマスカードを送りあったほか、複数のSDGsの目標をテーマにディスカッションするなど交流を深めることができた。
- ・発展地域創造探究選択生徒（18人）：台湾の「高雄市立高雄女子高級中学」との交流。（2月に実施予定）
- ・普通科1年生：ベトナム、フィリピン、インドネシアの生徒と言語スキルの向上と文化交流を目的に、オンライン交流会を行った。

3) イングリッシュキャンプ・英検取得促進

夏季休業中に、英語の言語活動を充実させ、異文化理解、コミュニケーションスキルの向上を図るとともに、英語の4技能の習得や表現力を身に付けることを目的に、普通科49人、理数科2年29人の生徒を対象に実施した。



4) 地域リーダー育成プロジェクト（牧之原市事業（主催：牧之原市地域振興課、一般社団法人CLIP））

多様な大人との対話を通して、地域のリーダーとなる資質・能力を育成することを目的とした連続講座「地域リーダー育成プロジェクト」（対話の場・計4回、ファシリテーション研修1回）に、延べ103人、実人数61人の生徒が参加した。そのうち5人は運営スタッフとして、各回の運営にあたり、特に「話し&聞き上手になろう」の回では、企画等で活躍した。

5) グローカル部の活動（台湾オンライン交流以外のグローバルな活動）

「吉田町はじめてのほんご教室」のサポーター養成講座及び教室に、延べ5回、1年生10人が参加したほか、矢崎部品ものづくりセンター地域感謝祭ボランティア、御前崎市でのサーフィン国際大会の併設イベント実施など、地域と協働した活動を行った。

4 研究の成果と課題

- ・昨年度よりもイングリッシュキャンプやオンライン交流などへの参加者が多く、充実した活動ができた。来年度、理数科のイングリッシュキャンプは「Touch up English」と名前を変え、海外修学旅行に向けたプログラムを充実させる。普通科1年生は引き続き英語に慣れ親しみ、英語によるコミュニケーションスキルの向上を図ること、上級生はグローバルな社会課題に対して自分の意見を理論的に伝えるスキルの向上を図ることを目的に実施する予定である。
- ・2019年度を最後に中止していた海外（ベトナム）研修については、参加希望も多く、地元企業の海外事業所訪問、日本に関心を持つ大学生との交流など、学校でなければならない活動に対する生徒、保護者の満足度が高かった。ただ、実施時期や費用について、また生徒の探究活動をより充実させるための事前、事後研修の在り方などについては今後も検討したい。
- ・事業全般について、異文化を理解する心、外国人との共生など持続可能な社会に生きる力等を生徒自身が意識し、より生徒のキャリア形成に結び付く活動にしていきたい。



グローバルハイスクール

テーマ：内向き志向が強く地域課題に対しては誠実に取り組む本校生徒が、外を向き「グローバルな視野」を身に付けようとするにはどのような働きかけが有効か。
(静岡県立浜北西高等学校)



1 グローバル教育の概要

本校では「グローバル教育」を「国際理解教育」と言い換え、特色ある教育活動の一つとして推進してきた。スクールミッションに「キャリア教育に国際理解教育、地域連携・協働活動などを取り入れた探究的な活動を通して、グローバルな視野で、将来、地域社会（ローカル）で活躍できる能力と態度を備えた人材の育成を目指す」と謳っているが、内向き志向が強く、加えて英語を苦手と感じる生徒も多く、真の「グローバルな視野」の獲得には課題がある。

これまでも地域の「浜北国際交流協会」と様々な形で交流を続け、タイ王国シリントン高校生徒の受け入れ、文化交流授業の実施、国際協力に関するレポート作成などを行ってきた。また校内では生徒委員会の一つとして「国際交流委員会」を設け、オンラインで海外生徒と交流するなど、外を向くきっかけとなるよう働きかけてきた。さらに他国より留学の希望がある場合には積極的に受け入れ、国際交流の場を増やし「グローバルな視野」を持つ機会が増えるよう努めてきたが、コロナ禍のなかで中学校生活を過ごしたことも影響するのか、留学希望はなく、進路先では多くの生徒が県内、あるいは県外であっても近隣の愛知県を選ぶ生徒がほとんどで、地元志向が極めて強く、結果として語学学習の意欲も乏しい状況である。（「家庭学習をきちんと取り組んで授業に臨んでいる」と答える生徒の割合は、英語が5教科の中で最も低かった。R6 12月の授業評価アンケートより）

今回「グローバル・ハイスクール」に採択されたことを踏まえ、スクールミッションである「探究的な活動を通して、グローバルな視野で、将来、地域社会（ローカル）で活躍できる能力と態度を備えた人材の育成」の高いレベルでの実現のため三つの方向から「グローバル教育」の深化を図った。まず第一の方向は「『探究』×『グローバル教育』」の視点からの取り組みである。本校の探究学習は1年生で「地域課題」、2年生で「SDGs」、3年生で「自己」をテーマとしているが、探究学習をより充実させ、「地域課題」をさらに深く掘り下げていけば自ずからSDGsを含めて世界が直面する課題に視線が向くはずと考えた。第二に「体験」の視点からの取り組みである。内向き志向の強い生徒たちに、より多くの海外の人との交流「体験」、海外の文化の「体験」をさせることで、生徒の視野を地域だけでなく世界に広げるきっかけになり語学学習の意欲も増すことが期待できると考えた。第三に校内の「環境」づくりの視点からの取り組みである。LL教室を「グローバル探究ルーム（仮称）」に模様替えする中で、Wi-Fi環境を整え、海外の書物、映画のDVDなどを揃え、英語を苦手とする生徒が語学学習に関心をもち、探究学習で培った知見を海外の生徒とオンラインで意見交換したいという希望が多く出てくることを期待しての取り組みである。

以上、本校がこれまでに取り組んできた「グローバル教育（国際理解教育）」と「グローバル・ハイスクール」に採択され新たな取り組みを加えた「グローバル教育」の概要である。

2 実施計画と具体的内容

(1) 『探究』×『グローバル教育』

- ① 講師招請 ② 連携大学（常葉大学）での探究学習発表 ③ 先進校視察

(2) グローバルな「体験」

- ① 連携校であるタイ国シリントン高校交流（受け入れ） 令和6年6月 令和7年6月（予定）

② アジアの架け橋 フィリピン留学生受け入れ 令和6年9月から12月

③ タイ国シリントン高校訪問 令和7年8月(予定)

(3)「環境」づくり

① 「グローバル探究ルーム(仮称)」創設

3 各年度における取組

(1)『探究』×『グローバル教育』

① 10月9日(水) 先進校視察 東京佼成学園高等学校 教員2名

② 10月22日(火) 「探究の日」 講師(18人)招請



③ 2月22日(土)～23日(日) 日本ソーシャルデータサイエンス学会発表会 於 新潟

(2) グローバルな「体験」

① 6月3日(月)～6月8日(土) タイ国シリントン生徒11名 受け入れ

「海外からの留学生と会話したり一緒に行動したりすることは初めてだったが、英語をもっと勉強したいと思うきっかけになった」(本校生徒の感想)



② 9月2日(月)～12月13日(金) フィリピン留学生(アジアの架け橋事業)1名 受け入れ

「外国の学校に通うことは決して簡単ではないが、出会ったすべての人のおかげで、温かく迎え入れられた。言葉の壁はあったが、多くの大切な友人ができた。」(留学生本人の感想)



③ 12月23日(月) グローバル研修 生徒51名参加

静岡県立大学国際文化学科では現役大学生による大学での学びや大学生活について、熱海市役所では観光やインバウンドの取組について、それぞれ話を伺い、興味関心を高めた。



(3)「環境」づくり

① 旧LL教室(グローバル探究ルーム(仮称)) 関連図書購入 オンライン用備品購入

4 研究の成果と課題

「体験」のたびに生徒の意欲の高まりを実感し、短期留学を希望する生徒数、英語検定を受験する生徒数は増加している。一部の生徒だけでなく全体に広げ、英語学習への意欲を高めることが課題である。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	10月27日		(対象)	全校・ 学年	
学校名	県立沼津東高等学校	氏名	中田 幌大	学年	2

1 目的・応募理由

近年、グローバル化が進んでおり、多くの日本企業が海外にも進出しているという話を様々な場面で耳にしたことがある。そのため、私が将来海外で仕事をする可能性もあると考え、海外で働くことの楽しさ、魅力などを知りたいと思ったため応募した。

2 研修内容等

〈実施前研修〉

日時：令和6年7月20日

場所：静岡県庁

内容：海外インターンシップの内容説明
自己紹介
国内研修・海外研修の説明 など

〈国内研修〉

日時：令和6年7月25日

場所：ジャトコ株式会社

内容：会社紹介
工場見学
新規事業の紹介及び体験 など



〈国内研修〉

新規事業のジャトコ製ドライブユニットを搭載した電動アシスト自転車の体験

〈海外研修（企業見学）〉

日時：令和6年8月26日

場所：JATCO (Thailand) Co., Ltd.

内容：会社紹介
作業体験
食堂でのランチ
タイ人スタッフとの交流会 など



〈海外研修〉

食堂でのランチ（タイ料理）

※8月25日にタイへ渡航

※8月27日はバンコク市内研修を実施
（王宮・エメラルド寺院、暁の寺、涅槃仏寺、大理石寺院、アジアンティーク）

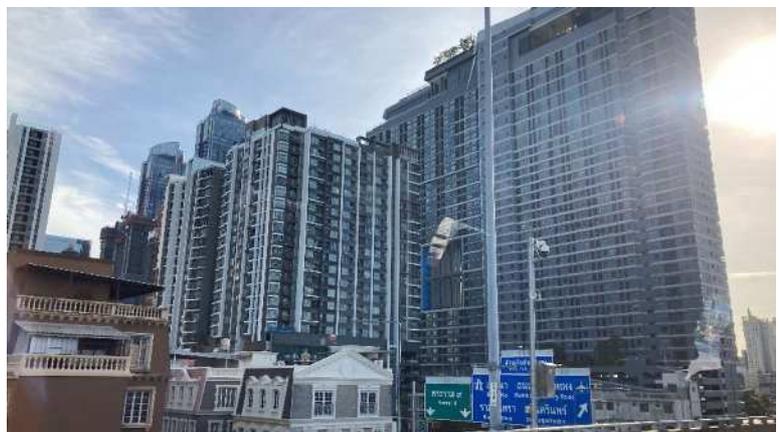
※8月28日に日本へ帰国

3 感想等

私は、今回の研修で社員の方に「海外勤務をする上で苦労したこと、よかったと思うことはあるか」という質問をさせていただいた。前者については、言語・文化の違いからすれ違いが生じることもあるということ、後者については、異文化に触れる日常が楽しいことだと教えていただいた。

実際、私もタイの店でお土産を買ったが、店員の方と英語で会話することが難しく、何も言わずにお金を払うだけになってしまうことが多かった。しかし、研修最終日には挨拶だけでもしようと思い、商品を渡すときは「こんにちは」、帰るときには「ありがとう」とタイ語で言うようにした。すると、言っている内容はわからなかったが店員の方が言葉を返してくださり、とても嬉しい気持ちになった。挨拶は些細なことではあったが、私は社員の方がおっしゃっていた異文化に触れる楽しさを少し感じることができたのではないかと思った。

私は、この研修に参加する前は「海外で働く」ということは、英語が苦手な自分にとって合わないのではないかと考えていた。しかし、研修を通してその楽しさ、魅力をたくさん感じることができ、私に「海外で働く」という新しい将来の選択肢を与えてくれた。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	タイ		
校内発表会	10月11日		(対象)	学年	
学校名	県立吉原工業高等学校	氏名	渡邊 齋	学年	2

1 目的・応募理由

海外で働くという事はどのような事かを知る。企業について知ることによって将来のことを考え、進路意識を更に高めていきたい。今回の海外インターンシップの企業の中に吉原工業高校とも関わりの強いジャトコがあった。ジャトコはトランスミッションの製造を行っている機械系の企業で、自分が機械系に興味があったから、ジャトコの海外研修に応募した。

2 研修内容等

現地であるジャトコタイランドに到着して、初めに社長から会社の紹介をもらった。ジャトコタイランドの会社規模や事業内容などについて詳しく聞くことができた。その後、タイ人の社員の方に会社で行っている植物栽培の紹介をもらった。さらに、植物を実際に植える体験を行った。そして、工場の製造ラインの見学をした。工場見学が終わり、昼食をとりながらタイ人の方たちと談話をした。昼食後は、ジャトコタイランドの教育施設で新入社員用の安全教育や危険予知トレーニング、機械の使い方などを体験させてもらった。その後、ジャトコの技能大会で実施しているネジ締め競争を行った。そして、タイ人の社員の方にタイの文化や生活についての質問をした。最後にジャトコタイランドの日本人の社員の方たちに、海外で働くことについての質疑応答を活発に行った。



3 感想等

初めの会社の紹介のときに従業員の9割以上がタイ人の方たちだと言っていて、はじめの私の海外の日系企業のイメージだと海外でも日本人の従業員の方が多いイメージだったので、とても印象的であった。工場見学の時も説明して下さる方は日本人の方だったが、工場で作業している方々はほとんどがタイの方が作業をしていて、実際の会社の雰囲気を感じることができた。

タイのジャトコの敷地の中に広大な空き地があった。それについて、社長が半分はスポーツ大会を行っている土地で、もう半分はこれからの事業拡大のために工場をつくるための土地と言っていた。今ある工場をもう一つ建てることのできるぐらいの広さがあると言っていた。それを聞いて、スポーツ大会を開くのは地域の方たちとも触れ合うことを大事にしているのではないかと思った。郊外の広い土地を様々なことに利用していることが印象的であった。

会社で行っている植物栽培の紹介では、社員の方々が自主的に家から種などを持ってきて植えていると言っていた。日本のジャトコではレタスを育てていたけれど、タイのジャトコではバナナの木などが植えられていてタイと日本の気候の違いを感じた。

ジャトコタイランドの教育施設では床にある荷物の持ち上げ方や危険予知など、大変に細かいところまで教育をしており、新人社員は方々は全員その教育を受けると言っていたので、労働者への配慮が行き渡っていると思った。

ジャトコタイランドの社長が「電車が遅れないのは日本だけ」と言っており、タイだけに限らず外国の電車は遅れるのが当たり前と言っていた。さらに、テレビ番組も海外では番組表の時間どおりになることはないと言っており、海外のことを知ることによって日本が良い国だと改めて感じる事ができた。その後、他の社員の方がタイ人は日本人よりも仕事とその他の切り替えが早いと言っていた。タイ人の社員でリュウさんという方がいて、その方が休憩のときなどはとてもフレンドリーに話しかけて、賑やかな方だけど、会社の施設の説明をしてくださったときにはとても真面目に話をしていて、その経験をしていたので先程の話聞いて確かにと感じた。



質疑応答の時に電気自動車がなぜ流行らなかったのかという質問があり、それに対して、新しい物を世の中に浸透させるために、「オタク層」「新しいもの好き」「富裕層」「一般層」の4つの層の人をターゲットにする必要があったが、途中で伸び悩んだため流行らなかったという回答が印象に残った。

今回、ジャトコという企業に研修をさせて頂き、日本の労働環境と海外の労働環境の違いやそもそも会社で働くことについて学んだ。将来自分が就職活動をするときの参考になるような体験ができて良かった。そして、企業で働いているところを実際に見学して、自分の進路意識が研修を受ける前に比べて非常に高まった。また、タイ人の方とのコミュニケーションを通じて、海外への関心が高まり、英語などの語学の勉強を頑張ろうと改めて思った。

参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	タイ
校内発表会		12月24日		(対象)	全校・学年
校名	県立科学技術高等学校	氏名	村上 慧	学年	2

1 目的・応募理由

私が本プログラムに応募した理由は、元々海外留学や移住に興味があったからです。留学に関する情報を調べている中で、静岡県が高校生を対象に県内企業・海外拠点でインターンシップを実施していることを知り、是非参加してみたいと思いました。研修先が二輪車の製造を手掛ける企業やホテル経営の企業などいくつかの企業がある中で、自動車が好きで私はオートマチックトランスミッションを製造しているジャトコ株式会社に興味がわきました。

この企業について調べていくなかで、電気自動車の普及に伴い従来のトランスミッションがどのように使われていくのか、国によって新たな技術への取り込み方の違いなど実際に自分の目で見たいと思い応募しました。

2 研修内容等

実施前研修

研修日時 令和6年7月20日（土） 10時から15時まで

研修場所 静岡県庁別館7F 第四会議室C

国内研修

研修日 令和6年7月25日（木）

研修場所及び研修時間 ジャトコ株式会社 11時40分から17時まで

海外研修

研修期間 令和6年8月25日（日）から28日（水）まで

研修日及び研修場所

- 1日目 スワンナプーム空港到着、その後ホテルへ
- 2日目 ジャトコ株式会社タイランド社
- 3日目 バンコク市内研修、その後空港発、日本へ
- 4日目 日本到着

国内研修では、富士市にあるジャトコ株式会社本社で企業概要・生産工程・新事業への取り組みの説明を受けました。説明の後は、海外の自転車企業と共同開発中のモーター付き自転車に試乗させていただきました。スムーズな変速で、乗り心地も良好でした。その他にも驚いたのは就労支援事業に関わっていたことです。自動車部品に関連する事業だけでなく、広大な敷地を活用し野菜を栽培しているところに、地域貢献に対する情熱を感じました。

海外研修では、タイのバンコク市近郊にあるジャトコ株式会社タイランド社に訪問し、企業概要の説明を受けた後、ネジの仮留め体験や植物の栽培作業を行いました。タイで働いている日本人スタッフは650人中17人で、社長をはじめ人事や会計のほか製造部門で活躍されていました。

工場内は風の通りが考えられた建物の設計や、



バザーファンを設置するなど快適な空間を作り出していました。また、敷地内にサッカーグラウンドがあり、年2回他社と交流戦を行っているとのこと、働き手を大切にしていると感じました。

ジャトコ株式会社では、主に日産や三菱、SUZUKI の製品を製造しており、日産の KICKS e-power に搭載されている、Motor and Gearbox を製造しているのは今回訪問したタイの工場だけという説明でした。部品の音を抑えれば騒音を抑えることができるので、ジャトコタイランド社にはドイツ製の世界に数台しかない、仕上げを行う機械があるのが特徴的でした。

3 感想等

私はこの事業を通して、グローバルに働くには様々な国や地域の労働環境を知り、受け入れることが重要だと感じました。タイの拠点は富士市の拠点より涼しく感じたり、しかし富士市の拠点のほうが生産の自動化が進んでいたりなど富士市の拠点とタイの拠点の労働環境をただ単に比べてみてしまうと、富士市の工場では、広い土地を活用しレタスを植えていましたが、タイの工場の畑では、スタッフが好きな作物を好きに植えて良いようになっていて、葉物野菜をはじめ、バナナやココナッツなど様々な植物が育てられていたのが印象的でした。

私はタイ人の考え方が仕事においてどのように影響するのかが気になっていました。なぜかという、国内研修を行った際、タイに駐在経験のある方からタイのマイペンライという考え方を伺っていたからです。

実際には、タイ人スタッフは普段からコミュニケーションをとってくださったり、優しく接してくださったりする一方、仕事では気持ちが切り替わり真剣に仕事に取り組んでいたことから、あまり、マイペンライという考え方が仕事に影響している感じは見受けられませんでした。しかし、話を伺ってみると私たちが工場に到着した際、準備が全然できてなく、慌てていたという話を伺って非常に驚きました。

ネジの仮止め作業体験では、タイムは1位でしたが確かめ作業で1つミスをしてしまい、惜しくも2位になってしまいました。非常に悔しいと思った反面、タイムだけでなく確認作業をいかに大切にしているのか、重要になってくるのかを知ることが出来良い体験になりました。

グローバルに働く際には、様々な国の労働環境を比べてしまうかもしれませんが、このインターンシップ事業で様々な国と地域にはそれぞれの労働条件があったり地域に特色があったりし、そのような背景があることで労働環境が変化してくることを知り、私たちがこれからグローバルに働く際にはそれらのことを十分に理解していかなければならないと考えました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	タイ
校内発表会		10月9日		(対象)	全校・学年
学校名	県立島田商業高等学校	氏名	秋野 帆香	学年	2

1 目的・応募理由

私が今回、このインターンシップに参加しようと思ったきっかけは2つある。

1つ目は海外に興味があったからである。私は今まで海外に行った経験がなく単純に日本以外の世界を体験してみたいという気持ちが強くあった。日本との文化の違いや国民性など気になることが多くあった。また、それを実際に自分の目で見て肌で感じたいと思いインターンシップに参加しようと思った。

2つ目は自分から何か新しいことに挑戦してみたいと思ったからである。私は、今まで何かに一生涯懸命になったり胸を張って頑張ったといえるものがなかった。だから、高校生のうちに自分から何かにチャレンジしてみたいと思った。そんな時に海外インターンシップの話聞いてこれなら自分から挑戦できると考え参加したいと思った。

これらの理由から今回の海外インターンシップに参加しようと思った。

2 研修内容等

国内研修では、実際に変速機を作っている工場を見学させていただいた。工場にはエアコンがなく、夏場は暑くとても大変な仕事をしてくださっていると肌で感じることができた。ライン一つ一つで丁寧に説明をしていただいたのでどのようにして変速機が出来上がるのかを知ることができた。また、今開発中のものを見せていただいたりジヤトコさんが作っているトランスミッションを使った電動自転車に乗せていただいたりした。車に使うだけのトランスミッションを作るのではなく、そこから新たなものを生み出す力に感動した。

海外研修では、タイの方とタイで働いている日本人の方と交流をした。タイの方はとてもフレンドリーで、研修の時以外でも気さくに話しかけてくれた。そのおかげで、私たちもリラックスして研修を行うことができたと思う。実際にジヤトコさんが新入社員さんたちに行っている研修を受けた。そこでは、機械が止まったときの対処の仕方やごみの分別の仕方などたくさんのお話を説明してもらった。働いている人の気持ちになって、研修を受けることができた。また、この研修を受けて知らないことをしっかり教えてもらうことの大切さに気が付いた。

今回の研修で一番記憶に残っていることは、水平栽培体験である。水平栽培とは土を使わずに野菜を育てることである。私はこの栽培方法を初めて知った。土を使わず植物を育てることはとても面白く興味深かった。簡単な作業かと思っていたら、ピンセットを使って種を植えたり、種を植える向きが決まっていたりととても繊細な作業で驚いた。なぜ、水とスポンジと肥料だけで植物が成長するのか気になったとともにいつか自分で育ててみたいと思った。

ねじ早入れ対決では、タイの工場が一番早い人たちと一緒に体験をした。ねじを入れている姿を見て熱心に働いているのが伝わった。自分で体験することでねじを入れるということだけだけど、大変だということをもっと知ることができた。



3 感想等

私は今回のインターンシップに参加して自分自身がすごく成長できたと実感することができた。何もかもわからないところで過ごすことは初めての体験で驚きの連続だった。タイ語で何を言っているかわからなかったけど表情や声の感じからいいことなどを感じることができた。言葉が話せないとだめだと思っていたけれど実際はそんなことなかった。

私がタイに行って一番関心を持ったのはタイ人の人柄である。タイの人たちはみんな優しく、フレンドリーだった。街を歩いているだけでいろんな人が話しかけてくれてびっくりしたとともにとてもうれしかった。日本ではそのような体験はしたことなかったのでとても新鮮だった。

全体的な感想としては今回このインターンシップに参加できてよかったということである。もし、今回参加していなかったらまだ挑戦することができていない自分だったと思う。そんな自分を変えることができて本当に良かったと思っている。今回のこの経験から挑戦することの大切さと勇気を学んだ。これを機にこれからもいろんなことに自分から挑戦して面白く楽しく充実した生活を送りたいと心の底から思った。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	タイ	
校内発表会		12月23日			(対象)	全校・学年
学校名	浜松城北工業高等学校	氏名	木村 早希	学年	2	

1 目的・応募理由

この海外研修の募集があったとき私は「海外研修に行きたい!」という強い気持ちを抱くとともに、研修先がなぜタイ王国（以下タイという。）なのかという素朴な疑問を持ちました。そこで私はタイについて調べてみました。タイは東南アジア諸国中心に位置し、首都バンコクの空港からはアジアだけでなく中東や欧州、アフリカなどへの便も出ています。タイは輸出拠点としては利便性が高く、特に近年は日本企業からタイへの投資が多く、タイへの投資総額の三分の一になったこともありました。経済発展を遂げたタイには自然や歴史、工芸や文化など多彩な魅力があり、研修先がタイになったことが理解できました。私自身もタイへの興味が高まり、タイに行き、文化や国民の人柄、そして日系企業によって日本のものづくりが海外で成功し、世界で活躍している様子を体感したいという気持ちが一層強くなったからです。また、個人的に映画や父の影響で車に関心をもっており、トランスミッションを専門的に学びたい、自分が持つ疑問について、専門的な方の意見を伺いたいと思ったからです。

2 研修内容等

一日目

- ・BKK 到着
- ・サボイにてタイ風海鮮の夕食
- ・ホテル近くのショッピングモールでお買い物（自由行動）



二日目

- ・JATOCO (THAILAND) CO. LTD にて研修
工場見学、ボルトを用いた作業体験、安全に作業を行うための説明等
- ・美里にてとんかつセットの夕食（日本食）
- ・ホテル近くの町並みを観察、現地のスーパーや屋台を巡る（自由行動）



三日目

- 〈バンコク市内観光〉
- ・王宮・エメラルド寺院

- ・暁の寺
- ・涅槃仏寺
- ・バイヨークスカイにてビュッフェランチ
- ・大理石寺院
- ・アジアンティーク（市場）
- ・ココ・スラウォン店にてタイスキの夕食

ホテル：マンダリン・ホテル・マネージメント・バイ・センターポイント
 ※朝食はホテルにてビュッフェ

3 感想等

4日間という長いようで短い期間の中、とても刺激的な毎日を過ごしました。トイレの文化、食べ物は残しても良いという文化、宗教的理由による文化など、日本と全く違う文化が数多くあり最初は戸惑いました。ですが今回の海外研修では日本での固定概念を捨て、タイの文化を学びたい、体感したいと思い、視覚的なコミュニケーションを用いて、現地の多くの方とコミュニケーションを取ったり、好き嫌いせずいろんな食べ物を味わって食べてみたりと海外に行くことで自分の殻を破り、自分の新たな一面を得ることができました。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ		訪問国	タイ	
校内発表会	9月25日			(対象)	全校・ 学年
学校名	静岡雙葉高等学校	氏名	木川 響稀	学年	2

1 目的・応募理由

工業系の進路、海外で働くことに以前から興味があり、応募を決めました。私は将来、世界の人々が毎日をより快適に安全に過ごせるようなシステムや技術の開発に関わりたいと考えており、インターネットが普及し様々なものが進化している現在やこれからで、すべての人を置き去りにせず、年齢や職業や国籍に関係なくすべての人にとって生きやすい世の中にすることに尽力したいと思っています。また、グローバル化が進み日本国内で仕事をする際も外国人の方と関わる機会は多いと思うし、外国で働くこともあるかもしれないので、多様なバックグラウンドや言語の壁を超えてたくさんの人と考えを共有し一緒に仕事ができるようになりたいと思っています。このタイへのインターンシップは実際に海外で働いている日本人や現地で働いている方と関わったり、最先端の技術に触れたりして、少しでも文化や考え方、仕事に対する姿勢を学び、自分の目標に近づき、将来目指したい姿を具体的に思い浮かべることができるようになりたいと思いました。また、自動運転、ハイブリッドカーなどの進化の過程にあり、高齢者ドライバー等による自動車事故などの課題を抱える自動車業界について技術的な面でも学びを得たいと思っています。

2 研修内容等

国内研修では、ジャトコ本場で、会社概要・業務内容・社会貢献活動の説明を受ける。

タイに赴任経験のある社員の方からタイについて説明、注意をうける。ジャトコ第二地区工場の見学をする。新規事業、自動車のトランスミッション技術



を用いた電動アシスト車いす、自転車の試作機を見、自転車にのらせていただく。

海外研修では、ジャトコタイランドで、社長からジャトコタイランドや自身の経験についてお話をうかがう。社会貢献活動として行われている、植物を育てている会社

の庭の見学、水耕栽培を体験する。工場見学、工場内の説明をしていただく。危険なことが工場内で起きた時の対処法や防止方法を学ぶ、安全道場の見学、ネジ締め体験をする。タイ人の社員の方、日本から派遣された方にご自身の経験の話を聞いたり、質問をしたりする。

3 感想等

お話ししてくださった方全員がこの仕事にやりがいを感じ、楽しんでいるのだろうなと思った。今まで海外転勤は大変でつらいことが多いイメージだったが、毎日が出会いと発見の連続だという海外派遣も楽しそうで魅力的に感じた。特にタイの工場では、全員が働き環境づくりや、男性が多数である状況で女性目線での気づきがあるということをお大切にしている、自分が女性ということ、男性の多い状況で働くことには少し不安はあったが、このような考えを持っている会社だったら安心して働けると思った。ジャトコは日本でもタイでも、仕事もプライベートも充実させることができると思った。今回この企画に参加すること今回この企画に参加することが出来たことをとてもうれしくありがたく思う。

静岡にある企業が世界で活躍していることを、実際に見て、体験して、そこで働いている人がどんな思いをもって仕事をしているかを知れたことは私にとって大きな財産となった。また将来について考えるきっかけとなり、ジャトコのような車関係の企業で働くことや、海外転勤をすることもめざしてみたいと思うようになった。一緒に行った5人と出会えたことも、タイに行ってきたくさんの人と関わったことも自分一人ではできない事で、本当に良い経験になった。この経験を生かし、社会に還元することができるよう、これからもさまざまなことに挑戦し、努力を続けていきたいと思う。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	未定			(対象)	全校・学年
学校名	沼津工業高校	氏名	田中來夢	学年	2

1 目的・応募理由

私は幼いころから乗り物に興味を持っていました。高校入学時には、バイクに携わる仕事に就きたいと考え、工業高校に入学を希望し、現在は機械科で学んでいます。今回の高校生海外インターンシップでは、地元静岡にあるバイクづくりに携わっている大企業が、海外においてどのような生産方法や販売形態を取っているのか知ることができ、その国の文化に馴染んでいるか肌で感じることでできる絶好の機会だと思い、応募しました。

2 研修内容等

国内研修では、ヤマハ発動機本社に集合し、会社説明を受けました。海外資本の規模や海外進出している国や地域なども知ることが出来ました。本社工場内では品質管理や安全管理の方法、バイクの組み立ての工程、完成品の動作チェックを見学しました。見学後には、海外駐在経験者の方からお話を伺い機会をいただきました。

海外研修では、台湾工場での稼働率や売り上げなどの説明を受け、工場見学をしました。空調設備や配置されている工員数が日本工場とは異なるのではないかと思いました。実際に、稼働率を下げていると伺いました。工場見学後、海外駐在員の方からお話を伺いました。ただ海外工場で仕事をしているだけでなく、台湾の文化や暮らし方、食生活や言語など、仕事以外についても学ばなければならないことを教えていただきました。



3 感想等

海外研修に参加することができ、興味を持っているバイク以外についても、多くのことを学ぶことができました。国内研修では資本金や海外進出規模を知り、想像もつかないその額や大きさに驚きました。本社工場の規模は大きく、見学の際にはセキュリティーチェックも厳重で、徹底した品質管理も実感できました。本社と周辺地域とのつながりのようなものを感じ取ることもできました。

海外研修では、日本工場同様に生産レーンや出荷のプロセスを見ることができ、日本工場との違いを少しですが発見できました。また、現地での販売店を実際に見ることができ、販売も工夫しているのだと感じました。

今回の研修を通して、一つのものをつくる大切さや大変さを実感しました。日本でもそうだと思いますが、台湾でも現地のライフスタイルや市場情報をもとにバイクを開発・販売しているそうです。このような人を介した企業努力の積み重ねが企業を発展させていくのだと思います。現地駐在員の方も現場で勤務しているだけでなく、その文化に馴染んだり言語を覚えたりするなどして、現場の方に溶け込む努力をされていることがわかりました。

このような機会を与えていただき、大変感謝しています。今回の研修を通して学んだことを今後の高校生活に活かしていきたいと思っています。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	11月1日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立沼津商業高等学校	氏名	小野田 実桜	学年	2

1 目的・応募理由

私が高校生海外インターンシップに応募した理由は二つあります。

一つ目は、自身の能力を試すためです。高校生活で培ったチャレンジ精神やコミュニケーション能力を他校の学生や他国の方々との交流を通じて、活かしたいと思ったからです。

二つ目は、自身の可能性を広げるためです。海外に行くことで日本国内でしか考えなかったことを海外に向けて考えるようになり、将来の選択の幅が広がると思ったからです。今回の海外インターンシップのお話を聞くまで、海外に行きたいという夢を持ったことがありませんでした。ですが、台湾に行くことが決まり、台湾の文化や魅力、有名な食べ物、人気な観光名所などたくさん調べました。調べていくうちに、海外にもっと目を向けたいと思うようになりました。

2 研修内容等

台湾山葉機車工業の現状や事業説明、工場見学、社員食堂での食事、販売店訪問、県駐在員事務所訪問をしました。台湾山葉機車工業はヤマハ発動機の中でも最先端で活躍する工場であり、売上げの90%が海外とされています。

その理由としては、日本では約16人に1人が二輪車を持っているのに対し、台湾では1.6人に1人が所持しています。この統計は0歳から100歳までの全人口が含まれているもので、このことから2台持ちの方が多く、若いうちや高齢になっても乗車する方がすごく多いと分かりました。ヤマハ発動機は台湾市場で8年連続減少し続けているというお話を聞き



ました。

駐在員の方々は、「あと3年でV字回復をしよう！」と目標を立てており、みなさんそれぞれの向上心が高いと感じました。駐在員のみなさんに質問したことを丁寧に答えてくださりました。

お話を聞いた中で私が一番感銘を受けたのは、「物事の本質を理解しようと努力する」です。

例えば、やりがいとは言い換えると、自分が楽しいと思える瞬間のことです。他にも、駐在したい志望動機はなにかを問われたら、駐在して何を実現させたいのか答えるということです。日々の友達同士での会話で、疑問に思うことを言われたとしても、その言葉の本質を見抜くことで相手が伝えたい内容を理解することができました。

3 感想等

初めての海外を出会ったばかりの他校の学生と行くのが始めは少し不安でした。困ったことがあっても気軽に聞けないのでは、対面で話す機会がほとんどなかったからうまくコミュニケーションが取れないのではと考えていました。しかし、国内研修で二回目にあつたとき既に、昔から仲の良い友達のように互いに接することができ、話していてとても楽しく感じました。

海外研修のホテルではお互いの学校の事や住んでいる地域の事について共有したり、深夜にコンビニに行ったりしました。どれも新鮮ですごく印象に残っています。

今回、このような貴重な体験をさせていただき、本当にありがとうございます。台湾に行った三泊四日でチャレンジ精神やコミュニケーション能力が向上したと実感しています。

台湾に行ったことが、夏休み一番の思い出となりました。



参加したプログラム		高校生海外インターンシップ		訪問国	台湾
校内発表会		未定		(対象)	全校・学年
学校名	県立静岡東高等学校	氏名	佐藤 ひなた	学年	2

1 目的・応募理由

高校1年生の時に、学校のグローバル教育の一環として台湾の生徒との対面交流が行われました。私は煎茶部に所属していたので、台湾の生徒にお茶の淹れ方を教えたり、お互いの文化や学校生活について話したりしました。英語が得意ではなかったのですが、コミュニケーションがうまく取れた時は非常に嬉しく、また、彼らと仲良くなれてとても楽しい経験となりました。この交流を通じて、異国の人々と直接コミュニケーションを取ることができたことが大きな思い出となり、海外に対する興味が一層強まりました。

このことについて、担任の先生に話してみたところ、県が企画する国内インターンシップへの参加を勧めていただき、4月にそのインターンシップに参加することにしました。そこで、1年先輩の方と出会い、帰りの電車の中で「海外インターンシップは非常に楽しく、貴重な経験になった」と話してもらいました。私はそれまでこのようなプログラムがあることを知りませんでした。この話を聞いて非常に興味を持ちました。このことを学校の先生に話したところ、募集時期などの詳細を確認いただき、時期を待って応募することができました。

2 研修内容等

研修では、台湾のヤマハ発動機を訪問しました。社長と5～6名の社員の方々が、海外赴任の経験やヤマハ発動機のビジネスについてお話ししてくださいました。社長は「子どもにはたくさんの可能性がある一方で、勉強を頑張り、どんどん海外に出て自分でさまざまなことを感じ取ってきてほしい」とおっしゃっており、私も他の国々を訪れて多くの刺激を受け、成長したいと思いました。また、社員同士が笑顔で会話している姿が印象的で、会社の雰囲気の良さを感じました。

台湾の他社のバイクとヤマハのバイクの普及率についても話を伺い、普段聞くことのない情報だったため、ヤマハ発動機に対する興味がさらに深まりました。さらに、台湾には、海外企業が進出する際に、現地の雇用を促進するために、社員の50%は現地の人を雇用しなければならない制度があることを知りました。この



制度は、その国の発展に繋がる技術習得を促進し、グローバル化の一環として重要な役割を果たしていると感じました。その後、販売店を訪れた際には、店長が丁寧に説明をしてくださり、自然に英語を話している姿に尊敬の念を抱きました。外国語を話せることが、コミュニケーションの幅を広げると実感し、私もそのようなスキルを身につけたいと思いました。

また、静岡県駐在員事務所を訪問した際には、台湾について簡単な説明を受けた後、業務内容についてお話いただきました。特に、静岡県への観光誘致と観光PRに力を入れているという印象を受けました。コンビニエンスストアとの共同プロジェクトとして、一部店舗を静岡県の観光地をアピールするラッピング広告で装飾したり、積極的にウェブで情報を発信するなどの取り組みをされていることを知りました。年間約450万人の台湾の方が日本を訪れているようで、日本だけでなく静岡県についても知ってもらい、実際に静岡県を訪れてくれたら嬉しいなと思いました。

3 感想等

バイクのシェア率が世界一位の台湾では、道路の風景が日本とはまったく異なり、ただ外国にいただけで、すべてが新鮮に感じられました。初めて台湾のレストランで食事をした時、日本では味わったことのない料理や果物をたくさん楽しむことができました。中には、味や食感がまったく未知のものもあり、非常に新鮮な体験でした。また、気候も日本とは異なり、スコールが頻繁に降るなど、日本ではなかなか経験できないことが多々ありました。お手洗いの使い方も異なっていて、国によって「普通」が違うことを肌で感じることができました。慣れるまで時間がかかりましたが、他国の文化を経験し、比較することで、日本の特徴について少し知ることができました。

異なる場所に身を置くことで、学べることが多くあると実感しました。台湾で過ごした時間は特別で、印象深いものでした。宿泊したホテルのエレベーターで、現地の方と少し会話をする機会がありました。最初は台湾華語で話しかけられましたが、日本人だと伝えると、その方は日本語で挨拶をしてくれ、「台湾に来てくれてありがとう」と言ってくださいました。少し英語を交えての会話でしたが、親切に対応してくださり、とても温かい気持ちになりました。翌朝、朝食を食べるためにロビーに向かう際にも声をかけてくれて、彼らの親切さに感動しました。

この事業のおかげで、このような貴重な経験ができたことに心から感謝しています。国内研修を含め、海外インターンシップを通じて学校生活だけでは得られない多くの学びを得ることができました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月23日			(対象)	全校・学年
学校名	県立島田工業高等学校	氏名	曾根 光葵	学年	2

1 目的・応募理由

私が海外インターンシップに参加した理由は、3つあります。1つ目に今までの自分を変えたいという思いからです。私は人と関わるといふのを必要最低限しかしておらず、コミュニケーション能力がとても低いのではないかと思いました。このままだと会社に入り、働くというときに自分が孤立してしまって仕事ができなくなると想像してしまい、知り合いのいない状況に身を置くことで変われるのではと考えました。2つ目に自分の考えを広げたいと思ったからです。自分の見ている世界はとても狭く、考え方も1つに固執しているように感じていました。多種多様な考えを持つ、海外の文化に触れ、新しい考えができるようになると考えました。3つ目に自分が興味のある会社に行けるからです。家族が原付バイクに乗っているのを見て、バイクに興味湧き、仕組みや作業を知りたいと思いました。以上3つの理由から有名なヤマハ発動機にインターンシップに行けると見て、応募しました。

2 研修内容等

国内研修（令和6年8月1日）

場所 ヤマハ発動機株式会社

内容

- ・ヤマハ発動機株式会社の概要説明
- ・ヤマハ発動機の工場見学
- ・ヤマハ発動機コミュニケーションプラザ見学
- ・台湾駐在経験者との交流会



海外研修（令和6年8月20日）

場所 台湾山葉機車工業股份有限公司 新竹廠 Yamaha YMS 興旺重車 桃園重機旗艦店

内容

- ・YMTの概要説明
- ・YMT工場見学
- ・販売店の見学
- ・ヤマハ発動機台湾駐在員のお話

3 感想等

今までの生活からは考えられない大きな経験をさせてもらえました。ヤマハグループといえば県内でも大きな企業で、全国・世界的に有名なブランドなのでインタ

ーンシップが決まった時は、うれしさや楽しみがありました。しかし、他の学校の人と上手く関わりあえるのかという不安や大手企業に就業体験できるという緊張感が初めのころは大きかったです。研修に行くにつれ、メンバーとうまくコミュニケーションがとれた



おかげで緊張が和らぎ行く前に感じていたものは杞憂で済みました。実際に働く現場を見させてもらって、働くことは楽しいことなのかもしれないと思えたり、それぞれの信念を持って働いていることがカッコいいと思いました。国内研修だけでは感じられない、海外で働く独特の空気感というのも今回のインターンシップで感じることができました。「海外は不安なことが多いけど、新しい人と一緒に仕事ができるのが楽しい」と台湾の駐在員の方に聞いて国内に限定的な目を向けるのではなく、海外まで見る広い視野が必要だと感じました。特に心に残っているのは「心の持ちようで楽しくなる」という言葉です。これは、台湾の駐在員の方の話のときの「ポジティブ思考になれば、どんなこともきっと楽しく感じられる」と言われ、普段親などから言われていた言葉に似ているが、実際に海外という不安な要素が多い中で働いている人から言われると、言葉の重さが断然違い、心にとっても響きました。



海外と日本との文化の違いというのも体験できたと思います。台湾のコンビニでは、2本買うと安くなるルーレットや、八角の入った煮卵が鍋で売られているので様々な香辛料の香りが強かったです。台湾は車よりスクーターやバイクの方が多く、電動2輪車用の停止線や右側通行のところがありました。台湾は日本に近いけど、全然違う文化が発展していました。空港内で先に昼を食べてし

まい、さらに機内食を食べて、お腹がとても膨れてしまったことと、言葉が通じなかったことです。最後に私が応募する理由となった、コミュニケーション能力は参加する前は、受け身になりがちだった私と今の駐在員の方のコツを実践して自ら話に行く私とでは、比べ物にならないくらい変わったと思います。台湾駐在員の方の話だけでなく、自分が研修の時にしていた行動から見つけることができ、変わることができました。このようなことからこの海外インターンシップに参加して本当に良かったと心から思えました。ここで経験したことや失敗したことを12月に校内で発表するので、しっかりと全校生徒の前で発表して働くことについて考えてもらうきっかけになればと思います。

グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	12月20日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立掛川工業高等学校	氏名	高良 彪惺	学年	2

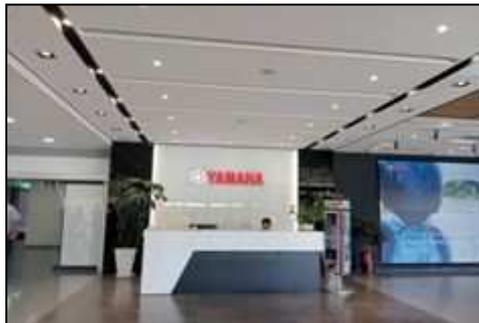
1 目的・応募理由

海外渡航と飛行機に乗ったことがなく YAMAHA とはどんな企業なのか、またどのような事業を海外で展開しているのかが気になったため。

2 研修内容等

海外研修では新竹区の YAMAHA 工場に行った。ホテルから台湾の工場まで1時間半ほどで到着した。研修先ではまず初めに台湾での二輪車保有数について説明していただき、総保有台数は約1,439万台となっており1台あたりの保有数は1.6人となっており、二輪車がかかなり多い国ということがわかった。YAMAHA の台湾での二輪車のシェア率は全体の約14%となっており、3位だった。残りの2つは台湾国内の企業が占めており、現在の目標はシェア率2位になることだと聞いた。その後台湾の工場生産している製品の種類を聞いた。全世界にある YAMAHA のスクーターの殆どは台湾の工場生産していることがわかり、今まで私はスクーターも日本で作っていると思っていたので意外だと感じた。会社説明が終わったあと、台湾の YAMAHA の社長から挨拶があった。社長の言葉で印象に残っているのは「自分のやりたいことを本気でやる」という言葉だった。私はこの言葉を胸に刻んで自分の夢を追い求めていきたいと決意した。社長の挨拶が終わったあとエンジンの組立工場を見学した。エンジンの組立工場ではスクーターの後輪と一緒にライン形式で作業していた。台湾の工場にはスポットクーラーがなく日本と違って熱くないのだと感じた。また見学している途中、壁の張り紙を見てみると中国語だけでなくタイ語も書いてあり、台湾の人だけでなくタイの人も働いているのを知り、グローバルな企業であると知った。エンジンの組立工場を見学したあと、スクーターの組立工場へ向かった。組立工場では日本と同じ作業をしており、自動で部品を運んでくれるロボットがいた。他にも、排ガス規制による厳しい検査のやり方も同じだった。しかし、違うと感じたのはスクーターの運び方だった。日本の工場は検査が終わったあとすぐに箱に入れてしまうが、台湾の工場は社員の方が出荷場所まで、スクーターに乗って運ぶ方法で、斬新だった。次に去年に完成した、エンジンをアルミニウムのインゴットから鋳造している工場を見学して工場内にある社員食堂で台湾粥を食べた。そして、台湾の駐在員のお話を聞いた。まず初めに小川さんがお話をしてくださり、台湾に駐在してみたいの感想を聞かせてもらった。台湾の市場は日本と違い規模が大きく、小川さんのやりがいに繋がったり、台湾に来て仕事の幅が広がったりとプラスな内容が多かった。小川さんの仕事内容は開発業務や現地社員との交流と教えてもらった。次に製造本部の鈴木さんがお話をしてくださった。鈴木さんが台湾に転勤になる流れを教えてくださいました。鈴木さんの場合はもともと駐在の希望を出しており、上司から声をかけてもらい、駐在が決まったと教えてもらった。海外に駐在する基準も教えてもらい、何かしらの強みを持っていたり、コミュニケーション能力があったりと、知識、スキルだけでなくポジティブさや仕事や私生活を楽しめる、芯があるなどと、教えてもらった。私は将来、YAMAHA に就職したいと考えているため、鈴木さんが教えてくれたことをしっかりと自分の中に取り込み、基準を満たせるようにしたいと感じた。次に YMTT の金城さんにお話をしてくださった。金城さんはもともと通訳の仕事をしており、途中で YAMAHA に入社し品質保証部の副部長になった。金城さんは前職の知識を活かし、人材育成に力を入れられていた。人材育成には現地の言葉を話せるのが大前提でさらに、説明の上手さが必要だとわかった。金城さんのやりがいは課題を乗り越えたときや、自分のサポートで相手が笑顔になったとき、上司に褒められたとき、と教えてくださった。最後にお話をしてくださったのは第2製造部の伊藤さんだった。伊藤さんが台湾に駐在員として赴任した理由は部長の推薦で行くことになった。伊藤さんが仕事で心がけていることを3つ教え

ていただき、1つ目は「ポジティブ思考で物事を考える」ことだった。「できない理由を探すよりどうすればできるかを考えることに時間に当てるべき。」と教えてもらった。つぎに「コミュニケーション能力」だった。「あらゆる場面でも臆することなく自ら飛び込んでいく勇気が必要だったり、言葉が通じないと躊躇してはもったいない！」と教えていただき、私も実施前研修で自分から話しかけに行くことを少し躊躇していたが、これからはもっと自分から積極的に話せるようにしたいと感じた。最後は、「あ」の3段活用を常に心がけることだった。「あせらず」・「あわてず」・「あきらめず」この3つが伊藤さんの中で大事にしていることだった。駐在員や社長の話を聞いていて思ったのは、話をしているときに身振り手振りで会話しており、台湾の人と交流するときに言葉が伝わらないため、身振り手振りで会話しているのだと感じた。駐在員の話聞いたあと YAMAHA の販売店に向かい話を聞いた。販売店ではお客様に YAMAHA のオートバイを買ってもらうために、バイクのオーナーの方と交流イベントを行っており、新作のバイクの契約を取っていただいたり、整備をそこの販売店でしてもらうなどサービスの精神を感じることができた。



3 感想等

新竹区の YAMAHA の工場は同じ敷地内に本社があり、本社の会議室の隣に小さいセブンイレブンの自販機が置いてあった。温泉施設にある牛乳瓶の自販機みたいな構造でお菓子が売っていた。YAMAHA の社員さんのお話では会社の説明を聞いたが、驚く説明がたくさんあった。例えば YAMAHA 発動機と YAMAHA 楽器のロゴの違いを教えてください、YAMAHA 発動機は音叉が円の内側と接しており、YAMAHA の M が発動機の方は下にくっついていたり、よく見ればわかる違いがたくさんあることを教えてもらった。工場見学で日本と違うと思ったのはエンジンの組み立てラインに柵が見当たらず不思議に感じた。工場を見学している最中、女性の社員さんがはたらいっていることに気づき、案内してくれた方に聞くと2割ほど女性スタッフが活躍していると教えてくれた。

YAMAHA の工場見学をしているとき案内してくれた方が日本人だったが現地のスタッフと話しているときかなり身振り手振り話しており、言葉だけでは伝わりにくいということを目の前で実感することができた。他にも食堂で何を食べるか迷っていたとき、現地の社員さんが日本語で丁寧に説明してくださり、台湾の人にも優しいんだなと感じた。工場見学の全体を通して一番驚いたのはバイクの運び方だった。一人の社員さんが片手で運転をし、もう片方の手で完成したスクーターを運ぶやり方だった。慣れているのか、全然ブレることなくまっすぐ運べていたため驚いたし、日本と違って置き場所が組立工場から離れているところや運ぶのかと学びにもなった。日本と台湾の工場の違いや同じところがたくさん見つけることができ見学をしてとても楽しかった。将来は YAMAHA に勤めたいため社員さんが行っていた、身振り手振りで会話をしたり、恐れずに一歩踏み出してみることを日々意識してみたい。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	9月25日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立袋井商業高等学校	氏名	奥宮 葉月	学年	2

1 目的・応募理由

私が今回の海外インターンシップに応募した理由は、これからの進路を考えたときに進路の幅を広げたいと思ったからです。来年には私たちは今後の人生に関わってくる進路を決めなければいけません。しかし、私は就職したいと思っているだけでこの企業に就職したいのか、就職して何をしたいのか具体的に決まっています。今回のインターンシップのことについて学校の先生に説明を聞いたときに、これからの進路決定の参考になると思いました。また、ヤマハ発動機に関心があり、このインターンシップを通して、ヤマハ発動機の現在の取り組みや、これからの目標について知るだけでなく、工場見学などの研修を通して職場の雰囲気を感じたいと思いました。そして、一番の理由として高校生海外インターンシップを通して様々な力が身につくと思ったからです。例えば、海外研修に向けて準備するときには何かわからないことがあれば自分から聞いたり、飛行機やバスの時間があるので間に合うように考えて行動したり、将来絶対必要になる力です。私自身、周りに合わせて行動することが多くなっていたので、自分から積極的に動けるよう力をつけたいと思いました。

2 研修内容等

今回のインターンシップでは実践前研修、国内研修、海外研修に分けて行われました。

実践前研修では趣旨説明を受け、全体で海外インターンシップの内容説明を聞きました。グループ別では自己紹介をし、国内研修、海外研修、海外渡航について日程や持ち物などの詳しい説明を受けました。

国内研修では、ヤマハ発動機に行き、会社概要説明を聞き、スマートファクトリーの映像を視聴しました。その後、バイクの組み立てなどを行っている工場内を見学し、いくつかの質問をさせていただきました。工場見学が終わった後は台湾駐在経験者の方と交流会を行い、台湾について、台湾での仕事や趣味について教えていただきました。交流会が終わった後は、各自でコミュニケーションプラザに展示されているヤマハの製品を見学しました。



海外研修では二日目に台湾山葉機車工業に行き、会社概要説明を聞き、工場全体を見学させていただきました。台湾山葉機車工業の食堂で昼食を取った後は駐在員の方のこれまでの経歴や現在の仕事内容などについて聞きました。その後、販売店に行き、店内に置かれている商品や、実際にバイクを修理しているところを見学させていただきました。

3 感想等

私は高校生海外インターンシップでたくさん学ぶことができ、参加することができてとても良かったです。ヤマハ発動機や台湾山葉機車工業に実際に行き、ヤマハについての知識が身につきました。特にヤマハ発動機で見たスマートファクトリーは近未来の目標が掲げられ、AI と働くことや、働きやすい職場環境が考えられていて、とても素晴らしいことだと思いました。工場内で見た無人搬送機 AGV も上手に活用され、作業効率が上がっていて驚きました。台湾山葉機車工業では大型バイクの人気を高めていくことや台湾の二輪車割合のヤマハが占める割合を上げていく取り組みなども教えていただき、今回のインターンシップの目的の一つであるマーケットの競争力を肌で感じることができました。また、台湾についての知識も少し身につきました。例えば、二輪保有台数が約 1439 万台もあり、二輪車一台当たり台湾人口が 1.6 人で、日本の 12 人に比べてかなり差があることや、台湾は九州と同じくらいの面積でありながら人口が多く、土地があまりないため、台湾の都会には一軒家がほぼないこと、少子高齢化が日本よりも深刻であることです。今まで海外にあまり関心がなく、以外なことや驚くことが多かったので、台湾についても知れて良かったです。そして何より学べたことは、私が高校生海外インターンシップに参加した目的でもある自分から積極的に行動することです。海外に行くにあたってわからないことはしっかり聞くことができ、初めて一人で新幹線に乗り東京の電車を利用し、集合時間に間に合わせることができました。初めは不安なことが多かったですが、一緒に研修を受けた人たちとも協力して問題なく研修を終えることができました。インターンシップでは初めてのことが多すぎてあっという間に終わってしまいましたが、これから役立つ様々なことを学べたのでとても有意義な研修になりました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	台湾		
校内発表会	後日実施予定			(対象)	全校・学年
学校名	県立浜松工業高等学校	氏名	鈴木 颯良	学年	2

1 目的・応募理由

応募した理由の一つ目は私がもともとヤマハ発動機株式会社に就職したいと考えていたからです。ヤマハ発動機株式会社は静岡県西部を代表する大企業の一つであり、世界各国にも支社があるグローバル企業です。浜松工業高校の先輩方も多く就職しており、海外で活躍している先輩方も多いと聞いています。私がヤマハ発動機株式会社に就職した時、私も海外で働く可能性があるかもしれません。そのため、海外駐在がどのようなものか、海外での生活はどのようなところが大変なのか、日本と海外では働き方や工場の仕組みがどのように違うのか、駐在している日本人の方々はどのような仕事をしているのかなど、たくさんのことを自分の目で確かめたかったからです。

二つ目は、海外に行ったことがなかったからです。海外駐在では、家と会社の往復だけしていればよいのではなく、買い物をはじめ、現地の人たちと同じような日常生活を送る必要があります。そこで、言葉の通じない海外での生活がどれほど大変かを、実際に体験してみたいと思いました。また、言葉だけでなく、食事の面でも海外生活をする上で心配でした。私は好き嫌いが多い方ではないと思うのですが、それでも日本人向けに味付けされた外国料理しか食べたことがなかったため、日本と台湾の料理や食文化の違いを体験してみたいと思いました。

三つ目は、積極的に行動できる人物に生まれ変わるきっかけとしたかったからです。もともと積極的に行動するのが苦手なので、「自分は他校の生徒と仲良くなるなんて無理だ」と決めつけていた部分もありましたが、同じような目的を持った同世代の人たちとの交流をしていく中で、新たな自分を発見できればよいと思い、応募することを決めました。

2 研修内容等

- ・台湾山葉機車工業
工場見学
販売店見学
- ・静岡県駐在員事務所訪問



3 感想等

ヤマハ発動機株式会社の日本の工場や台湾の工場、販売店、日本と台湾のつながりなど、たくさんのことを知ることができました。最初は台湾の工場を見られると思っていたのですが、磐田市にある工場も国内研修で見学できたことで、共通している点

や異なっている点に気付くことが出来ました。ノルマやルールが違うのは予想できていましたが、規格を統一化していると思っていたので工場そのものの様子が違うことには驚きました。色々と社会問題になっているためか、日本では車種ごとのノルマを設けず、需要に合わせて作っているのに対し、台湾では四十台ずつなどのノルマを決めていて、その国の需要に合わせて作り方を変えていることが分かりました。日本と台湾とで交通事情が違うため、需要数も変わるのだな、と思いました。また、デザインも日本にあるバイクそのままで作っていると思っていましたが、少し違うデザインをしたものが多く、日本人と台湾人のデザインセンスの違いや、台湾で流行しているバイクがわかって楽しかったです。

一方、駐在員の仕事は幅が広く、一から言葉を学ばなければならない海外でこの仕事をするのは、とても大変だと感じました。駐在員として派遣されている方々は当たり前のように平然と仕事をしていて、すごいと思いました。駐在員になるには、あらゆる面でとても高い能力が求められることがわかりました。インターンシップに行く前は、駐在員の方々も現地の方々と一緒に工場で作業工程のうちのどれか一つを担当しているのかなと思っていましたが、全体を管理する役割をしていると聞いて、とても驚きました。海外駐在では、言葉が通じなくても、品質確保や、最終的にはユーザーの安全のため、的確に仕事内容を伝える能力が必要だと感じました。

また、台湾での生活はあまりに日本と違うことが多く、慣れないことの連続でした。水道水が飲めなかったり、トイレに紙を流せなかったりして、日本での生活がどれだけ便利かを改めて感じることができました。食事に関しては、最初は日本との味と違って苦手を感じるものが多かったのですが、毎日食べているうちにおいしさに気づいて、食べられるものが増えていきました。また、日本の会社の飲食店が街中であって、日本の食事をいつでも食べられるのに親近感を感じました。将来台湾で仕事をした時には、台湾料理、中華料理、日本料理と、その日の気分で料理を変えて食べれば、毎日の食事が楽しくなりそうだと思います。

今回の海外インターンシップを通して、海外駐在のやりがいや、台湾での生活の楽しさを自分自身で体験し、知ることができました。同じグループの高校生との交流を通して、積極的に行動できない自分を克服できたように感じます。また、実際に仕事をしている方たちのお話を聞いて、改めてヤマハ発動機株式会社で働きたいという気持ちが強まりました。将来ヤマハ発動機に入社するためにも、海外で仕事をするようになった時に困らないためにも、今のうちからしっかり勉強と向き合っていこうと思いました。このインターンシップで得た様々な経験をこれからの学校生活に生かしていきたいと思っています。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	10月1日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立下田高等学校	氏名	近藤 風花	学年	2

1 目的・応募理由

私は英語が好きで、空港のグランドスタッフやホテル業務などの英語を使うことが多いサービス業に興味があり、外国の人に対する接客について知りたかったのに加え、海外渡航歴がなかったので、海外研修を通して日本と違う文化や環境に触れ、多様な視点を身に着けたいと思い、応募した。

2 研修内容等

〈7/20 実施前研修〉

事業の内容説明、海外渡航に関する連絡、グループ内での自己紹介、国内研修・海外研修の日程や持ち物など概要説明

〈7/26 国内研修〉

株式会社呉竹荘の取り組み、研修先のホテルの概要、海外研修における注意点の説明

〈8/5～8 海外研修〉

1日目…入国、移動

2日目…ホテル研修(ホテル施設内の案内・説明)、現地の大学生との交流

3日目…ジャカルタ市内研修(タマンミニ・インドネシア・インダー、ファタヒラ広場、イスティクラル・モスク、ジャカルタ大聖堂、グランドラッキー・スーパーストア)、帰国



3 感想等

外国やサービス業に興味のある私にとって、この海外インターンシップは、外国への興味を更に増幅させ、多様な視点で物事を見るための貴重な経験となった。インドネシアに着くと、スパイスの効いたものが多い料理や、日本と比べ物にならない量の自動車とバイク、時々見られる信号機や車線の無い道路、日本円



と比べてほぼ3桁も低いルピアなど、驚くことばかりだった。

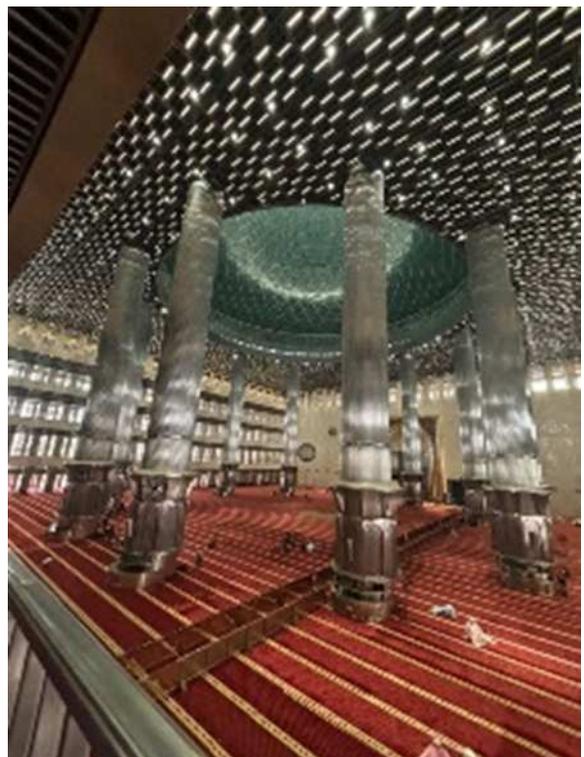
ホテル研修では、日本の様式を取り入れつつも、宿泊客の9割以上を占めるインドネシアの人々の過ごしやすさを考えた部屋の設備・内装に感動し、2つ以上のものから良い特徴を集めて1つにすると、それぞれの特徴が活かされたものになることを学んだ。

現地の大学生との交流では、インドネシアの料理を味わったり、

「オンデルオンデル」という人形の歴史を学んだり、実際にその人形をリサイクル材料で作ったりした。インドネシアの料理はスパイスの効いたものが多かったが、それだけでなく、日本のかき揚げやつくね、えびせんべいに似たものもあり、少し驚いた。料理を味わう中で、青唐辛子と気付かず一口で食べてしまい、あまりの辛さに暫く涙が止まらなくなるハプニングがあったが、自分の水を躊躇うことなく差し出してくれた大学生や、すぐに牛乳を持ってきてくれたスタッフさんの親切に胸がいっぱいになった。人形作りでは、お互いにコミュニケーションを取って助け合いながら、可愛い人形に仕上げることができた。私は、学校や日常で英語を勉強する中で、標準語以外の言語を使うことの難しさを身をもって感じているので、特に難しいと言われている日本語を流暢に話している大学生がとてもかっこよかった。この交流は、インドネシアの伝統に触れるだけでなく、日本での学習意欲を高めることもできる大変貴重な時間だった。

ジャカルタ市内研修では、たくさんの観光名所を訪れたが、イスティクラル・モスクが一番印象に残っている。あまり宗教に深く関わっていなかったこともあり、敷地内に足を踏み入れた瞬間から感じる、どこか重みがあるような静けさに圧倒された。建物の寸法という細かいところにまで独立記念日と関係付けていて、やはり国の独立はどこにおいても重要なものなのだと感じた。

インドネシアでの滞在は、乾季のため過ごしやすさはあったものの、道路やトイレの設備において苦労してしまうことがあり、日本の設備の質の高さを改めて確認する良い機会となった。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月18日			(対象)	全校・学年
学校名	県立伊豆中央高等学校	氏名	植松 沙南	学年	2

1 目的・応募理由

海外の人々の物事や捉え方や文化など、自分にはない新しいものの見方に触れてみたいと思ったからです。また、将来の職業選択に向けて視野を広げたいと思ったからです。

2 研修内容等

ホテル業務見学で、ホテル内の設備を見て回りました。部屋の種類や大浴場、職場の様子を見学しながら、インドネシアの文化にも関連づいた説明がされていて、日本の文化と比較しながら回ることができました。その後、現地の大学生との交流会がありました。大学生の方々は日本語を学んでいて、日本語で挨拶や自己紹介をしていました。彼らとは伝統的な人形を作ったり、インドネシアの環境問題について改善策を考えたりしました。市内研修では、博物館でパプア民族の歴史について学んだり、キリスト教やイスラム教の教会に行ったりしました。イスラム教の礼拝を呼びかけるアザーンが印象的で、大きな肉声が建物中に響いていました。



3 感想等

ホテル内研修で、スタッフの方々に限らず、インドネシアは母国語の他に英語も上手に話せる人が多いことや、一般の人の結婚式でも何百人も参列することを聞き、驚きました。大学生との交流会の前に、ブタウィ族の伝統文化であるオンデル・オンデルという踊りのようなものを見せていただきました。厄除けの儀式だそうで、とても陽気な音楽が流れていました。見ているこちらでも楽しくなりました。大学生との交流会では、大学生と話していくうちに、インドネシアを身近なものに感じていきました。現地で暮らしている人の話は、インターネットで調べるよりも説得力があり、インドネシアの環境問題の改善策を考えるととても参考になりました。大学生はとても明るくて、私たちに親切にしてくれました。仲良くなることができ良かったです。市内研修では、日本とは違うけど料理はおいしいことに気づけたり、初めてアザーンを聞いたりしました。学校で習ったことも、知らなかった新しいことも実際に身をもって体験出来て良かったです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	8月29日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立静岡西高等学校	氏名	原田 健虎	学年	2

1 目的・応募理由

私がこの高校生海外インターンシップに参加した理由は、コミュニケーション能力の向上です。私はあまり自分から積極的にコミュニケーションを図れるタイプではありません。しかし、自分の知らない国で初めて出会う人々と過ごすことで、コミュニケーション能力の向上が図れるのではないかと考えました。また、私は将来、起業をしたいと考えています。この海外インターンシップで、世界で活躍する静岡の企業から様々なことを学び、将来起業する際に役立たせたいと考え応募しました。

2 研修内容等

国内研修では、ホテル業界の仕組みについて学ぶことができました。ホテルは時期によって料金の変動し、変動の上限が決まっているそうです。多くの宿泊客が見込める時期には料金を上げると知りました。

海外研修では、初めに、呉竹荘のバックヤードを見学させていただきました。私が思っていたよりも従業員の数は少なかったです。日本語が話せる方もいたり、一人ひとりの社員がとても優秀な方たちだと思いました。カードキーが日本の昔の絵をモチーフにしていたり、様々なところに日本の絵が飾ってあり、日本らしさをとても感じられました。午後には、現地の大学生とも交流して、環境問題についても話し合いました。インドネシアでは洪水や、渋滞、ゴミ処理が大きな問題になっていることが分かりました。

3 感想等

7月20日に行われた海外インターンシップの実施前研修では、現地のことについて詳しく知ることができたため、期待が高まりました。初めに参加者同士で自己紹介をしました。私は初めての海外ということもあり、とても不安を感じていました。しかし、一緒に参加するメンバーとお互いのことを質問し合ったりすることで、お互いをよく知ることができ、不安はかなりなくなりました。自己紹介で私は音楽を聞く事や世界史が好きだと伝えたら、同じ音楽や世界史が好きな人がいてとても話も弾みました。また、インドネシアについて学び、通貨単位がルピアということや、1ルピアが日本円だと0.0097円ということも知りました。

7月26日に行われた国内研修では、株式会社呉竹荘を訪問しました。まず他己紹介をしました。その後、常務取締役である山下様から呉竹荘やインドネシアについてお話を伺いました。株式会社呉竹荘ではホテルだけではなく、結婚式場や宴会場、レストラン、保育園まで経営していると伺い、とても驚きました。海外にはインドネシアに2つ、ベトナムに1つ、タイに1つホテルがあり、海外でも広く事業を展開されていることを知ることができました。ホテルの従業員の業務内容としては、掃除や予約受け、料金設定、部屋決め、リクエストチェック、対応、安全管理などがあると聞きました。安全管理は1年に最低2回は防災訓練を実施していると聞き、普段の生活ではあまり知り得ないことまで聞くことができました。

8月5日から8日に行われた海外研修では、インドネシアの首都ジャカルタにあるホテル呉竹荘クマンを訪問しました。ホテル呉竹荘クマンでは畳の部屋や壁に日本の絵が飾ってあり、日本らしさを感じられるところがたくさんありました。また、屋上には日本食レストランがあり、日本の地名がついた会議室もありました。レストランの食べ物は、日本とあまり変わらない味でとても美味しかったです。

現地の大学生とも交流をしました。大学生とは日本語でインドネシアの環境問題などの話をしました。インドネシアの大学生は日本語がとても上手でした。分からない日本語の単語があつたらすぐ私たちに意味を聞いたり、メモをとったりしていました。その姿を見て、私も外国語を本気で学んでみたいと思いました。

このインターンシップを通して、一緒に参加したメンバーとも友好を深められ、海外で活躍している日本の企業「呉竹荘」についてもよく知ることができました。とても貴重な経験になり、この海外インターンシップに参加できたことに感謝しています。静岡県にある企業のことについて深く学ぶことができ、将来、私が起業する際にはこの経験を活かしていきたいと思います。また、言語が違って、自分から話したり、伝えたりすることがとても大切だと思いました。必死に伝えようとすれば、相手に伝わるようになりました。これからの生活の中で、恐れず積極的にコミュニケーションをとるようにしていきたいです。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	12月19日		(対象)	全校・学年	
学校名	県立焼津中央高等学校	氏名	原川 達也	学年	2

1 目的・応募理由

私は自分の海外への視野を広げるため、経験を積むため、そして、世界を平和にするという自分の夢を叶えるため海外インターンシップに応募した。世界では、戦争やそれによって発生した難民の問題や貧困問題、飢餓やテロ、少子高齢化など解決しなければいけない様々な問題が起こっている。ネットが発達した今、離れたところからでもわかることはある。しかし、どんなに沢山の情報を聞いても、実際に見て体験することに勝るものはない。また、私は世界平和を実現するという夢がある。世界平和を実現するためには世界情勢について知っておかないといけない。世界にはたくさんの民族、言語、宗教、文化がある。それらはすべて異なる。したがってその間には必ず軋轢が生まれる。そうしたものをなくすには、互いを知る必要がある。だから私は自分の見解を広げ経験を積み、他国の文化や習慣を知るためにこの研修に応募した。



2 研修内容等

今回の研修は3日にかけて行われた。1日目は夜遅くにインドネシアに到着したため、ホテルへの移動で終わってしまった。2日目はホテルで、3日目はジャカルタ市内で研修を行った。ホテルでの研修は、午前にはホテルの施設を見学、午後は国際交流を行った。ホテル呉竹荘クマンのコンセプトは、「日本を感じる、体感する」である。だから、浴衣の貸出、畳の客室、駄菓子屋風の売店、日本食、大浴場など、ホテルのいたるところで日本を感じることができた。午後の国際交流では、インドネシアの大学生と交流を行った。はじめは工作で現地の観光局の職員に教えてもらいながらジャカルタのマスコットであり伝統工芸品でもあるオンデルオンデルを制作した。その後、現在ジャカルタで起きているゴミ問題の解決方法について話し合った。ゴミ箱の設置や新しいゴミの収集方法について活発な議論を行った。3日目のジャカルタ市内研修は、渋滞で当初予定されていたところに行くことはできなかったが、インドネシア博物館やモスクなどを訪れ、インドネシアの文化や宗教について学ぶことができた。博物館には、インドネシアを構成する島々の伝統的な住居、そこに住む民族の衣装や文化が展示されており、実際に見て学ぶことができた。午後はモスクと、植民地時代に建てられた教会を見学した。また、かつてオランダ植民地時代に使われていた市役所や裁判所、大砲や橋などの歴史的建造物を見学し、虐殺などの悲惨な歴史について学んだ。

3 感想等

今回の研修で私は3つのことを学ぶことができた。1つ目はインドネシアの文化や歴史についてである。私たちはジャカルタ市内研修で、博物館と市街地を回った。博物館にはインドネシアにいる民族の伝統的な家や衣装、行事の装飾などが展示されていた。建物の多くは高床式で涼しげな作りになっており、実際建物内部は

外に比べて少し涼しかった。昼は市街地を回った。昔オランダがインドネシアを植民地支配していたときに使われていた市役所と裁判所とその前に大きな広場があった。そこでは昔裁判で死刑を言い渡された人が処刑されていたという暗い歴史がある。その近くはかつて刑務所があり、裁判所で有罪となった人たちはそのまま刑務所へ連れて行かれた。そこではひどい扱いを受け、特に女性は腰を下げないと入れられないような狭い牢屋に閉じ込められたという。またその近くにはかつてオランダが中国人を大量虐殺した地域があり、その地域の地名には血という意味の地名がついた。このような悲惨な出来事を繰り返さないようにしていかなければいけないと強く思った。また、ホテルの結婚式は外部業者に委託して行っており、多人数で1日中結婚式を行う独特の文化があることがわかった。有名な人や金持ちの人などは大きな会場に友人や知り合いなどを含めて1000人以上招待することもあり、日本と大きく異なると感じた。

2つ目は日本と海外の異なるところである。インドネシアではSNSを広報活動に進んで取り入れている。観光局などの公的な機関でもInstagramなどで積極的に広報活動を行っている。日本ではSNSなどで広告したり、たくさん投稿したりするのは若者やインフルエンサーが多く、公的な機関は積極的にSNSを使うことはあまりない。これはインドネシアには若者が多いということも影響していると思う。しかし、そうしたことは日本にも取り入れたほうが良いと思った。一方、日本語を学んでいる大学生との交流では、主に日本語で話したが、英語でコミュニケーションを取ることも何度かあった。しかし、単語でなんとか伝えるのが精一杯で、英語でコミュニケーションを取る難しさを痛感した。逆にインドネシア人は、多少独特な発音ではあったが、かなり流暢に英語を話していた。インドネシア人は小さい頃から英語の教育を受けており、大学生になる頃にはスラスラと喋ることができるくらいまで学習するという。高校では第3言語も学ぶこと、インドネシアにはたくさんの民族がいるためその民族の言語も習得していることを知った。したがって言語力が高い人が多く、日本以上に言語学習に力を入れていることが分かった。

3つ目はインドネシアの抱える課題である。移動中にとっても印象に残ったのが渋滞である。インドネシアは今経済が発展している時期で、働くほど稼げる時代である。そのため交通量がかなり多く、特にバイクはたくさん走っていた。しかし、車と車の間をすり抜けていくような人が多く、事故がいつ起きてもおかしくない状態でありとても危険だった。ジャカルタでは公共交通機関が発達している。バスや鉄道が色んなところに走っていた。まさに活気のある国ならではの光景だった。一方、コンビニの前に、私たちと年の近そうな少年が、お金の入ったバケツを持って物乞いをしているのを目にした。とても心が痛かったと同時に、経済的格差やセーフティネットの課題があることに気づいた。

今回の研修ではホテル業務だけでなく、インドネシアについてたくさん学ぶことができた。また、インドネシアはトイレにトイレットペーパーが流せないことや、渋滞が酷いこと、道路の整備などがあまりされていないこと、多くの宗教があることなど、日本と異なることがたくさんあることが分かった。そしてこのことがきっかけで海外へ興味を持つことができた。それと同時に、インドネシアの経済的格差や自らの語学力の課題を解決するためにも、日々の学習、特に英語に力を入れていかなければならないと思った。



参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア	
校内発表会	10月29日		(対象)	1学年
学校名	県立浜松北高等学校	氏名	廣本 美優	学年 2

1 目的・応募理由

私がこのプログラムに応募した目的は、自分の進路を明確にするためでした。ホテル業に興味を持っていたので、行動あるのみ、と思い応募しました。インドネシアに祖父母が住んでいて比較的慣れている国というのも応募したきっかけになりました。

2 研修内容等

まず、ホテル呉竹荘クマンジャカルタでホテルツアーをして部屋の特徴や日本にあるホテルとの違いを教えてくださいました。また、現地の大学生とインドネシアの伝統的な人形を作り、文化を学びました。さらにインドネシアの問題について私たち2、3人に対して大学生が1人か2人くらいのグループで議論をしました。首都の深刻な渋滞やゴミ処理問題などについて30分くらい話し合っ自分たちの考えた解決策をみんなの前で紹介しました。私が話し合った議題はゴミ処理問題でしたが、やはり言葉の壁があり、日本語で、ましてや難しい問題について話すのでコミュニケーションを取ることが難しい側面もありましたが、ジェスチャーや英語で拙いながら頑張っ話し合いました。こういう形で英語で会話をするのはとても楽しかったです。大学生の方々は英語で流暢に返すので驚きました。首都のジャカルタではインターナショナルスクールが増加しているとは知っていたけれど、日本よりも第二言語の英語教育が進んでいるとは思いませんでした。お別れする前にも様々な話をしましたが、インドネシア側の視点から日本の話を聞くのはとても新鮮で楽しい時間でした。インドネシアでの滞在最終日に行ったところでは、国立博物館が特に印象に残っています。その博物館は歩いて回るには広すぎて中にはバス停が何箇所かあるくらいでした。インドネシアは島国で多様な文化があるのでその島ごとの建築を再現した家がたくさんありました。自分が想像していた博物館と違いましたが、原始の時代からの歴史も体感でき、とても面白かったです。



3 感想等

ホテルツアーでは海外にある日本法人の会社のホテルだからこそその工夫というものを学びました。7人という少なすぎず、多すぎない人数なので、気軽に質問しやすく、自分から積極的に学びに行く姿勢を取りやすい環境でした。ホテルの説明をしてくださった方は日本語が完璧なインドネシア人の方で、外国人が日本語を学びたいと思ってくれるのは、日本人として嬉しいことだと思いました。インドネシアに2か所あるうちの、ほとんどの宿泊客がインドネシア人の方々であるホテルだったので、それに合った工夫を聞くことが出来ました。

また、現地の大学生からは日本の好きな所や行ってみたい所をたくさん聞いて日本の魅力を再自覚するきっかけになりました。大学生の方々と一緒に伝統人形を作ったので形に残るお土産を日本まで持って帰ることが出来たのも嬉しかったです。今、自分の机の上に飾ってあるので勉強するたびにこのプログラムを思い出してまた同じ仲間で行きたいと思っています。

帰りの飛行機で一緒に座ったメンバーとは自分たちが住んでいるところについてお互いに話しました。私は浜松に住んでいて、その友達は下田に住んでいるので、聞くこと全部が初めてでした。周りに高校がたくさんあり、自分に合った進路を選べる浜松とは違い、下田には公立高校は一校しかないことに驚きました。都市と地方の教育機会の差について問題になっているのは知っていましたが、県内という範囲でも起こっているとは思いませんでした。このプログラムに参加しなかったら、インドネシアの文化についても、自分が住んでいる静岡県についても、こんなに知ることはなかっただろうと思いました。そう思うと、本当にこのプログラムに参加してよかったと思います。同じ浜松市に住んでいるメンバーとはたまにすれ違ったりします。県内のいろんなところに友達が出来たので、学校の友達とは少し違う視点を持っていて様々な意見を聞くことが出来て嬉しいです。3泊4日とは思えない程の学びがあり、今年の夏休みで一番の思い出です。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	今後、2学期に実施予定			(対象)	全校・学年
学校名	県立浜松湖北高等学校	氏名	田中 彩瑛	学年	2

1 目的・応募理由

ホテル関係の仕事に就きたいと考えていたため、海外進出されているホテル企業でのインターンシップに興味がありました。日本の文化や生活様式の異なる海外の地域において、日本のホテルに求められている役割やニーズについて知りたかったため、応募しました。

2 研修内容等

(1) 実施前研修

実施日：7月20日(土)

研修場所：静岡県庁別館 第4会議室

研修内容：所連絡や関係者紹介、高校教育課挨拶、趣旨説明、全体研修、グループ研修、質疑応答、諸連絡等

学校だけでは学べないことがあり、学校外での経験がとても貴重で、大事だと実感しました。社会に出る際に必要なスキルとして、すぐにビジネスマナー・コミュニケーション能力・柔軟性を思いつきましたが、語学力や主体性、チャレンジ精神、専門性など他にも必要なことがあると知ることができました。私には、リーダーシップ力やコミュニケーション能力がまだまだ足りません。今後の研修で一番に意識して伸ばしていこうと決意することができました。また、日本で働くにしても、海外で働くにしても、一步踏み出す力が必要不可欠になると実感しました。今回の海外研修では、一步踏み出す力についても、チャレンジして獲得したいと思うことができました。

(2) 国内研修

実施日：7月26日(金)

研修場所：呉竹荘

研修内容：会社概要（国内・国外）、事業概要（宿泊業以外も含む）、企業理念、宿泊業の業務内容概要、インドネシアについての概要、質疑応答等

今回の国内研修では、ホテルの役割や事業内容について具体的に理解することができました。そして、呉竹荘の企業理念でもある「人々のライフスタイルを豊かにし、幸せに貢献し続け、平和で豊かな社会を追求する」ことが呉竹荘の強みであり、最上級の食とおもてなしを国内だけでなく、世界中に届ける活動でもあるのだと実感することができました。ビジネスに関する内容をたくさん聞くことができ、学校での商業の授業の取り組み方を改めて大事にしようと思えることができました。

(3) 海外研修

実施日：8月5日(月)～8月8日(木)まで

研修場所：インドネシア『ホテル呉竹荘 クマン ジャガルタ』

研修内容：1日目 浜松→羽田空港→インドネシア
2日目 午前 ホテル研修



- 午後 現地スタッフ、地元大学生との交流
- 3 日目 午前 ジャガルタ市内研修
- 午後 インドネシア空港→日本へ
- 4 日目 羽田空港→浜松

2 日目の午前中のホテル研修では、インドネシア人と日本人との文化や生活様式について全くと言っていいほど、違うことを再認識しました。インドネシア人は裸で入浴しないので、浴室に使い捨ての下着が置いてあったり、祈祷室があったり、文化や生活様式が異なることで、配慮することやものが必要となると知ることができました。また、午後の討論会では、現地の大学生が話している内容を理解できなかつたり、分からない日本語があつたりと、会話が進まない場面がありました。言語の違いで、お互いの意思疎通が上手くいかず、理解を深めることに苦戦しました。英語力を身につけることが最大の課題であり、もう少し私たちに配慮することができていればよかつたなど反省しています。また、ジャガルタの問題について聞いている中で、国にとって発展することは良いことですが、自然災害や環境問題が増加していることも新たな課題になっていることを確認できました。ビジネスの力で地球環境の問題解決ができれば、それがSDGsにつながる活動になると思いました。



また、ブタウィ族文化の『オンデルオンデル』という巨大な張りぼて人形に大変興味を持ちました。実際にミニサイズの人形作りを体験し、写真を撮りました。『オンデルオンデル』の歴史を知ることができ、異文化にもっと触れる機会を持つと同時に、私自身が日本の文化についてしっかり理解していなければいけないと実感しました。

今回の海外インターンシップでは、私にとって自分で何事にもチャレンジしようとする力と柔軟に対応する力を一番に鍛えることができたと思います。そして、今の私にとって、語学力とコミュニケーション能力が最も必要であると実感しました。今後の高校生活において、克服できるような活動を取り入れていこうと思いました。

3 感想等

商業科で学ぶ私にとって、ホテル経営や業務内容など国内外で実体験できたことは大きな学びとなりました。インドネシアと日本の文化の違いから、そこに配慮すべきことがあり、日本企業が海外に進出する際には、ローカライゼーションの考え方を大切にすることが、現地で企業としての役割を果たすことにつながると理解しました。以前から、ホテル関係の仕事に就きたいと考えていましたが、今回の貴重な経験からグローバル化の中でのホテルの役割や、インバウンド対応などの課題について、今後は、学校の授業の中でも考えていきたいと思いました。

改めてホテルで働きたいと決意することができたので、日本人としての誇りを持ち、日本の文化を海外の人たちに自信を持って発信することができるホテルスタッフを目指します。そのためにも、日本の文化を知り、大切に思うことが必要です。そのような活動にも積極的に取り組んでいきたいです。今回は、貴重な機会を与えていただき、ありがとうございました。



グローバル人材育成事業報告書

参加したプログラム	高校生海外インターンシップ	訪問国	インドネシア		
校内発表会	9月2日		(対象)	全校・学年	
学校名	浜松学芸高等学校	氏名	黄 桜子	学年	2

1 目的・応募理由

私は将来、外資系航空会社で乗務したいという夢があるからです。実は薬学部を志望していますが、人生で一度は客室乗務員としての経験を積みたいと考えています。今回の研修では、コロナ渦で不況になってしまったインドネシアの観光業の実態や海外でのホスピタリティを自分の目で見て学びたいと思い応募しました。

2 研修内容等

実施前研修

- ・研修日時：令和6年7月20日（土） 午前10時から午後3時まで
- ・研修場所：県庁

国内研修

- ・研修日：令和6年7月26日（金）
- ・研修場所及び研修時間：株式会社呉竹荘本社 午後1時から4時まで

海外研修

- ・研修期間 令和6年8月5日（月）から8日（木）まで

研修日及び研修場所

1日目 スカルノハッタ国際空港到着その後ホテルへ

2日目 ホテル呉竹壮クマンジャカルタ業務研修、ビヌス大学日本語科の学生と文化交流会

3日目 ジャカルタ市内研修

- ・Taman Mini Indonesia Indah
- ・ファタヒラ広場
- ・イスティクラルモスク
- ・ジャカルタ大聖堂
- ・Grand Lucky
- ・Taman Ismail Marzuki

その後空港発、日本へ

4日目 日本到着

ホテル研修：フロント業務や施設完備の見学をして、日系ホテルのおもてなしスタイルや和の雰囲気になりながら、礼拝室の完備やラマダン明けの宴会サービス等のインドネシア人のニーズにも対応している点に感心しました。



文化交流会：ビヌス大学の日本語科の方々からインドネシアの伝統芸「オンデルオンデル」で迎えられた事がとても印象的でした。その後は学生とグループごとにミニオンデルオンデル人形の製作やインドネシアの社会の問題のディスカッションを通して交流を深めることができました。教授からはインドネシアの食文化や日尼関係の百年間の歴史についての貴重なお話を伺い、とても貴重な体験でした。体験を通じて、



インドネシアという国をより一層身近に感じられるようになりました。

市内研修：「Taman Mini Indonesia Indah」はインドネシアの様々な島のパビリオンを集めた屋外テーマパークで、バリゾーンやスマトラゾーンなどインドネシア 33 州のパビリオン、18 の博物館、9 つの動植物園があり、ガムランや歌のショーも楽しめる場所です。「ファタヒラ広場」は 16 世紀のオランダ領時代に作られた広場で、現在はカフェやレストランが立ち並び、ローカルな雰囲気を感じることができます。「イスティクラルモスク」は 1961 年にスカルノ大統領によって建設された世界最大級のモスクで、異教徒も見学可能です。向かいにはジャカルタ最大級の教会「ジャカルタ大聖堂」があり、ムスリムが多いインドネシアでクリスチャンも祈りを捧げる姿が見られます。「Grand Lucky」は急遽訪れたスーパーで、ハラール認証の加工食品が多く、アラビア語表記も多かったことからイスラム教国だと再認識しました。帰路ではインターンシップの思い出を語り合い、楽しいひと時を過ごせました。



3 感想等

ジャカルタで過ごした 4 日間は、人生で一番アツイ夏の思い出でした。短い滞在でしたが、これを読んでいるあなたにも私が体験したインドネシアの魅力をぜひお伝えしたいです。

街を歩けば、近代的な街と若者たちが織りなす力強いエネルギーに圧倒されるでしょう。都市特有の交通渋滞に悩まされましたが、彼らの親しみやすさが際立っており、どこへ行っても明るくて笑顔の絶えない人間性に常に心が温かく満たされていました。彼らと関わる中で自分自身も自然と笑顔になり、シャイな私でも積極的にコミュニケーションを取ろう、人ともっと関わりたいという気持ちが芽生えました。今回のインターンシップでは現地の人々と積極的にインドネシアの文化や生活に触れる事で、多くの驚きと発見に満ちていました。異文化を肌で感じ、世界の様々な側面を自分自身で垣間見えた素晴らしい機会をいただきました。今後はさらに多くの国々に訪れ、より広い視野を持って世界をみていきたいと思えます。



ガルーダ航空の CA と記念撮影



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	マイ探究コース			訪問国	アメリカ合衆国
学校名	静岡農業高校	氏名	太田海帆	学年	三年

留学のテーマ 「犬にとってストレスのない動物保護施設を作りたい」

○留学前

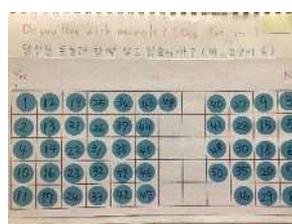
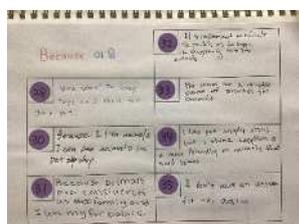
冬に留学したので、夏は国内の動物愛護センターに行った。施設内を見学しながら、説明を聞いたり、ボランティア活動について質問したりした。昔と今の動物を保護した後の動きや、殺処分の機械のことを詳しく聞くことができた。施設で働く人の中に獣医、動物看護師がいて、施設にいる動物たちの治療をその場でできるようにしてあった。処置をしても治らなかったり、もともと処置のできる状態だったりすると、最近はガスではなく薬や麻酔を使って安楽死という処置をするということを知った。その施設に行く際に看板がなく、初めて行く人が迷いそうな場所にあるため、大通りの車がたくさん通るところから看板を出して、もっと人が行きやすいようにすると良いと思った。



○留学中

探究活動は、アンケートと動物保護施設の見学、動物関係のスタッフにインタビュー、街なかにある犬のための工夫を探すことをした。

アンケートは乗り継ぎの空港で犬を連れてくる女性を一人目としてスタートした。留学前にスケッチブックとシールでアンケートの準備をした。質問は三つと自分の意見を書くところが2ヶ所。地域の人を中心に行おうと思っていたが、自分の英語力が話しかけられるほどではなかったため、主に語学学校の友達に答えてもらった。ホームステイのホストファミリーに手伝ってもらいながら、動物園のスタッフやペットショップの店員さんにも答えてもらうことができた。語学学校の友達に答えてもらうとき、日本とアメリカ以外のことも聞けたため、よりいろいろな地域のペット事情を知れて良かった。



動物保護施設の見学は複数の施設に行くことができた。その中で、自分がロサンゼルスを選んだ理由のずっと行きたかった施設は、予約をして動物を連れて来ることができる人しか入れないらしくて、施設をじっくり見ることは出来なかった。しかしホームステイのホストファミリーが事情を説明してくれて、トリミングをする場所とそこの担当の人と話すことができた。動物たちの清潔を保つために、人に触られることに慣れるためにトリミングを行っている。この施設には、どのような動物がいるのかタッチパネルのようなもので見ることもできた。他にいった施設のうち記憶に強く残っている施設は、室外にコンクリートで犬の部屋が作られていて、高さは大型犬の体高の1メートルほどで犬にとっては暗くて全体が囲まれていて安心できる場所になっているかもしれないが、少し冷たい印象があった。課題もあるが、木材を使うとより温かみがある施設になるのではないかなと思った。また、コンクリートの灰色が目立つので、カラフルにすると楽しい雰囲気が作れると思った。



街中にある犬と暮らすための工夫は、街のところどころに犬の排泄物を捨てるための袋がポストのようなものに入っていて、隣にゴミ箱も置いてあった。場所ごとに袋のイラストが異なり、袋の色は黒や緑だった。住宅街の近くには、ドッグランや散歩コースがあった。ドッグランは大型犬用と小型犬用に分かれていて、水飲み場、犬の排泄物用のポスト、ベンチ、木陰があった。どこのドッグランにも5人以上の利用者がいて、動物を飼っている人たちのコミュニケーションの場になっているように感じた。小さい子供が遊ぶところには、子供が安全に遊べるように犬が入れないようになっていた。ペットショップには、犬猫の生体販売はしているところは少なかった。保護猫を生体販売しているお店はあった。ペットフードの種類が豊富で、ペットショップではなく地域のスーパーにもペット関係のものがたくさん売られていた。



○留学後

留学中に新しく疑問に思ったことがありまだ調べられてないから、リストに書き出して全て調べていこうと思った。また、アンケートしたいこともできたので SNS を利用して行いたい。

参加した コース	マイ探究コース		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡県立静岡城北高等学校	氏名	水野凜果	学年	2年

私は今回の留学で学んできたことや、経験してきたことを報告したいと思います。

まずは、私の留学先についてお伝えしようと思います。私は、今回、オーストラリアにあるジンブンバというブリスベンから車で約一時間ほどでつく場所に留学させていただきました。ジンブンバは、自然が豊かな場所に加え、広大な面積を持っています。例えば、高速道路のことなのですが、日本は旅行などで、他の県なども遠い場所に行くときに高速道路を使いますが、ジンブンバでは面積が広いことでその高速道路を普段の移動に使っていました。私は、ジンブンバのインターナショナルスクール（以下、現地校）に約1ヶ月間留学しました。そこでもまず、驚いたことがありました。それは、学校の敷地内にカンガルーがいるということです。学校でランチを取っている間に、学校に設置してある柵の向こうにカンガルーが走ったり、歩いていたりする光景をよく見かけました。私が、その光景に驚いているのを見て、現地校の生徒の方が、「留学生の子はみんなその反応をするよね。」と笑って言っており、私はそこで習慣というもの本当にすごいものだなと初めて身にしみて感じました。さらに、私はホームステイをさせていただいたのですが、その時に、ホストファミリーと一緒にスーパーに行く時がありました。そこで、ホストシスターに突然、バナナを渡されて「食べて。」と言われました。私はお金も払っていないのに良いのかと思ったのですが、それはもうすぐ廃棄されるかもしれない果物でそれを子どもたちのために無料で配布しているものだったようです。日本ではめったにない光景ですが、食べ物を粗末にはいけないという考えを持つ日本にも取り入れるべきだなと感じた瞬間でした。



次に、私が留学の目的とした探究についてです。私は、「子ども個人に適した学習環境を作るための方法をインクルーシブ教育から考える」ということを探究テーマとしました。インクルーシブ教育とは、障害の有無、国籍の違いを問わず学生が同じ空間でともに学ぶこと、そして誰一人取り残さず平等に教育を施すという教育における考えです。私が、この探究を始めよ

うと思ったきっかけは、中学の頃、友達に自分の学習環境について悩んでいた子がいたことから教育について身近に考えるようになったことと、様々な学習環境や教育方法を自分の目で確かめてみたいと思ったからです。私は、このテーマのための探究活動として、以下のことを行いました。

- ・現地校の生徒にも同様の質問をしてインタビューすること
- ・実際に現地校の普通クラスに留学させてもらい、授業を受ける



私がこの探究活動を通し、オーストラリアの教育環境をみて気づいたことが主に2つあります。1つ目は、今の自分の学習環境を自分のために変えるというためらいがないということです。現地の生徒へのインタビューで「今の環境合っている？」と聞くと「自分のしたいことができないので合っていない。だから、今度その環境が整っている他校へ引っ越す。」との返事が返ってきました。当時、私の中には今ある環境でどうにかするという考えしか浮かんでいなかったため、この考え方にはとても驚き、自分の中で環境を変えることへの抵抗があったのだとも同時に気づきました。私は、ここから日本にはまずこの考え方を変えていくサポートが必要なのだと学びました。そして、2つ目は、実際に授業を受けて感じたことで、教師と生徒の距離が近いこと、そして教師は生徒の行動を全て指示するのではなく、次の行動に生徒自身が移すためのサポートをしているということです。まず、教師と生徒の距離が近いということなのですが、日本では教師一人が生徒40人を相手に授業をしますが、現地では、一人が15人程を相手に授業をするので教師も生徒の細かいところまで把握し、向き合うことができる空間になっており、それにより生徒も発言がしやすくなることで意見交換が活発に行われていました。次に、生徒の行動を教師が促すということについてですが、これは、現地校に併設されている英語を第一言語としない留学生が英語を勉強するクラスで一人の生徒が英語をうまく話せず教師に質問できなかったときに、「この表現を使ってもう一度言ってごらん。」と行動を促していました。ここから、できないことを否定するのではなく次につなぐサポートが学習においては必要なのだと新たに知ることができました。

私は今回初めての海外での留学でしたが、たくさんの経験をすることができました。そして一番感じたことは多くの人に支えられたということです。今まで、あまり意識できていなかった感謝というものを、留学で改めて意識できる様になったことも良かったなと思いました。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	マイ探究コース			訪問国	カナダ
学校名	浜松学芸高校	氏名	松井 慶	学年	2

高2の夏に2ヶ月間カナダに留学しました。僕の探究テーマは「浜松をスポーツのしやすい街にしたい!」です。そこで「カナダのスポーツ政策から学ぶ、スポーツのしやすいまちづくりとは?」という問いを立てて探究しました。このテーマと問いの設定理由は、浜松では、公園はあってもボール遊びができなかったり、体育館は一般開放が少なく、使える機会があまりなかったりと、浜松ではスポーツのしやすい場所が少ないと感じていました。そこで、スポーツ政策などで先進的な取り組みを行っているカナダに行ってスポーツをしてみたいと思ったからです。具体的に行ったことは2つあります。

1つ目は、公園のバスケットコートで現地の人とバスケをしたり、地域の体育館の一般開放に参加したりすることで、カナダでのスポーツ事情について体験することです。カナダには、公園やバスケットコートが街中にあり、いろんなところにスポーツをしている人がいました。



また、一般解放については、渡航前にトロントのホームページで見つけたので、放課後などにそれを活用して、一般解放に参加しました。行った時に一番感じたのは、参加のしやすさです。場所が多いことに加えて、現地の人みんな優しく、「一緒にやろうぜ」と声をかけてくれることもありました。インタビュー内容は、週に何日、何時間スポーツをするか、主になんのスポーツをするか、や、トロントのスポーツ事情を1~5で表すと何ですか?とその長所、短所などです。インタビューの結果は週に4日以上スポーツをする人が多い(25件中19件)・バスケットコートでインタビューすることが多すぎたのか、バスケをする人が多かった(25件中16件)・それ以外ではカナダの国技でもあるアイスホッケーを冬にする人が多かった(25件中13件)などでした。最初は、英語で話しかけるのが怖かったけど、声をかけたら、快く受け入れてくれてとてもインタビューしやすかったです。

考察

僕の考えるカナダのスポーツのしやすさの秘訣は一般解放の使い方です。地域ごとにコミュニティセンターが、設置されていて、一般開放は、曜日、時間、アクティビティ(競技)、年齢ごとに使える時間が決まっていて、その時間内なら無料で使用することができ、そのスケジュールはHPで確認できました。また、体育館だけでなく、テニスコート、小さめの

プールなども同じ施設に設備されていました。

浜松市をスポーツのしやすい街にするために僕が考えたこと

浜松市とカナダでは、スポーツのできる居場所の数に大きな違いがありました。居場所を増やすためにできることとして、一般開放の質の改善をすることで誰もがスポーツを楽しむことのできる浜松ができると思いました。一般開放の質の改善をすることで地域の施設の利用者増加とスポーツのできる居場所の需要が上がり、新たな施設の設置も容易になっていくと考えました。また、この考察を広めていくことが大切だと思いました。具体的には、帰国後、「浜松市総合計画基本計画(案)」のパブリックコメントの提出をしたり、市議会議員と話せるイベントに参加したり、学校の部活で発表したりしました。これからもさまざまなイベントに参加して、広めていきたいです。

最後に・・・

この留学は、自分を変えるととても大きな経験になりました。僕は、留学前はいまいち将来やりたいことが決まっていなくて、のんびり過ごしていましたが、留学を通し、普段とは全く違う環境で過ごしたことで、世界の広さを思いっきり感じられました。また異国で2ヶ月間過ごした経験が、新しい興味や関心を教えてくれて、大学ではあんなことしたいな、という希望につながっています。この留学での経験を活かして、大学でも留学したいです！！



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	マイ探究コース			訪問国	アメリカ合衆国
学校名	日本大学三島高等学校	氏名	眞野亜月	学年	2年

海外に行きたい！フラを上達させたい！という思いから私の留学は始まりました。いくつもの海外研修に応募してきたけど抽選で全て落ちてしまい、行くことができていなかった私がこのチャンスは逃さないと思ったのがこのトビタテでした。「自ら学び、フラでハワイと日本を繋ごう」というテーマでハワイへ3週間の留学をし、現地では語学学校とフラの教室に通いました。また、探究活動の一環として観光地を巡り歩いてアンケート活動を行ったり、ハワイの歴史を探るべくさまざまな博物館などに行きました。



まず語学学校ではレベル分けテストを実施し、自分のレベルに合ったクラスで授業を受けることができるとともにクラスにはいろいろな国の人がいるのでその友達を作ることができました。私が質問に行っても優しく簡単な英語で教えてくれたり、授業後にサポートしてくれてハワイの人たちは優しいなと感じました。また、クラスの8割くらいは日本人でしたが日本人同士でも英語で日常を話すことができたり、他の国の人とアクティビティに出かけたりできて語学力を成長させることができたのかなと感じています。

また、フラの教室は語学学校とは真逆で完全に English only なので、フラはもちろん語学力の向上もすることができました。レッスンの前にはみんなその日のハワイの出来事についての意見を言い合い、ハワイの出来事にすごく強い関心を抱いていると感じました。自分の住んでいる場所の歴史について知っておき、その歴史について考える時間を設けるのも大事だと思います。

それ以外にも大きなショッピングモールやワイキキビーチで見ることができるフラを見に行ったりし、本場のフラを全力で学ぶことができました。



それ以外にもハワイが観光地として人気な理由を探るため、ワイキキビーチやダイヤモンド・ヘッドなど観光地を巡り歩きアンケート調査を行いました。まず、自ら観光地であるワイキキビーチやダイヤモンド・ヘッドに足を運び、その歴史を探求しました。例えば、ダイヤモンド・ヘッドにはアメリカ海軍の監視基地だったと



言う歴史やダイヤモンド・ヘッドの名前の由来は、19世紀にイギリス人が火口付近で見つけた鉱物をダイヤモンドだと勘違いしたことだと言う説も。

またアンケート調査では「なぜハワイに来たのか」というアンケートをすると、「景色が綺麗だから」「治安がいいから」「親子留学をしに来た」「フラ留学をしに来た」などさまざまな回答を得ることができました。確かに私もハワイは過ごしやすい気候で海も山も全て綺麗で食べ物も美味しく、ハワイに来たからにはフラをやりたくなります。そこから私はこう考えました。「日本や静岡の観光地や手軽に食べることができるおすすめ料理、日本でできる文化体験などを海外に発信して、海外の人に興味を持ってもらおう！」そんな発信をしていきたいと思います。



私は日本人のホストマザーがいる家庭にホームステイしていました。家から出ると English only で苦戦していたのに家に帰ると日本語で話してくれたので安心していました。「それじゃあ海外に行ってる意味ないんじゃない？」と思われるかもしれませんが、ホストシスターは英語とハワイ語しか話せなかったのホストシスターとは英語やハワイ語で話していました。とても優しいマザーで私が風邪を引いた時にも対応してくださいました。そんなホストファミリーにアンバサダー活動の一環としてお箸とお菓子を持っていきました。お箸は実際に朝夕のご飯の時にみんなで使って、お菓子はおやつの時間に食べてもらいました。それ以外にも折り紙を持っていき、ホストシスターや語学学校の人たちと一緒に折って楽しみました。

留学を終えた今はエヴァンジェリスト活動としていろいろな場所で講演をさせていただいています。自分の高校で行われた中学生向けの学校説明会や校内で行われたトビタテの説明会や静岡県と東部地区で行われたトビタテ2期生に向けた説明会などに参加してトビタテという制度や私の留学生活について説明しました。興味を持って聞いてくれる人たちばかりで応援してあげたいという気持ちが高まっています。今後も留学したい！と思える中高生を増やせるようなエヴァンジェリスト活動に取り組んでいきます。



高校2年生で探究を伴った留学を経験したことによって世界規模で物事を考えるようになり、さらに自ら積極的に挑戦する力をつけて自分の可能性を広げることができました。初めてのことであり楽しみでもあり不安でもあった留学でしたが、何事にも挑戦することの大切さを知ることができました。また、今回の留学を通して今後探求していきたい課題が見つかったのでそれについて探究をしつつ、留学したいと思う学生が増えるような活動をしていきたいと思います。

参加した コース	マイ探究コース		訪問国	デンマーク	
学校名	静岡県立清水南高等学校	氏名	名倉花	学年	高1

私はデンマークで2週間、「幸福が成り立つ多様な視点と社会の仕組みについて学ぶ」という探究テーマのもと探究活動を行う留学をしました。具体的には街頭アンケート、小学校、福祉施設への訪問、幸福博物館の観覧を行いました。それぞれの活動の成果をお話します。街頭アンケートでは幸福についてのいくつかの質問に町の人に答えてもらいました。主観満足度についてはとても幸福、幸福、少し幸福、幸福ではないの中だと、幸福、少し幸福と答えた方が多かったです。幸福度ランキングが2位のデンマークも常にとっても幸せな状態ではないと知りました。目指しているのは常に幸せを感じるのではなく、満足した生活、余裕のある生活の持続だとわかりました。また、デンマークでは自己決定の文化が根付いていて、幼少期から自分が何をしたいかを聞かれ、自分のしたいことを自分で決めているとわかりました。

次に幸福博物館についてです。幸福博物館はデンマークのハピネスリサーチ研究所が作った幸福についての様々な情報が展示されている博物館です。幸福について、いろいろな視点から考え、その自分の考えをより明確にすることができました。

次に福祉施設と小学校の訪問から学んだ福祉と教育についてです。デンマークでは助け合いの文化が根付いていて自由で平等、個性を尊重するなどの福祉サービスの特徴があると知りました。教育については生徒一人一人に対しての先生の対応が手厚いとわかりました。また、学校は学ぶ場所という共通の認識があり、生徒がどうしたいかを最優先していると知りました。

次に印象に残ったエピソードについてです。小学校では一年生の授業を見学したのですが、朝の会の際に先生が生徒一人一人に放課後何をするか聞いていて、応答に対して、ヒュッグだねと返答していました。ヒュッグは居心地のいい空間という意味のデンマーク語です。ヒュッ



グの身近さを知り感銘を受けました。

私が行く前に立てた仮説と違ったところを話します。幸福度の高い国は精神疾患患者数は極端に少ないと思っていましたが、精神疾患を患う人は一定数いて、数と幸福度との関係はほとんどありませんでした。ただ、日本と明らかに違ったのは発症後の治療と周りの環境でした。そのためデンマークでは病気を患った人でも生きやすい国になっているとわかりました。そしてもう一つ、常に幸福な人が多いという仮説を立てたのですが、常に幸福ではなく少なくとも波はありますが、日常の何気ないところから幸せを感じることができる、満足できる暮らしをしていて、認識のずれを感じました。

日本の文化の紹介の活動についてです。ホストファミリーに照り焼き、お好み焼きなどの日本食を振る舞いました。浴衣も一緒に着てくれました。また、街頭アンケートのお礼の際に緑茶と折り紙を渡すととても喜んでくれました。

このような活動を通して幼い頃からの自己決定の文化が根付いているからこそ、各々の幸福の形が確立していて、自由な生き方を尊重できる手厚い社会サービスもそれを助けているとわかりました。

そして、日本とデンマークで根本的に違うのは幸福についての意識だとわかりました。幸福についての多様な情報をインプットできる社会、多様な価値観が生まれ、それを受け入れアウトプットできる社会が重要だと感じました。

今後の挑戦についてお話しします。日本の幸福度の向上に貢献したいというモチベーションを持ってこの問題に複数の視点から活動に取り組みたいです。臨床心理士になり、日本で生きづらさを感じている人と向き合い、直接的なサポートをしたい、幸福について常に考えられるような場所を作りたいと考えています。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加したコース	社会探求コース		訪問国	ドイツ	
学校名	角川ドワンゴ学園 N 高等学校	氏名	石橋美心	学年	1

1 目的・応募理由

今回の留学の目的は、動物福祉先進国ドイツの実態を調査し、自分の世界に対して視野を広げること。応募したきっかけは、日本、静岡の動物福祉を変えたかったから。日本は、世界と比べて動物福祉が遅れていて、犬猫殺処分やペットショップ生体販売などが行われている。それに比べて、動物福祉先進国のドイツは、犬猫の殺処分0、ペットショップでの犬猫生体販売禁止を実現している。そんなドイツで、最先端の動物福祉を学び、その学びを活かし、日本、静岡の動物福祉情勢を変えるために応募した。

2 研修内容

9月1日 ドイツ・ミュンヘン到着

9月2日～9月15日 語学学校に通いながら、ミュンヘンティアハイムの視察

- ・視察の案内
- ・動物舎の見学
- ・インタビュー
- ・野生動物の保護の県学
- ・安楽死の同行

9月16日～9月29日 語学学校に通いながら、ペットショップの視察

- ・日本との商品の違い調査
- ・生体販売の実態
- ・小動物の環境
- ・インタビュー

9月30日～10月6日 語学学校に通いながら、動物園の視察

- ・エンリッチメント（動物が暮らす環境の工夫）調査
- ・日本との違い

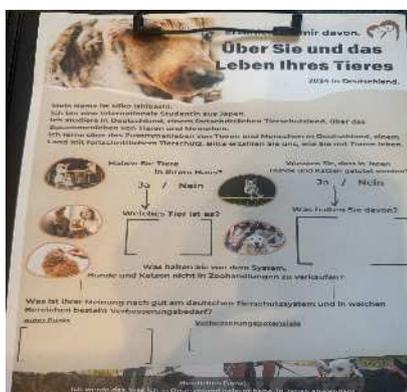
ペットショップでの小動物の展示の様子

ミュンヘンで一番大きい動物園

街中の動物環境調査も行なった

街中には、犬の飲み水が置いてあり、ゴミ捨て場もたくさんあった。

ペットショップ以外にも、スーパーやドラッグストアで、ペットグッズの調査をした。



動物の里親探し掲示板

アンケート調査に使った用紙

実際に行ったペットショップ

感想

初めての海外で不安もあったが、自分の学びたいことを学ぶことができ、語学力も上達することができて、世界に対しての視野が広がった留学だった。自分が想像していたドイツの動物福祉は、全てが成功していて完璧なイメージだった。けれど、実際にいってみて。ドイツの動物福祉の課題を知ることができて、どんな先進国でもまだまだ改善点はたくさんあることがわかった。日本の現状も再確認することができて、新たな学びをたくさん発見することができて、様々な体験をすることができた。この留学を通して、学んだことを活かして、日本、静岡の動物福祉情勢を変えたいと、改めて思うことができた。



ペットショップでの小動物の展示の様子

ミュンヘンで一番大きい動物園

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	社会探究コース			訪問国	カンボジア
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	石川智美	学年	1年

探究テーマ 発展途上国の教育は本当に日本と比べて遅れているのか

カンボジアに三週間、前半二週間はプノンペンにある農村部プレイボンという村でホームステイをしながら、現地の小学生に向けて英語の授業を行ったり、プライベートスクールの見学や、隣の村にあるキリスト教の教会での中国語指導を見学した。また、授業のない休日には、同じインターン生とトゥールスレン虐殺博物館に行つてカンボジアの歴史を学んだ。後半一週間は都市部であるシェムリアップに移動し、ホテル泊をしながら遺跡の見学や高校、大学の見学を行った。

これらの活動は、「発展途上国の教育は本当に日本と比べて遅れているのか」という探究テーマに対する答えを見つけるために行なつたものである。

<農村部での生活>

現地の小学生に対して、単元目標や授業内容を毎日考えて2時間弱の授業を行なつた。子どもたちは勉強への意欲関心が非常に高く、質問を積極的にしていた様子が印象に残つた。

また、午前中の清掃活動では、姿を見かけた子どもたちが笑顔で走り寄つてくれ、言語の壁を感じさせないコミュニケーション能力に感動した。

放課後のプライベートスクールは、午前中に勤務先の学校で授業を行なつた先生が自宅に生徒を招いて授業を行うスタイルで、教員たちの指導への熱も印象に残つた。

加えて衝撃を受けたことは、家に集まつた子どもたちが学習進度の遅い子どもたちに対して授業を行なつていたことだ。子どもたち自身が勉強に対して真に意欲と好感を持っていなければ見られることのできない状況であり、その熱意に感銘を受けた。



一方、発展途上国の教育は遅れていると言われる理由も実際に自分の目で見る事が出来た。親の仕事を手伝うために授業は基本午前中終わり。農村部の学校は奨学金が出ないため、収入の少ない両親の子どもは学校に行かずに働いていた。学校の環境や恵まれない家庭の子どもたちに対する対応はまだまだ改善できるところがあると感じた。



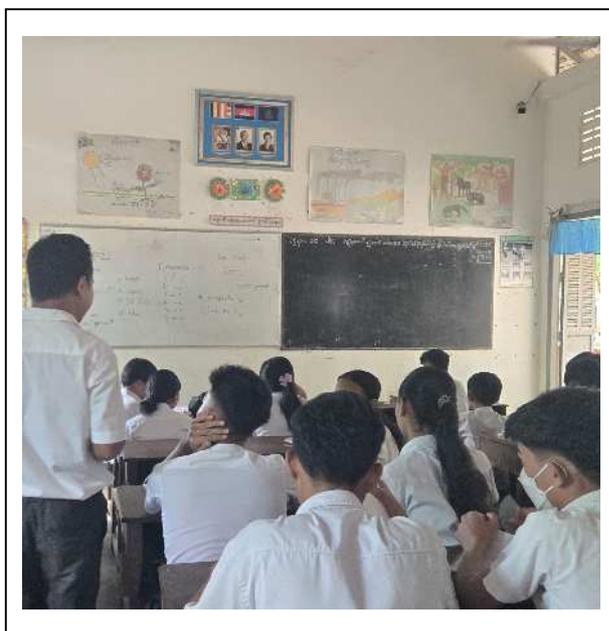
<都市部での生活>

シェムリアップに移動してまず驚いたことは、英語が通じるということである。シェムリアップにおいて、英語は準公用語のような存在であり、観光都市であることもあって、英語が話せなければ生活していくことはできない雰囲気があった。

都市部では、シェムリアップで一番大きいアンコール大学と、スヴァイトムハイスクールを見学した。

アンコール大学は、シェムリアップで一番大きいと言っても学部は限られており、観光都市にある大学ということもあって観光業に通ずる学部が多かった。

スヴァイトムハイスクールは、私がカンボジアで生活した中で一番衝撃を受けた場所であった。農村部で生活していたこともあり、学習進度に関して日本に劣っているものだと思っていたが、高校の授業はレベルが高く、物理や数学は私では理解が及ばないものだった。長年発展途上国に染みついた「教育が遅れている」という概念がひっくり返された衝撃を受けた。



また、都市部の学校は奨学金制度と授業のやり直し制度が整っており、経済難の子供も等しく勉学に励むことができる環境であった。授業のやり直し制度について、午前の授業を午後やり直しすることができ、生徒を置いていかないという意気込みが見えた。

教育のレベルの高さに加えて、同じ国であっても農村部と都市部でこんなにも違いが出るものかという点でも衝撃を受けた。

参加した コース	スポーツ・芸術探究コース			訪問国	ニュージーランド
学校名	静岡聖光学院高等学校	氏名	崎山湊太郎	学年	1年

私は、ラグビーが大好きです。ラグビーは、プレーするまでに色々な事を考えなくてはなりません。そこから、自分の特徴、性格を知れると思います。そんなラグビーをもっと多くの人に知ってもらいたいから「ラグビーを通して静岡の人を幸せ・楽しくするためには？」というテーマで探究活動を行っています。そして、この探究テーマを解決するには、「静岡をラグビー大国」にする必要があると考えています。そこで、世界最高峰のラグビー大国ニュージーランドへ留学し、「なんでニュージーランドでラグビーが広まったのか？」を調査しました。

私は、ニュージーランド・オークランドにあるKelston Boy's High Schoolに昨年の7月28日から9月29日の2ヶ月間留学しました。

私が留学中に行った、探究活動は2つあります。1つ目は、現地の方へのインタビュー活動です。この活動は、「ニュージーランドにとってラグビーがどんな存在か？」を調査しました。この活動ではニュージーランドがなぜラグビーが好きかを問う事で、新たなラグビーの魅力が見つかると思ったからです。実際に、インタビュー活動では、ラグビーはあって当たり前という意見が大半でした。2つ目に行った探究活動は、選手としてニュージーランドラグビーを体験する活動です。この活動は、ラグビー王国ニュージーランドのラグビーを体験する事で、自分自身のラグビーのLevel upをはかりました。この活動を行った理由は、自分自身のラグビーのキャリアがなければ、「ラグビー大国静岡を作る」と言う思いが多くの人には伝わらないと考えたからです。

この2つの探究活動から私は、「なんでニュージーランドでラグビーが広まったか？」という問いに対して、「ニュージーランドラグビーはニュージーランド文化に欠かせないものだから」という答えを得ました。ニュージーランドには、元々先住民族マオリ族が闘争心を表すハカを踊る文化があります。その闘争心とラグビーがマッチした事で、ラグビーはニュージーランド文化に欠かせない存在になりました。



そんな留学での探究成果を得た私でしたが、私の留学が順風満帆なものではありませんでした。私は、留学渡航3日前までラグビーの大会に出場していました。しかし、大会最終日に怪我し、1ヶ月間ラグビーができない状況でニュージーランドに行く事になりました。

その私は、2ヶ月間異国地で過ごす事の不安・ラグビーができないと言う悔しい気持ちで一杯でした。でも、自分がニュージーランドに滞在できる期間はたったの2ヶ月しかないと思い、「目の前の事を一生懸命やろう」と決めました。まず、8月のラグビーができない期間はインタビュー活動に専念しました。そこから、現地の人と会話する事で、留学を頑張ろうと思うようになりました。そして、ラグビーができるようになった9月から、チームメイトとラグビーを通して会話できる楽しさ、ラグビーができる楽しさで留学がとても楽しくなりました。



この経験から、留学を通して精神的成長として、「目の前の事を一生懸命やる」事の大切さを知る事ができました。

私は、今後ニュージーランドでの探究活動で得た「ニュージーランドラグビーはニュージーランド文化の一部になっていた」ことから、「静岡の問題・文化」がラグビーを通して解決・発展できれば、必ずラグビーは広まって行くと考えました。そこで、静岡県唯一のプロラグビーチーム静岡ブルーレブズ対リコーブラックラムズ東京の試合時に、「人々の披露の場」と「ラグビー観戦」と言う企画を開催します。この企画は、静岡市の第2スポーツ基本計画の中に、部活動の発表の場が少ないと言う意見がありました。なので、ラグビーの試合時に部活の披露の場を設けます。そして、披露をしてくれた人々にもラグビーを見てもらいます。この活動をする事で、ラグビーを知らない人にラグビーを知ってもらい、「ラグビー大国静岡」に少しでも近づくことができると考えています。



このふじのくにグローバル人材育成事業で、私は、自分の新たな目標「ラグビー大国静岡を作る」と言う明確な物を得る事ができました。また、自分自身の今後大切にしたいという精神に出会う事ができました。それは、「目の前の事を一生懸命にやる」「決断しろ、プロセスは後」この精神はふじのくにグローバル人材育成事業を経験したからこそ出会えたものだと思います。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり・地域産業コース)		訪問国	英国	
学校名	静岡高校	氏名	西本結希	学年	2年

留学の概要

1. 留学地域 イギリス ロンドン
2. 留学期間 2024/7/20～2024/8/12
3. 留学のテーマ 古家具のアップサイクルの価値と可能性を探る

テーマと留学先の設定理由

家具は日常生活に必要不可欠なものです。家具は様々な国の独自の文化の中で独特な変化をしており、北欧家具やイギリス家具などは代表的な例です。しかしそのような家具も現代では安価で大量生産向きの家具に置き換わってきました。安価に家具を買うことができる時代になった現代、頑丈で芸術的な家具は姿を消しつつあります。私はこの現状がとても悲しかったです。人々の生活は安価なものをたくさん買うだけで豊かになるのでしょうか。考え方に個人差はありますが、私はそのような考え方に反対でした。先人の知恵と技術を詰め込んだ家具はとても大きな価値があると私は信じているからです。そこで、私はそのような家具をもう一度作るのではなく、長く家の奥で眠っているものをアップサイクルすることでもう一度あたらしい命を吹き込もうと考えました。家具を製作するには多くの時間と費用が掛かりますがアップサイクルは元ある家具を生き返らせるため、新規で作成するよりも安価に頑丈で芸術的な家具をもとの形に作り替えることができます。そこで家具や家具のアップサイクルで有名なイギリスに留学をしました。

探究活動の概要

1. アップサイクルを行う工房でのヒヤリング

アップサイクルの価値や重要性、どのようにして人々に浸透しているのか、イギリスの人たちにとってアップサイクルはどのようなものなのかを知るために工房を訪れてインタビューを行いました。

2. 家具に関する街頭調査

アップサイクルがイギリス人にとってどのようなものなのか、アップサイクルをされた家具は店舗や普段の生活に用いられているのか調査を行いました。



探究活動の成果

訪れた工房では、中古の家具を安価で購入し、修理とペイントを施して再販売するというプロセスが行われていました。職人たちは一つ一つの家具が再び長く使えるように手を加えて仕上げていました。このようにして生まれ変わった家具は、再度新しい所有者のもとへと旅立つそうです。イギリスでは、古い家具を修理して再利用することが長い間伝統として根付いてお

り、この文化が今でも大切にされているためアップサイクルが人々に浸透したそうです。

街を歩いている時、ジュエリーショップやアパレルショップで派手にアップサイクルされた家具が展示品として使われているのを見かけました。古い木製のテーブルが鮮やかな色に塗られていたり、ユニークなデザインに改造されて、店舗のインテリアとして活躍したりしている様子が印象的でした。また、カフェの棚などにもアップサイクルされた家具が使われていて、温かみのある雰囲気を醸し出していました。



探究活動のまとめ

家具のアップサイクルは環境にやさしいだけでなく人々の生活を豊かにするという点でとても大きな価値がありました。また、新しい家具産業として成長していける可能性も秘めていました。物を大切にするという考え方が薄れてきている現代の中で物を長く使うことはとても重要なことであり、心を満たすためにとても重要なことだと考えました。

日本では昔から気候などの影響で家具の寿命はそれほど長くなかったです。しかし近年の技術革新によって住空間がより快適になったため、今の日本なら家具を長く使うことも可能です。それによって日本にも家具を長く使う文化が広く浸透すると嬉しいです。



家具のアップサイクルは価値も可能性も秘めているため、アップサイクルの良さを一人でも多くの人に伝えていきたいです。

探究活動と留学を通して

留学では探究活動に加えて様々な活動がありました。エバンジェリスト活動など探究するために留学をするといっても自分ひとりだけでなく様々な人と関わり、様々な活動を行いながら海外での生活を送っていくこととなります。楽しいことがある分つらいこともたくさんありました。留学をするにあたって私が大切だと思ったことは「好きなことをやること」と「周りを頼る」ことだと思います。

私は将来モノづくりにかかわる仕事をしたいと考えており今回はその第一歩として家具について探究をするためにイギリスを訪れました。私自身イギリスの建築や文化に憧れがあったため、つらいこともそれほど目につかず夢の中で暮らしているような気分でした。言語の壁は高く、どうしても解決できないときもありましたが、多くの人の助けを借りてどうにかすることができました。

留学は非日常だからこそストレスを抱えたりする場面が多くあります。しかし、これを乗り越えることで私は成長をすることができました。

これからも好きなことを楽しみながら成長していけるように、楽しみながら日々の生活を送っていききたいです。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり・地域産業コース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	小澤大音	学年	2年

1. はじめに

1 私は「ふじのくに地域探究コース」を利用し、アメリカ・ロサンゼルスに15日間留学しました。

本報告書では、留学の目的、現地での活動内容、調査結果、および今後の展望についてまとめます。

2. 留学の目的

本留学の探究テーマは「IR産業をアメリカで学び、静岡の地域活性化とその実現可能性を探る」です。日本国内では、公営ギャンブルやパチンコ・スロットによる経済効果が大きく、ギャンブル市場規模は世界のカジノを上回るとも言われています。また、2018年にカジノ建設を推進する法律が施行され、2029年には大阪で日本初の統合型リゾート（IR）の開業が予定されています。交通の要所として発展してきた静岡が、大阪に次ぐ第二のIR誘致地域としての可能性を持つかどうかを検証するため、本テーマを設定しました。

3. 現地での活動

3.1 語学学校での調査

語学学校に通いながら、先生やクラスメートを対象にアンケートを実施し、アメリカ在住者のカジノに対する意識を調査しました。また、アンバサダー活動の一環として、日本文化の紹介を目的に、アンケート協力者に扇子などの日本の伝統品を配布しました。



3.2 ラスベガス・ロサンゼルスでの調査

週末や休暇を利用し、ラスベガスを含むさまざまな観光地を訪れ、現地住民や観光客を対象にアンケートを実施しました。対象者を「ラスベガス在住者」「ロサンゼルス在住者」「アメリカ在住の日本人」に分類し、それぞれ異なる質問を設定することで、地域ごとの意識の違いを分析しました。

3.3 調査結果と考察

アンケート結果から、ラスベガスや日本の回答者に比べ、ロサンゼルスの回答者はカジノに対して消極的な意識を持っていることが判明しました。同じアメリカ国内でも都市ごとにカジノに対する考え方が異なる点が興味深く、ラスベガスのタクシードライバーへのヒアリングを通じて、IR産業の実態をより深く理解することができました。



4. 静岡での IR 誘致の可能性

帰国後、調査結果をもとに静岡での IR 誘致の可能性について考察しました。その結果、静岡市内に大規模な IR 施設を建設するのは、騒音問題や土地の制約から現実的に難しいとの結論に至りました。しかし、

- 日本がギャンブル大国であること
- 静岡が大都市間の中間地点にあり、アクセスが良いこと
- 静岡には森林資源が多く、新たな自然融合型リゾートの開発が可能であること

などの要素を踏まえ、今までにない新しい形のリゾート開発の可能性があると考えました。

5. ホストファミリーとの生活

ホストファミリーはアメリカの剣道代表の方でした。事前に剣道について調べることで円滑なコミュニケーションを図り、「不動心」「百戦錬磨」といった文字が入ったハチマキをプレゼントしました。また、チーム USA の剣道練習を見学し、代表選手たちの稽古の迫力を肌で感じる貴重な経験をしました。



6. アンバサダー活動

日本食や日本茶を提供し、日本文化の紹介を行いました。特に好評だったのは、日本から持参した「食べるラー油」で、ホストファミリーに喜ばれました。

7. 文化体験

放課後には、語学学校のクラスメートとともにスクールアクティビティに参加し、

- ドジャースの野球観戦
- カリフォルニア大学ロサンゼルス校 (UCLA) のキャンパス見学などを行いました。特に、アメリカのスポーツ文化の熱気は想像以上で、スタジアムにいた観客の盛り上がりによって圧倒されました。



8. 留学の成果と今後の展望

本留学を通じて、IR 産業の社会的受容度や地域への影響を深く学ぶことができました。また、異文化理解を深める貴重な機会となり、多くの知見を得ることができました。

今後は、今回の経験を活かし、次に留学を目指す人々への支援を行うとともに、自身のキャリア形成に役立てていきたいと考えています。最後に、本留学を支えてくださった家族や関係者の皆様、現地で協力してくださった方々に深く感謝申し上げます。

以上

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり地域産業コース)		訪問国	ドイツ	
学校名	静岡城北高校	氏名	松永 珠実	学年	2

トビタテ留学ジャパンは私にとって、自分の夢を叶えるとともに自分のことを知るきっかけになりました。この制度に応募した理由は、自分の語学力はどれくらいなのか、自分には何ができるのか、など自分を見つめ直したいと考えていたからです。

この事業への応募にあたり、探究活動はもちろん、自分自身と向き合う時間を作りました。1年次から続けてきた探究テーマを「衣服のリサイクル活動」にしたきっかけは母にあります。母の職業は縫製工場でミシンを扱う技術職です。私は小学校のときから、夏休みや、冬休みなど、一日母の仕事が終わるまでその仕事場で勉強していました。そのため、母の仕事や同じ工場で働く大人の話聞く機会があり、ファストファッションに興味を持つようになりました。

留学前は、自分の存在にも自信がないまま学校生活を送っていました。静岡城北高校のグローバル科には、スピーチコンテストで活躍したり、英語のプレゼンテーションが得意だったり、とても魅力的な友達があります。せっかくグローバル科にいるのに何もしないのは嫌だ。でも、私には何ができるのだろうか悩むこともありました。そんなとき母は、「学力を問わない、探究をテーマにする留学制度もあるんだって」とトビタテ留学ジャパンの説明会に誘ってくれました。しかし、その時はまだ私自身が留学している姿を全く想像できませんでした。悩んでいる私を親は励ましてくれました。また、担任の先生や成島先生など、グローバル科を応援してくださってる方々の後押しがあったお陰で、自分の目標や探究活動の目標などを明確にすることができ、留学する夢を叶えることができたと思います。

一言では言い切れませんが、留学は思いも寄らないハプニングの連続でした。トビタテ留学ジャパンの合格通知から私の留学まで準備期間が短かったため、自分に余裕はありませんでした。自分の心の準備もままならず、学校の勉強と、部活、探究活動の計画などと、とにかく私が経験したことがないくらい忙しかったと思います。そのため、十分と言えるほどの準備ができず、時間の流れとともに留学が始まったと感じました。



ドイツでの生活は、平日は午前には語学学校、午後は街の探索と探究活動をしていました。ホストファミリーの家から語学学校までバスとトラムで通いました。トラムとはドイツの街で走る、日本で言う路面電車のようなものです。乗り心地はバスのように快適でしたが、エアコンはなく、朝は冷え込み、日中は暑く汗をかいてしまいました。語学学校の初日は学校で言われたとおりにキヨスクに行き、1month切符を買いに行きました。しかし、言語が通じず、間違った切符を買ってしまいました。ドイツでは、私と同じ世代の人たちは英語を学校で習っているため話せるのですが、親の世代では英語がほとんど通じず、ドイツ語で話します。私もドイツ語は少ししか触れていなかったため、うまく交渉ができませんでした。せっかくドイツ留学に来ているのに喋ることができない、とても悔しいと感じ、ホストファミリーにドイツ語の発音を教えてもらいながら、料理の手伝いや庭の手入れを一緒にさせてもらうなどして、話す機会を増やしました。とても貴重な機会でした。探究活動では当初計画していた企業訪問は断られ、思うように調べられませんでした。そういった焦りがあつたからか5日間熱を出してしまいました。冷静に考えるうちに二度と体験することができないチャンスを逃したくない、意地でも何かしなければと思い、企業訪問の代わりに語学学校周辺の店などを周り、環境に配慮した活動などを行っている店を突撃インタビューしました。

貴重な話を聞くことができたことが嬉しかったですし、何よりも自分でチャンスを掴みに行けたと実感したことがとても嬉しかったです。様々な人と交流する中で感じたのは、語学習得は未熟で相手にうまく伝わらなくても、自分の気持ちを行動で示し続けることが大切だということです。

今まで勉強や部活動に対して、私にはできないという理由で頑張ることを諦めていました。今でも相変わらず勉強や運動は苦手ですし、学校に行きたくないと思ってしまうことがあります。しかしこの留学を通し、人生の目標、夢というのは言葉で示すことも大事ですが、それらを叶えるために今の自分には何ができるのかを考えて、行動することが最も大事だということ学びました。私はもう、思うようにできない自分が嫌いだと、自分を否定したりはしません。(ここに宣言します!)目標に向かって行動し続けます。

結びに、学校の友達、先生の支えもあったからこそ自分の力を引き出すことができたと思います。また、留学をする機会をくださりありがとうございました。重ねて、お母さん、お父さん、いつも応援してくれてありがとうございます。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (ものづくり・地域産業コース)		訪問国	中国	
学校名	磐田農業高等学校	氏名	河村来馳	学年	2年



今回の私の研修先は「秋萍茶宴館」という茶宴です。茶宴とはお茶と料理を提供するレストランのことです。この茶宴はお茶を使った料理が特徴のお店です。私はこの茶宴で日本茶と中国茶の違いを学び、日本茶の消費拡大に活かす方法を探求しに行きました。

茶宴での研修は主に接客の様子を見学することと、中国茶の淹れ方と特徴を学ぶことでした。接客の様子の見学では、スタッフの方がお客さんの前でお茶を淹れているところを見学しました。見学している中でまず感じたのが作法の細かさです。急須や湯呑みの向き、湯呑みの渡し方、お湯の淹れ方にまで細かいルールがあり、お客さんに失礼のないように細心の注意を払っていることが分かりました。

他にも、待ち時間の使い方が工夫されていると感じました。お茶は淹れるのに数分の待ち時間があるため、その時間に茶葉や茶器の特徴の話をしていました。これは、お茶をコミュニケーションの道具として活用しているのだと考え、この活用の仕方は日本茶にも活かせると思いました。



中国茶の特徴と淹れ方については、お店のリーダーの方が先生となって教えてくれました。中国茶は製法によって緑茶・白茶・黄茶・青茶・黒茶・紅茶の6種類に分類され、6大茶と呼ばれており、同じ茶葉でも製法によって性質が全く異なるということを学びました。また、それぞれのお茶の中でもさらに種類が分かれており、それらのお茶でも性質が異なるため、それぞれのお茶の特徴を理解し、そのお茶にあった淹れ方で淹れることが重要だと教えていただきました。

そして、今回は6大茶を1つずつ実際に淹れさせてもらいました。お茶を淹れる中で「蓋碗」という中国特有の茶器に興味を持ちました。蓋碗は蓋のついた湯呑みのようなもので、中に茶葉とお湯を入れるだけで簡単にお茶を出せるものです。扱い方が難しく最初の頃は何度も火傷をしてしまいましたが、帰国直前にはしっかり扱えるようになりました。

茶宴での研修の合間に「茶城」というお茶の市場に行きました。茶場はショッピングモールほどの広さがあり、中には100店舗以上のお茶や茶器を取り扱う店がありました。私はそこでお茶と蓋碗を買いました。このような市場の規模の大きさも消費量の多さに繋がっているのだと考えました。

また、他の茶宴やお茶屋さんにも行きました。もう一つの茶宴ではアイスティーの作り方を教えていただきました。中国でお茶というと温かいものがほとんどですが、若者に評判のいいアイスティーをメニューに入れることで他の茶宴と差別化をしているとのことでした。そして、私が行ったお茶屋さんはチェーン店で、歴史ある茶宴とは違ったお茶の扱い方を見ることができました。日本の喫茶店に近いお店で、歴史のあるお茶屋さんが多い中国では逆に珍しいお店でした。



研修の最終日、茶宴でお茶を使った料理をいただきました。日本でも抹茶スイーツなどお茶を使った料理はありますが、この茶宴ではお茶を使った料理のフルコースがありました。どの料理もお茶の効能を活かした方法で作られており、味も良く、珍しさもありました。



私は今回の研修で学んだことを活かし、お茶とお茶を使った料理を楽しみながら、コミュニケーションができるイベントを開催したいと思いました。茶園ではコミュニケーションを目的に来ているお客さんもいたので、会話は大事にしたイベントが良いと思いました。また、お茶を使った料理というのは、話題性もあり、お茶を普段飲まないような人にも、お茶の魅力を知ってもらえると思ったので、このようなイベントを開催したいと考えました。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	シンガポール	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	小林理子	学年	2年

シンガポールから学ぶ多文化共生への取り組み

問い…なぜシンガポールは多文化共生国家として成功しているか？

この問いに対して私は答えを①お互いを認め合い、自分とは違う考えの人達の事も積極的に受け入れている、②コミュニティーを大切にしている公園やフードコートで見られるコミュニティーが多文化共生において重要な役割を果たしているのではないかと想定した。

探究活動の報告

留学前…①シンガポールシティーギャラリーやシンガポール国立博物館について調べたり、各民族エリアについて日本で情報収集したりする。②静岡県の多文化共生度を調べて抱えている問題や今後の推測を立てる。

留学中…①それぞれの文化エリアでの情報収集、(チャイナタウン、アラブストリート、リトルインド)文化エリアには地域や民族を代表する寺院がありそれらの寺院が各民族の心の拠り所となっていると考える。②シンガポール人に多文化共生国家である自国に誇りを持っているか、インタビューして、アンケートを取る。

留学後…①学校でプレゼンを行い、実際に私達が取べき行動について発表する。②SNSで自分が学んできた事を発信する。③地元焼津市で行われる異文化交流イベントに実行委員として参加して地域に貢献する。



アラブストリート・サルタンモスクでの礼拝



街中でシンガポールの人々へのインタビュー

現地活動後、問に対する答え

人々は本当にコミュニティーを大切にしていた。街では様々なバックグラウンドの人の活気あふれる交流が見られた。また、他人に対して優しい気持ちを持って接する文化という印象も受けた。公共の場でのアナウンスや掲示は英語、中国語、ヒンドゥー語、タガログ語の4ヶ国語でなされていた一方でそれぞれの民族地域ではその地域の言語が優先されていて、ニーズに合わせた細かな配慮が見て取れた。全てで全国民がまとまるように整備されていた。また、8月11日のシンガポール建国記念日に向けて国民全体で国家誕生を祝う雰囲気でも盛り上がっていて団結して準備に取り組んでいた。一体感をとても感じた。インタビュー：自分の国に誇りを持っているか？に対しては100%の人がYesだったのがとても印象的だった。

自分の活動について

計画した事を早く進めていったのでハプニングに遭いながらも概ね達成することができたことは評価したいと思う。最初自分のわからない点を伝える事に難しさを感じたが人と関わる重要性を実感し、そこからは積極的に行動できた。初めてインタビューできた時は大きな達成感があった。自分も語学学校で様々な国の人と交流し、世界に友達ができかけがえのない経験となった。反省点は博物館にアポを取り、インタビュー活動をする予定ができずに終了してしまった事。アポなしでも直接行って話をする必要があったと思う。街中インタビューは人数を重視してしまい、内容をもう少し深くできればその後の分析に役立ったと思いつながりたい。

アンバサダー活動

ルームメイトに日本の創作お菓子を作り意味を伝え、学校の生徒には折り紙を教えた。作っている間に静岡出身だと伝えると海外の人が富士山について聞いてくれて、静岡県と富士山を結び付けている事がわかり嬉しかった。また人に英語で何かを教える経験から、どう伝えたら相手によりわかりやすいかを考える良い勉強となった。

エヴァンジェリスト活動

小川小学校、小川中学校、静岡高校とそれぞれプレゼンした。対象に合わせて内容やスライドを変え、多文化共生についてと留学について思う事を伝えた。

留学について

初めての留学なのでできなかったと感じる事も多いが、目標を立てて達成していくプロセスを学ぶ事ができた。多くの人と関わり積極性も手に入れた。この留学を経て得た経験を焼津市や静岡県に役立てたい。また、多くの外国の友達もできてこれは自分の大きな宝物となった。



参加した コース	マイ探求コース			訪問国	ネパール
学校名	浜松開誠館高等学校	氏名	白井一志	学年	2

1. 留学概要

国▶ネパール 期間▶2週間（2024. 7. 27～8. 12） 活動▶建築ボランティア テーマ▶ネパールの子供も達が安心して勉強できる場を作る 探求▶学校建設を通じ、施設の耐震状況や震災時における人々の行動や備えについて考察する。また世界遺産（ダルバール広場）の復興状況を把握する アンバサダー活動▶学校で生徒にかかるたを体験して貰い日本の伝統的な遊びを伝える

2. 研究テーマ・背景

研究テーマ

建築作業を通じて、一連の学校建設を学ぶ。学校建設を通じ復興支援を学び、施設の耐震状況や震災時における人々の行動や備えについて考察する

研究の背景

2015年にネパール大地震災害があり、日本でも阪神淡路大震災や東日本大震災、直近では能登半島大地震が起き、大きな被害を受けている。このことから私が住んでいる日本の地震についてどのようなイメージを持っているのか、どう考えているのか、ネパール大地震に対する考え等に疑問を抱き、耐震に対する意識調査を行いたいと考えたから

3. 研究の目的

- 1、耐震意識や震災の復興について
- 2、世界遺産への被害状況について
- 3、日本の地震について

4. 活動

被災した現地の学校で2週間建築ボランティアに参加

〈主な内容〉

・セメント作り・トイレの設置・ドアの設置・レンガを積み上げ壁作り・床慣らし・柱づくり・整地・鉄筋コンクリートを作るために針金の骨組みを組む



5. 調査方法

アンケートヒアリング

場所▶建築活動する学校・ホテル 対象▶①現地のスタッフ（5人） ②現地住民（3人）

③各国からのボランティア（4人）フランス人：2人、イタリア・アメリカ各1人 ④日本からのボランティア（7人）時間▶昼、夕方 方法▶①口頭で質問 ②書面に記入 方法▶主な調査内容(1)日本の訪問有無 (2)静岡県への知名度 (3)耐震意識・対策 (4)震災の復興状況 (5)世界遺産の被害について (6)日本の地震の認知度 (7)地震の脅威は何か

6. 調査結果

(1)日本訪問の有無：無 100%

(2)静岡県の知名度：約 17%→静岡県のイメージ：お茶 100%

(3)2015 年大震災後の耐震意識の変化：100%→要因：地域での活動 100%

(4)震災の復興状況：進歩 87%、停滞 13%

(5)・世界遺産の被害状況についての考え：甚大 63%、甚大ではない 37% ・世界遺産への各国の支援：充分 75%、不十分 25%

(6)・日本の地震の認知度：100% ・津波の認知度：100%

(7)地震の一番の脅威：建物倒壊 60%、火災 21%、液状化 18%、ライフライン寸断 21%

7. 考察と今後の活動

1 考察

- ・2015年のネパール大地震後の耐震意識は地域の取り組みにより向上している
- ・世界遺産の被害について、甚大が過半数を超え、各国から支援も充分が過半数を超えたが、実際に被災して約10年がたった現場を視察すると復興はあまり進んでいないことが分かり、現地の人々の認識と現場の状況には違いがあるのが把握できた。

2. 日本の地震について（建築学会参加、伝建地区への視察）

建築学会主催の災害重要拠点病院の最新の免振装置を見学（新半田市民病院）、

課題等を抱えている花沢地区、足助地区、有松地区、関宿地区等を視察



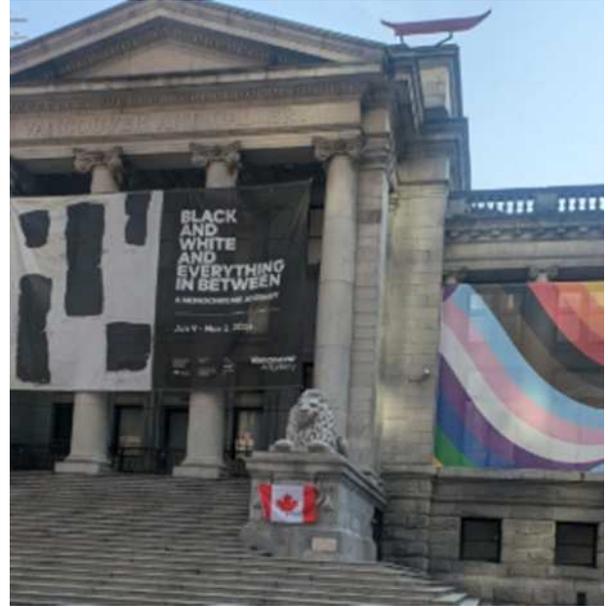
参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	カナダ	
学校名	静岡城北高校	氏名	安田ころろ	学年	3

私は、「LGBTQ+に最もフレンドリーな国、カナダから見る日本がLGBTQ+フレンドリーな国になるために必要な考え方は何か」をテーマにカナダのバンクーバーに3週間、留学しました。この成果報告書では自身の探究を通してわかったこと、気がついたこと、また留学生活を通して印象的だったことを書きます。

まず、私がLGBTQ+をテーマに留学しようと思った理由には自身の過去の経験が大きく関わっています。私は中学一年生のときに自身が性的マイノリティであることに気が付き、友人にカミングアウトしました。しかし、その後アウトティングを受け自身のセクシャリティを理由に中学校三年間いじめを受けました。この経験から私は自分のようにセクシャリティを理由に差別やいじめを受ける人を少しでも減らし、日本をLGBTQ+フレンドリーな国にしたいと思い、LGBTQ+をテーマに探究を始めました。中学一年生から探究をする中で日本でのLGBTQ+に関する情報の少なさを感じ、海外でより探究を深めたいと思い留学を決意しました。

カナダ、バンクーバーにはレインボーフラッグが至る所にありました。バンクーバー国際空港に着いてすぐにカナダ国旗とともにLGBTQ+のフラッグがあり、大きな公共施設にもLGBTQ+フラッグがありました。そのLGBTQ+フラッグはただのレインボーフラッグではなく”Progress Pride フラッグ”というブラックや2スピリットも含まれた最新版のフラッグで、LGBTQ+先進国だなと感じました。フラッグだけでなく公共施設に置かれているモニュメントなどもレインボーで、国としてLGBTQ+フレンドリーに努めている様子が多く見られました。私が最も印象に残っている国としての取り組みは飲食店や雑貨屋さんなど9割のお店にLGBTQ+フラッグのマークといっしょに”NO Space for Hate”という文字があるステッカーが貼ってあったことです。



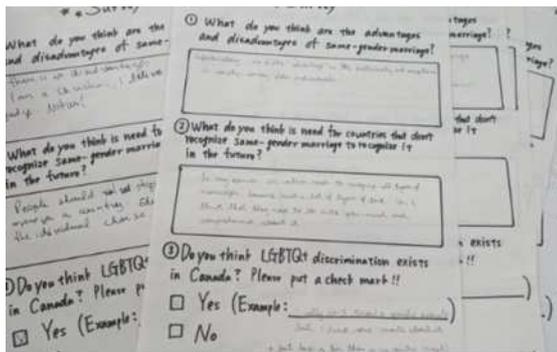


LGBTQ+当事者としてカナダの国としての取り組みを受けて、日本では感じたことのない安心感を感じたし、マイノリティが尊重されている気持ちになりました。

国としての取り組みは以上のように素晴らしいものばかりでした。しかしバンクーバーに住む人の考え方は国の取り組みとは少し違いました。私は探究方法として街頭インタビューと紙媒体でのアンケートを行いました。街頭インタビューでは「(LGBTQ+関連の) 質問には答えたくない」、「興味がない」など消極的な人が多くあまり良い結果は得られませんでした。アンケートではLGBTQ+に対する差別はカナダにもあると思いますかという質問に対し、3割の人が「ある」と回答していました。これらの結果から、私は国の取り組みとそこに住む人の考え方が必ずしもイコールではないということがわかりました。

探究中だけではなく、実生活でもそれを感じた瞬間がありました。語学学校やホームステイ先で私がセクシャルマイノリティであることをカミングアウトしたときに、中には「変だ」、「気持ち悪い」と言う人もいました。

探究と実生活の経験から「差別のない国や地域なんてないんだな」ということを改めて理解しました。



参加した コース	ふじのくに探求地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	カンボジア	
学校名	静岡英和女学院	氏名	森千尋	学年	2

私は2024年8月5日から19日までの15日間にカンボジア王国に滞在して、「弁当ビジネスを通じてSDGsの達成と国際交流は同時にできるだろうか」という問いのもとで、探求活動を行った。

この「ふじのくにグローバル人材育成事業」を通じて、日本の官僚組織の弊害を多く見ることができた。あまりに多くの同じような書類を、普通の学校の活動だけではなくて、部活やテストや塾などで朝から夜まで忙しい高校生が処理することはとても大変で、現実的ではないことを知って欲しいと思う。応募書類の時点で、あまりに膨大な書類を提供された時点で、私たちは応募をやめるべきだったのだろうか。海外に関心を持って、そこへ踏み出したいと思う生徒は多くはないのにもかかわらず、このような書類を求めることで、それを阻害していることをぜひ知って欲しい。もっと簡素化をして、もっと応募者を増やすことを考えて欲しい。

私たちは大人が決めたルールを守ることで成長するのではなくて、そのルールを破壊して、新しい将来を作り上げていくのだ。決して決められたことを、そのまま受け取るだけではない。この人材事業をより良いものにするこも、私たち一期生が未来に向けてできることだと思う。ぜひ書類で私たちを管理しようとすることは止めて欲しい。



私を受け入れてくれた banana leaf の女性起業家も、私の滞在を受け入れて、いろいろな女性零細ビジネスを紹介してくれた女性も、全て知人だから対応してくれた。それを

受け入れることで、お礼はしたものの、それ自体がビジネスではなかった。

banana leaf はいわゆる社会的企業で、社会的弱者であるはずの女性が、女性を雇用して、その女性の自立を支援し、環境負荷を抑えている。このように SDGs に配慮したビジネスを運営しており、カンボジア国内でも賞賛されている。その意味でとてもわかりやすい理念を正しく実行している。日本でも理解されやすいし、同じことを実現することは可能だと思う。経営者のラミーの夫も世界銀行の広報を担当する映像関係のプロフェッショナルで、カンボジアの中流以上の人たちだ。この弁当を買う人たちも貧しい人ではない。

それと比較すると私がホームステイでお世話になった女性ダダは、ポルポト時代で強制権婚をさせられた親が貧しく、教育は兄が支援してくれた人だ。とても家族思いで、親切な人だ。写真は彼女が通った日本の支援でできた学校だ。彼女は大学まで兄の支援で通い、政府に勤務して、その後オーストラリアで多くの友人を作り、ネイルサロンを成功させている。彼女がカンボジアに帰国しているときに私は彼女にお世話になり、彼女の知り合いの女性たちが立ち上げた零細ビジネスをいくつも見学させてもらい、インタビューもさせてくれた。私がお世話になった家にはシングルマザーとその子供2人（女の子と男の子）が住んでいた。不思議な関係だ。

午前中はラミーたちの中流の生活を見て、それ以外の時間はダダと比較的貧しい人たちと一緒に暮らすことができたのはとても興味深いものだった。場所もプノンペンの官庁街と郊外と違うし、観光客や外国人はいないものの英語が比較的通じる人たちと、ほぼクメール語の世界が両方体験できたのは、本当によい経験だった。

ダダは教育の重要性、カンボジアの社会や習慣について、オーストラリアと比較しながら教えてくれた。私も将来多民族国家のオーストラリアにも留学したいと思った。

とても貴重な経験ができたのだが、これは家族の支援が大きかった。こういう恵まれた環境にいる私が「社会」の問題を、本事業を通じて具体的に知り、それを解決していくためのきっかけになったことには感謝したい。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡市立高校	氏名	大石怜采	学年	2年

【テーマ】

日本独自の文化である”kawaii”を広めることで、言葉の壁を超えて人々に癒やしを届ける

【背景】

私は日本の言葉である”kawaii”が海外のかわいいという意味を表す pretty や cute とは少し違ったニュアンスを持っていることに着目し、サブカルチャーと幸福度の視点から探究を進めました。きっかけとなったのは、私が好きなキャラクターであるすみっコぐらしの san-x 株式会社です。会社のホームページに”kawaii”がほかの国の言葉とは違い、癒しを感じるような意味を含んでいるということが書いてあり、とても興味深く思いました。

【課題】

現代はストレス社会と言われるほどストレスが多いということもあり、日本独自の言葉である”kawaii”が国を越えて人々に癒しを与えられるように”kawaii”の可能性を見出したいと考えました。

【検証】

① 留学先選び

留学先をオーストラリアにした理由はオーストラリアの多文化共生に惹かれたからです。私は料理研究家のレイチェル・クーさんの番組でメルボルンのチャイナタウンが紹介されていたのを見ました。最初に見た時、なぜオーストラリアのメルボルンを紹介するのにチャイナタウンなのだろうと感じ、メルボルン独自の食べ物を紹介したほうがメルボルンの魅力を発信できるのではないかと考えました。しかし、中華は中華でもほかの国の料理と組み合わせで作られたという料理や店主の思いなどを見ていく中で多文化共生こそがオーストラリアの魅力なのだと思い始め、そこでオーストラリアの魅力に気が付き、日本の言葉を広めるためには多文化共生を自分の目で見て学びヒントを得ることが大切だと考え、ぜひオーストラリアで自分の探究をしたいと考えました。



② 探究活動内容

サブカルチャーを通して、国民性の違いを捉えられるのではないかと考え、街を探索する中でオーストラリアで人気なサブカルチャーを探しました。また、現地の教会や街頭で約200名の現地の方にインタビューを実施しました。そこでは、日本のキャラクターと現地で人気なものとの違いや、日本のキャラクターにどのようなイメージを持つかなどを聞きました。同時に日本のキャラクターを紹介し、“kawaii”という響きを持つ癒やしを現地の人々にも体験してもらうための普及活動も行いました。



【結果】

街を探索する中でオーストラリアで人気なサブカルチャーを見つけました。例えば、スプレーアートです。現地では、派手なものが好まれる傾向が見受けられました。日本のキャラクターは見ていて落ち着くものが多く、そこに人々がサブカルチャーに求めるもの違いや国民性を感じました。さらに、現地の教会や街頭でのインタビューでは、現地で人気なものとの違いやどんなイメージを持つかなどを聞き、街頭のインタビューなどでは「優しく淡い色合いだと感じた」(gentle, pale) や「リラックスする感じ」(feel like relax) など癒しを感じたというような声が多く、やはり日本の“kawaii”にはどの国の人にとっても癒しを与えるような力があるのではないかと感じられる結果でした。また、街ではすみっこぐらしは見なかったが、日本のキャラクターを見つけることができました。しかし、期待していたよりも“kawaii”という言葉の知名度は低く、“kawaii”という言葉を知っていると回答した人数はインタビューした中で約200名のうち、2人だけでした。街頭インタビューで集めた意見からやはり“kawaii”には人に癒しを与えるような効果があると考えられ、まずはその価値を広めることで“kawaii”という共通言語を持ち、感情を共有できると考えました。



【結論】

今回の探究を通して、文化を反映したサブカルチャーには言語の壁を越えていけるような力があると感じました。そこで、まずは魅力を知ってもらうところから始めたいです。具体的には海外で日本のキャラクターなどをテーマとしたイベントを開催し、トビタテの仲間からもらった意見の中で“kawaii”に関する紹介やキャラクターを集めて外国語でナレーションなどをつけた映像を作製するなど、実際に試してみたいと思っています。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	カナダ	
学校名	静岡県立浜名高等学校	氏名	澤木 美依奈	学年	2

1 留学を希望した動機

小学校6年生の頃、父親の仕事の都合で始まったインドでの多様な人々との関わりが、私にとって初めての国際交流だった。互いの文化の違いを共有し認め合うことの楽しさを実感し始めて間もなく新型コロナウイルス感染症の世界的な流行で緊急帰国となってしまい、思うような学び、経験ができなかったことに大きな悔しさを覚えた。この経験が多文化共生に興味を持つきっかけとなり、高校生になって担任から紹介していただいたトビタテについて調べてみると、自分で計画を立てられる点に強く惹かれ、ここでリベンジを果たしたいと思い留学を決意した。

2 現地での活動

語学学校での英語教育の比較のほか、街頭でインタビューやアンケートを行い、多文化共生について住民の意見を募った。アジアやヨーロッパ系の人々を中心として、約30名の方に大きくわけて「多文化共生の認知度」と「母語とする言語」の2つ質問をした。

1つ目の質問の結果として、日本では今となって多くの人が耳にする多文化共生という言葉だが、現地では想像以上に認知度が低く、言葉は聞いたことがあっても意味は知らないという人を含めれば約9割が知らないということだった。多文化共生という言葉を知らずともこのような社会を当たり前のように形成することが出来ているトロントにさらに興味が湧いた瞬間だった。

2つ目の質問については、約4割の人々がカナダの公用語である英語やフランス語以外を母語としていることがわかった。

その4割の人々はどのようにして周囲に馴染んでいるかということが気になり追加で質問してみた。結果、それぞれのスタイルで言語を習得し、周りに溶け込もうとしているのだということがわかった。



3 留学後の活動

現地での学びや経験をさらに深めるため、浜松市で行われている国際交流のボランティアやイベントに参加した。また、県内のトビタテ生の仲間で「Fuji's teens」という団体を立ち上げ、その団体の副代表として随時行われるミーティングやイベントを企画、実行している。

「Fuji's teens」は、静岡県谁也が幸せに過ごせるような社会づくりへの貢献を目標にしている。

今は三月末に行われるイベントで、世界の茶葉と静岡の茶葉のブレンド体験を行う予定である。

4 今後の活動について

多文化共生という大テーマで現地でも活動をして来て、様々な工夫がされていることを知ってさらにトロントという都市、多文化共生に対する興味が湧いた。また、実際に活動していると道路や玄関前、公共の場のあらゆるところに虹色の旗をみつけた。後日調べるとその旗は有色人種、それからLGBTQ+を色で示している。全ての人に包括的であることを示すこの旗から、私は性の観点にも改めて興味を持ち、今後、多様性社会について考察を深めたいと考えている。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探求コース 多文化共生・多様性コース		訪問国	フィリピン	
学校名	藤枝東高校	氏名	長谷川葵	学年	2年

1. 応募理由

146ヶ国中125位、47都道府県中42位、これらの順位は日本そして静岡のジェンダーギャップ指数を指しています。静岡の順位がこんなにも低迷しているのは致命的です。逆に、静岡は貧困率が47都道府県で1番低いです。それなのにジェンダー平等が進まないのは何故か？静岡の現状を再確認し解決するために、ジェンダー平等が進んでいる地域に実際に行き、自分の目でジェンダー平等に関する様々な取り組みを見てみたいと考えました。静岡のジェンダー平等を進め、更に良い県にするためには、この事業に参加する必要があると感じました。フィリピンはジェンダーギャップ指数がアジアでトップですが、セブ島は深刻な貧困問題に悩まされています。貧困問題を抱えているのにもかかわらず、何故ジェンダー平等が進んでいるのか。ジェンダー平等と貧困の観点で静岡と真逆の環境に実際に行くことで、新たな知見を広げたいと考えました。

2. 研修内容など

8/1	木		出発 セブ到着
8/2	金	終日	オリエンテーション 探究活動：貧困地域の人々の様子を観察アンバサダー活動：風船で遊ぶ、炊き出し活動
8/3	土	終日	探究活動：教会や博物館に行き、セブ島の歴史を学ぶ探求活動：孤児院で子どもたちにインタビューアンバサダー活動：孤児院で子どもたちとダンス（ソーラン節、ラジオ体操）
8/4	日	半日	探究活動：海上スラムでの生活の様子を観察する、インタビューアンバサダー活動：子どもたちと塗り絵やシール
8/5	月	終日	探究活動：セブの海洋調査、ゴミの状況チェック（オスロブ地域）
8/6	火	半日	探究活動：孤児院を訪問し、様子を観察するアンバサダー活動：子どもたちと塗り絵やダンス、折り紙
8/7	水	終日	探究活動：現地貧困の高校生、大学生たちとの意見交換探究活動：高校を訪問し、生徒たちにインタビューアンバサダー活動：「アルプス一万尺」
8/8	木	半日	探究活動：小学校を訪問し、生徒たちにインタビューアンバサダー活動：だるまさんがころんだ
8/9	金	終日	探究活動：現地貧困の高校生、大学生たちとの意見交換探究活動：海上スラムにある家庭を訪問し、インタビューアンバサダー活動：参加者でうどんを作り
8/10	土	半日	探究活動：孤児院で子どもたちと話をするアンバサダー活動：静岡産のお茶の試飲会
8/11	日	半日	探究活動：山村集落にある家庭を訪問し、インタビューアンバサダー活動：子どもたちと風船で交流活動
8/12	月	終日	探究活動：海洋調査、ゴミの状況チェック（マクタン島）
8/13	火	半日	探求活動：海上スラムでのインタビューアンバサダー活動：子供達にパブリカダンス



8/14	水	半 日	探究活動：小学校を訪問し、生徒たちにインタビューをするアンバサダー活動：日本語での挨拶や自己紹介
8/15	木	終 日	戦没者追悼式参加 探究活動：学校を訪問し、生徒たちにインタビューアンバサダー活動：折り紙で鶴の折り方
8/16	金	半 日	探求活動：山村集落を訪問し、話を聞くアンバサダー活動：シャボン玉で遊ぶ、一緒に折り紙
8/17	土	終 日	探究活動：現地貧困の高校生、大学生たちとの意見交換探究活動：墓地スラムを訪問し、インタビューアンバサダー活動：子供達とダンスをする、バスケット
8/18	日	半 日	探究活動：海上スラムを訪問し、インタビューをするアンバサダー活動：塗り絵をする、パラバルーン
8/19	月	終 日	自由行動
8/20	火	終 日	マンゴー工場見学探求活動：ゴミ山スラムを訪問しインタビュー
8/21	水		帰国日



3. 感想

私が現地でさまざまな人と交流して感じたことは、フィリピン人は本当に自分らしく生きているということです。自分らしく生きることが、フィリピンにおいて女性の社会進出につながっていると感じました。しかし、これを別の側面で見ると、フィリピンは男性や女性、そして子どもも含めて家族総出で働かないと十分な収入を得られない、という見方ができます。私がこの留学で1番心に残ったことは、キーホルダーを売って生活している14歳の女の子の1番笑顔になった瞬間が、家族の話をするときでも学校の話をする時でもなく、お金をもらった瞬間であったことです。私はその笑顔を見て、彼女はお小遣いのためでも趣味のためでもなく自分たちの生活を確保するために稼いでいるのだと改めて再認識させられました。また貧困層ではまだまだ男女の教育格差も見られたり、フィリピン自体綺麗な水が水道から出なかったり道路が陥没していたり、貧困以外の課題もたくさん残されていると感じました。また、留学を通して私たちはもっと我儘に生きてもいいと強く感じました。私たち日本人は、様々なことにおいて「こうあるべき」といった固定概念が強いです。しかし、ひとりひとりがもっと自分らしく自由に生きることで、日本の成長につながると考えます。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡県立静岡東高等学校	氏名	岩崎優衣	学年	2

多様性を認め合える心を育てる保育を学ぶため、多民族国家であるオーストラリアの保育園で15日間保育園ボランティアを行った。

留学前、日本の保育園でボランティアを行う中で、乳幼児期は子どもの行動や性格を形成していくのに大きな影響があるということを知り、誰もが安心して暮らせる社会を作るには、人格の形成にとって大事な乳幼児期に子供達が自分とは違う見た目や個性を持った人がいるということを知ることが大切だと考えた。また、そのように他者を認められるようになれば見た目や偏見からくるいじめもなくなるだろうという仮説を立てた。

オーストラリアの保育園では、主に三つの探究学習を行った。一つ目は、行われている遊びや活動、保育園の環境を学んだ。部屋には先住民であるアボリジニの民族楽器や絵本が置いてあり、自由に触ったり遊んだりできるようになっていた。また、ままごとコーナーには肌の色が違う人形が置いてあり、遊びから自分とは違う見た目の人がいるということを確認できるようになっていた。環境面では、子どもたちと同じ空間にヤギや鳥やトカゲなど多くの動物を飼っており、自由に触ることができ命の大切さも学ぶことができる。ブランコは危険を防止する囲いがなく、そこには危険を自ら学ばせるという保育士の意図があった。活動の面では、ハーモニーデーというそれぞれの国の文化を学ぶ日があったり、先住民の文化に触れるネイドックウィークあったりとオーストラリアならではのイベントが行われていた。



二つ目は、日本の保育施設との違いを学んだ。まず、保育士自身がいろいろな国籍の人がいること、室内の装飾やおもちゃが多様性を意識したものが置かれていること、そして誕生日やクリスマスを祝わない家庭があるなどの日常的な文化の違いがあることがわかった。「それぞれ文化が違うため、家庭の方針を尊重している」という保育士の言葉から、異なる文化を持つ人々と関係を築いていくためには、多様な価値観を理解することが大切であると学んだ。

三つ目は、日本とオーストラリアの保育士の考え方の違いを知るため、それぞれに同じ内容でアンケートを実施した。アンケート結果で特に興味深かったのが「子どもたちに特に身につけ

て欲しいこと（非認知能力）」という項目である。自己肯定感、自立心、主体性、好奇心、想像力、挑戦意欲、協調性、共感性、思いやり、社交性、道徳性のなかで、特に身につけて欲しいと思う上位3つを選んでもらった。オーストラリアの保育士は、1位が主体性、2位が共感性、3位が思いやりという結果になり、日本は自己肯定感、主体性、思いやりという順番になった。オーストラリアは、「The Early Years Learning Framework (EYLF)」という保育方針のもと、主体性や自分で考えて行動できる力を育てることを重視していた。一方、日本でも主体性を育むことを大切にしているが、日本人は自己肯定感が低い人が多いため、まずは主体性を育む土台となる自己肯定感を育てることを重視しているということがわかった。また、「多文化教育の必要性を感じるか」という質問では、オーストラリアの保育士は全員が「感じる」と回答し、日本の保育士は9割が「感じる」と回答した。しかし、「子供達が多文化に触れられるような環境を取り入れているか」という質問では、「取り入れている」と回答したオーストラリアの保育士が9割に対し、日本の保育士は1割ほどが「取り入れている」と回答した。



これらの結果を踏まえ、日本の保育士に留学での探究学習の成果を報告したところ、「主体性の支援を行う中で多文化を知ることができるような遊びを取り入れていきたい」との意見もあったため、近い将来、子どもたちが世界の人々を自然と受け入れられるような異文化を感じる乳幼児施設に変わっていくことが期待できる。このような変化は国際的な背景を持つ子どもが増えている静岡でもとても重要になるだろう。

留学でのこれらの探究学習をとおして、多様性を認め合える心は、ただ多国籍の環境にいただけでは育たず、保育士が多様性を意識した遊びや活動を意図的に作っていることで子どもたちは自然と理解し、共感力や協調性を育てているのだということがわかった。

多様性を認め合える心を育てる取組は、容姿や障害に対して偏見を持たない心をつくり、誰もが安心して幸せに暮らすことができるウェルビーイングな社会につながっていくだろう。このような社会を創造することができるよう、学び続けていきたい。将来は、大学に進学し、この経験をスタート地点とし、更なる探究学習を続け、多様性を認め合える社会づくりに貢献していきたい。



ルッキズムをぶっ壊す

探究活動の問い

イギリスの多様な価値観に触れ、自由な個性やスタイルを発信し、ルッキズムに悩む人の助けになる



そもそもルッキズムとは？

一言で言うと外見至上主義のこと。

例

友達と写真を撮る時に隣の子と見た目を比べて落ち込んだり、
細ければ細いほど可愛いと思いダイエットで自分を追い込んだり、
メイクしないと外に出れなかったり、

「ルッキズム」を日本語に訳すと？

ルッキズム (lookism) とは

この言葉は、1970年代にアメリカのメディアによって作られた造語で、外見・容姿を意味する「look」と、主義をあらわす「ism」を組み合わせてできたものです。日本では「外見至上主義」と訳されることが多く、最近になってよく使われるようになりました。 2024/07/26

世界と比べても日本はぶっちぎりで容姿に自信ない人が多い、

世界14か国で「容姿に自信がない」と答えた10代女性*



ルッキズムに悩む要因として、友達との会話やsnsが挙げられる。snsが普及しているこの世の中、良い意味でも悪い意味でも外見に気を使う人が増えたと思う。

でもsnsの普及率は先進国と比べさほど差が無いのに対してルッキズムに悩む割合がここまで違うのは何故だろうと疑問を持っていた。

現地にいた人達の声

イギリスと日本を比較して、明らかにイギリスの方がルッキズムに悩む割合が少なかった。私が留学していた場所は世界三大都市と呼ばれるような都市だったので、人種、国籍、性別、年齢関係なしにさまざまな思考を持っている人が多く、皆んな自身に自信があり人と比べたりせず自分を突き通して生きていた。日本人は見た目に自信がない人が多いことを話すと、『どうして?!自分が一番素敵なんだからそんなこと思わないで!日本人の皆んな、素敵だよ』と言ってくれた。



探究活動の結果

数ヶ月でルッキズムに対しての非肯定的思考はそう簡単に無くならないと、自分が経験して感じた。私自身、ルッキズムに悩む一人として留学時は気持ちが楽だったが、帰国して元の環境に戻ることでルッキズムに悩む時間が戻ってしまった。だが、多様な価値観に触れる、自由な個性やスタイルを発信したことで、元々自分に自信がなかった人から、「心が楽になったよ」「好きに生きていこうと思った」「留学に興味あったから色々な話が聞けて嬉しい」との声が聞けた。完全にルッキズムをぶっ壊すとまではいかなかったが、少しでもポジティブ思考な声が増えて良かった。



sns活動の結果1

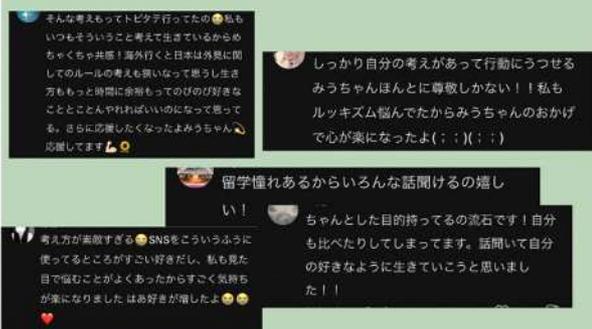
留学前⇨留学後



留学から五ヶ月後



結果2



最後に

どんな場面でも自信が必要だと思う。堂々と生きている人、自分をもっている人が一番魅力的なことをこのトピタテ留学で学んだ。常に笑顔でいる人には人が集まるし、幸せのハードルを下げ幸せそうに生きることで現実に繋がる。実際、人種、性別何もかも全然違っても自分のスキを貫いていきている人が一番魅力的だった。これが楽しく人生を生きる秘訣であり、周りとも素敵な関係を築けることに繋がると思う。そして留学は自分の価値観が良い方向へ変わるチャンスだと思う。世界の見方、自分の見せ方、たった一ヶ月の留学でも変わったことが沢山あった。もっと自分らしく自我を持って生きべきことを学んだ。そう簡単にルッキズム問題は解消されないが、今後も同様、自分が一番かワイイこと、周りとは比べずに自分が好きなスタイルを堂々と貫いて欲しいことをみんなに伝え続けたい。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	フィジー ナンディー	
学校名	静岡英和女学院高等学校	氏名	秋野ちひろ	学年	2年C組

私は、2024年7月30日から8月27日までフィジーのナンディーというところに約4週間留学してきました。

そこで学んだことは、トビタテの探究活動の結果だけではなく、留学を共にしたメンバーとの友情など人としても成長できた4週間だったと思います。このトビタテに勇気を出して受けてよかったと心から思いました。



この二つの写真は、私がインタビューをしたフィジーの人がカフェを営んでいる人とバイトの人だったので「私の店に良かったらパンケーキを食べに来てほしい！」と言われて訪問させていただきました。日本と違ってびっくりしたことは、友達がサンドイッチを頼もうとしたときに「今日サンドウィッチないから別の物にして」と言われたことでした。日本の飲食店のメニューは、頼めるものしか記入されていないと思いますがその時に私は「留学生がいうカルチャーショックとはこのようなことをいうのかな？」と思いました。



この3つの写真は、私が留学していた時にできた家族みたいな関係の友人です。この冬この中のうちの4人と遊びました。来年度高校3年生になるので、「受験終わったら遊ぼうね」とみんなで約束しました。とても楽しみです。

留学中私にとっての事件が起こりました。留学して二週間たった時。携帯電話が盗まれてしまいました。そんな時に留学の友達20人位が警察署に心配して駆けつけてくれました。その友達は3グループほどに分かれて、1つ目のグループは、私と一緒に警察署に残ってくれる人達 2つ目のグループは「DEGISEL」というフィジーのSIM会社に行ってSIMを止めに行ってくれた人達 3つ目のグループは、犯人を見つけに行く！と言って探しに行った人たちです。他人の事を自分の事のように考える事が出来る友人に会えたことが何よりもうれしかったです。



私の留学探究テーマフィジーのコミュニティ文化はどのように作られ、今に至るまで保たれているのか？人と人とのつながりから得られる真の豊かさとは？という問いについてです。インタビューやボランティア活動などを通してこの問いについての明確な答えはない。しかし、この約4週間の留学を通しての答えは、今の日本よりもSNSがフィジーでは発達していない。そのためSNSよりも近くにいる人を大切にしようという事を意識しているというよりは無意識のうちに行っている。地域の人＝家族と思う事が当たり前。自分にとって気の置けない人をたくさん自分のそばにおいておくことによって心に余裕が生まれ、余裕が生まれることによって心が豊かになっていくということがアンケート結果やボランティア活動などによって分かった。

最後に、私は高校2年生の時にトビタテを通じて留学できたことがとてもよかったです。トビタテコミュニティを通して全国にたくさん友達がいると思うととても心強いです。普通の高校生活を送っていたら、全国に友達ができることはそうそうないことだと思います。

この経験をさらに良いものにできるようにしていきたいと思います。

ありがとうございました。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	フィンランド	
学校名	静岡県立静岡東高等学校	氏名	小泉 芽生	学年	3

私は本事業にて、3年生の夏休みの期間を使って、フィンランドのオウルに留学しました。この留学の目的は、「すべての子どもが自分らしく生きられる保育とは何か？」を探究することでした。私は将来、「静岡県でインクルーシブな保育園を作る」という夢を持っています。その実現のために、フィンランドの幼児教育、特に障がいのある子どもやLGBTQ+の子どもたちへのサポートについて学ぶことが必要だと考えました。また、この



留学を決意した背景には、「変わりたい」という強い思いがありました。高校生活の2年間、私は勉強や部活動に追われる日々の中で、将来について漠然と考えるばかりで、具体的な行動を起こせずにいました。そんな自分を変えたいという思いを胸に、「Change→自分が変わり、世界を変える→Challenge!」というタイトルを掲げ、フィンランドへと飛び立ちました。

1 フィンランドで学んだこと

フィンランドに降り立った私が一番に感じたことは、自然の豊かさでした。空気が澄み渡り、どこまでも続く森と湖が広がる風景は、まるでムーミンの世界に入り込んだようでした。静岡にも豊かな自然がありますが、フィンランドの森はさらに広大で、静けさと穏やかさが漂っていました。このような豊かな環境が、人々にゆとりや落ち着きをもたらし、それが教育にも反映されているのではないかと感じました。



現地の幼稚園や小学校を訪問し、実際の授業や保育の様子を見学しました。フィンランドの教育は、日本と大きく異なります。まず、子ども一人ひとりが尊重されていることを強く感じました。障がいの有無にかかわらず、すべての子どもが同じ空間で学び、遊び、支え合っています。先生たちは「できないこと」に目を向けるのではなく、「その子にとっての最善の学び方」を一緒に考えていました。障がいのある子どもに対しても「特別な支援」ではなく、「共に学ぶための工夫」が自然に施されていました。例えば、視覚的なサポートが必要な子どもには、イラ

ストや写真を使った教材が用意され、言葉だけの説明に頼らない工夫がされていました。フィンランドでは、子どもたちは幼いうちから「違いを受け入れること」を自然に学びます。「誰かと違うことは当たり前であり、大切な個性である」という考えが根付いているため、互いの違いを尊重し、支え合う姿が日常の中にありました。日本では、特別支援教育が進んでいる一方で、障がいのある子どもとそうでない子どもが分けられることも多く、学びの場を共有する機会が限られていると感じます。フィンランドでの経験を通じて、私は「すべての子どもがともに学び、互いの違いを尊重しながら成長できる環境を作ること」の重要性を改めて実感しました。



2 留学を通して得た成長

この留学を通じて、私は「自分を信じることの大切さ」を学びました。フィンランドの子どもたちは、自分の意見をしっかり持ち、それを自由に発言します。先生たちもその意見を尊重し、真剣に耳を傾けます。その姿を見て、私は「もっと自信を持って、自分の考えを伝えなければならない」と気づきました。また、私は「一歩踏み出す勇氣」を持つことの大切さを実感しました。言葉の壁があり、最初は自分の意見を伝えるのが怖かったです。しかし、勇氣を出して話しかけてみると、相手も温かく応じてくれました。自分から行動することで新しい学びや出会いが広がることを強く実感しました。



3 今後の目標

この留学を通じて、私は多くの新しい出会いと貴重な経験を得ました。同世代の仲間とつながるコミュニティに SNS を通じて参加し、また、校内だけでなく県内外で自身の経験を発表する機会にも恵まれました。これらの経験は、私の未来への大きな財産となっています。私の目標は、「すべての子どもが自分らしく生きられる保育園をつくること」です。その実現に向けて、留学で得た学びを新たなターニングポイントとし、大学進学後も探究的な学びを深めながら具体的な方法を模索していきます。そして、障がいのある子どもや LGBTQ+ の子どもたちが安心して過ごせる環境づくりにも積極的に取り組んでいきます。静岡県に新しい風を吹かせるために、私はこれからも挑戦を続けていきます。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	シンガポール	
学校名	静岡県立富士宮東高等学校	氏名	増田惺奈	学年	2

日本とシンガポールの介護の違いを知るというテーマでシンガポールへ3週間留学しました。私は普段学校では福祉科に所属し学んでいます。日本では老老介護や認認介護が問題になっていて高齢化が進む日本では深刻な問題だと感じています。シンガポールも日本ほどではありませんが高齢化が急速に進んでいます。その中でシンガポールでは家族が介護を行う家族介護が多くなっています。しかし、日本では負担が大きくあまり浸透していません。なぜ負担の大きい家族介護が行われ、浸透しているのか知りたく思い探究しました。



探究ではシンガポールの大学で介護について勉強を行っているペンさんにシンガポールでの介護の仕組みや方法についてインタビューしました。その中でシンガポールでは家族だけでなく外国人労働者が雇われ活躍していると知りました。もし、日本がシンガポールと同様に外国人労働者を受け入れれば、問題となっている人手不足の解消に繋がるのかもしれませんが、しかし、外国人労働者を受け入れる体制が不十分であることや、外国人労働者に介護してもらおうという抵抗感などから、外国人労働者に介護をしてもらうことが当たり前になるのはまだまだ先だと感じました。また、シンガポールと比較して、日本の介護で改善したいことは介護に対する意識改革です。そこで、介護に対して感じていることや偏見について調査しました。大変そう、「汚い」、「肉体労働」、「精神的に辛い」などのマイナス意見が多くありました。私と同じように福祉科で勉強している友達20人に実際に介護をやってみたいと思える瞬間があったか聞くと全員が楽しいと答えてくれました。静岡県では介護の新3Kとして「感謝」、「心がつながる」、「感動できる」を掲げています。このように介護に対する意識が少しでもプラスなものになれば介護の担い手になる人が増えると考えています。

同じく介護を学ぶ友達に聞きました！

Q. 介護をやってみて楽しい？

20人中 20人 YES!

ありがとうと言ってもらえた！
名前を覚えてもらえた！
笑顔が見れた！



留学中にシンガポールの街にある福祉設備を見つけようと考えていました。私が見つけた設備は認知症の方に優しい看板です。赤や青、緑の色は認知症の方でも混乱しない色と言われているため道に迷うことがなくなることを目的に設置されています。街の人が多く集まる道などに案内表示として設置されていました。実際多くの人の役に立っているそうです。



また、今回の探究では、シンガポールの介護施設を訪ねて日本と施設のサービスが異なるのか実際に見学する予定でした。しかし、急遽断られてしまい見学することができませんでした。見学できず残念でしたが、他の探究や語学学校での勉強を頑張ろうと気持ちを切り替えました。シンガポールの施設には、日本では費用の面から普及があまり進んでいない介護ロボットを多く運用していると聞いたので、機会があれば是非見てみたいです。

今回留学に応募する際には、楽しそう、留学ってカッコいいなと思い応募しました。しかし、私は英語を話すことに自信がなく、留学が近づくにつれて英語を話すことが不安で行きたくないと思うことが増えて



しまいました。その気持ちが回復することがないまま留学がスタートし、ホームシックになり、帰りたと思う日が続きました。しかし語学



学校で出会った友達と会話できたり、授業内で発表して先生にGOODをもらったりして抵抗なく英語を話せるようになりました。電車内で出会った人と話したり、お店の店員さんと会話したりして英語で話す楽しさに気づくことができました。簡単な英語でも伝わること、文法や発音を気にせず話せることを知り、私の自信に繋がりました。

今回の留学では自分自身を見つめ直すことができました。英語で話すことは苦手でも挨拶ならできるだろうと考えていても緊張してしまい言えなかったり、街頭調査で多くの人に声をかけようと思っていたのに一歩引いてしまったりと失敗も多くありました。しかしその失敗も経験と捉えこれからの生活や将来で人との関わり方で活かしていきたいです。

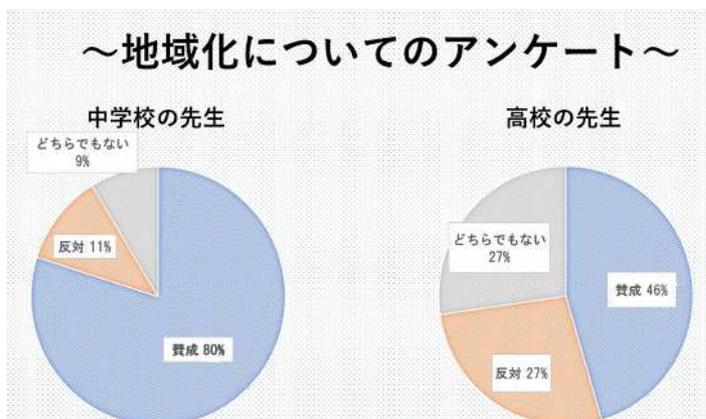


参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生コース・多様性コース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	袋井高校	氏名	稲山瑠衣菜	学年	2

私は、オーストラリアのパスに4週間バスケ留学をしてきました。

きっかけは3つあります。1つ目は英会話教室です。通い始めた頃は英語が好きでも留学に興味はありませんでした。しかし、姉が留学したことや、たくさんの生徒さんの留学経験談を聞いたことで私も留学をしてみたいと思うようになりました。2つ目は中学校の部活動での経験です。中学校のとき同じバスケ部にブラジル人の子が入部してきました。一緒にプレーをしていく中で外国と日本の文化の違いを感じ、実際に留学して学びたいと思いました。3つ目は、県内ニュースで中学校の部活動が地域化になるということを知ったことです。地域化にしてしまうと自分で調べたり、応募したりしなければならないため、外国人がスポーツと関わりづらくなってしまうのではないかと思いました。

そこで、まず、中学校の先生と高校の先生に部活動の地域化に対する意見を聞きました。中学校の先生は賛成が8割に対して高校の先生は約5割でした。中学校の先生は教員の働き方改革が優先、専門の人に指導してもらった方が良いという賛成意見が多く、高校の先生は、地域化にしてしまうと指導者不足になってしまう可能性があるなどの反対意見がありました。



現地では週5回、練習と試合に参加しました。4箇所のクラブチームに参加したのですが、



多国籍の子が多く参加していて、なかなか体験することのできない環境でプレーをすることができて楽しかったです。さらに、普段であれば同年代の男子と本気で試合をすることはないのでとても良い経験になりました。パスの人はとても優しい人が多いことを直接感じることができました。例えば、練習内容がわからず周りをずっと見ていたらゆっくり話してくれたり、コーチが実際にプレーをして見せてくれたりしました。このことか

ら、地域化の課題も見えてきました。外国人が参加しやすくなる半面、多文化社会を理解ができる人、できれば英語を話せる人でないとなかなか指導をする上で難しいと感じました。静岡県は在留外国人数が全国で8位ですが、今後はさらに日本に来る外国人数は増加すると思います。そのため、日本人が外国人に対してもっと興味を持ったり、コミュニケーションが取れるように英語を話したりすることが求められるのではないかと思います。

私がこの留学で驚いたことは、同じ語学学校の同じクラスにトビタテ生が2人もいたことで

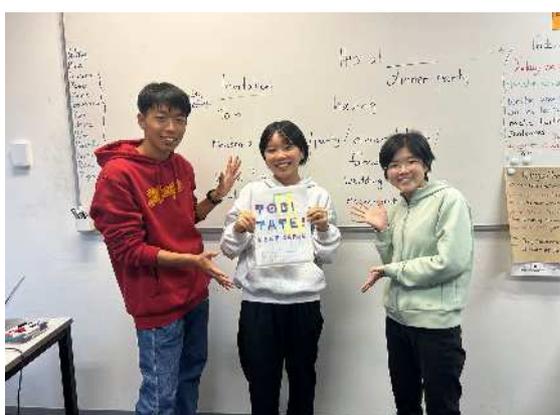


す。事前研修は3人とも違う日ので初めは知らなかったのですが、インスタグラムを交換した際にトビタテ生であることを知り、仲良くなることができました。世界は意外と狭いと感じました。

留学に行く前は、消極的な性格で、自分で考えて行動することができませんでした。初回の練習の時、緊張と初めての環境とでなかなか前に出ることができず、エージェントさんの後ろにくっついていました。「待っていても誰も来てくれないよ。るいなならできるよ」という彼の一言で変わることができました。その通り自分からいかないといけないという状況だと理解して「私ならできる」と強い気持ちを持ち、「Hello!」と自分から声をかけたら周囲から話しかけてくれるようになったし、最後の練習のときに「Can we exchange Instagrams?」と話しかけると嬉しそうに「Sure!!」と答えてくれました。その時、声をかけてよかったと心の底から思いました。



私はこの留学を通して、初めは中学校の地域化に反対でしたが、考えが変わりました。例えば、オーストラリアのように、選抜制の学校の課外活動と外国人も含め誰でも入れる地域のクラブスポーツの選択肢があれば、本気で頑張りたい人も友達と楽しみながらやりたい人もスポーツに関わることができるのではないかと思います。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)			訪問国	オーストラリア
学校名	静岡雙葉高等学校	氏名	山崎さら	学年	1年

〈留学中の生活、思い出〉



平日は、ホストシスターと一緒にスクールバスで現地校に通いました。現地校は30以上の国や地域から生徒が集まる小中高一貫校で、休み時間になると通っていたESL以外の本科生と関わることができました。探求活動としては、ESLの授業参加と日本語クラスの見学&ボランティア、先生へのインタビューを行いました。私が特に印象的だったのは日本語クラスの見学です。私は、選択科目で日本語を選択する高2生と高3生のクラスに6回参加しました。日本語を学びながら日本文化に触れる授業が展開されていて、ひらがなの復習と日本文化のかるたを掛け合わせていた点や日本文化が単元テーマに多く取り上げられていた点が印象的でした。また、多文化を知ったり、触れたりすることができるような環境や機会作りについてインタビューをした際の「多様な文化の中で自然とお互いを知っていく。知ろうとする気持ちが大事だよ」という先生のお言葉が心に残っています。

休み時間には小学生から高校生までさまざまな学年や国の人と関わりを持つことができました。具体的には香港や中国出身の子と互いの言語を教え合ったり、友人のギター演奏を聴かせてもらったり、ランチを一緒に食べたりしました。小学生のカルチャークラブの子に静岡のことを紹介させていただいたり、ESLで安倍川餅を作ったり、アンバサダー活動も思い出の一つです！

休日はホストシスターのネットボールの試合の応援に行ったり、日本文化の体験イベントに行ったりしました。ブリスベンの農業祭、エッカをホストファミリーと楽しみ、家族と過ごす時間を大切にしました3週間でした。

〈留学を通して得たこと〉

私がトビタテで留学したことで得たことは3つあります。1つ目はさまざまな人と交流し、繋がりを築けたことです。オーストラリアで過ごす中で、「多文化が自然に共生する」ことを体験でき、なお、会話を通して人と人との繋がりを広げることができたと思います。2つ目は、諦めずにチャレンジする力を培ったことです。今までは、自分の伝えたいことを途中で諦めてしまうことがありましたが、分からないことを自分の英語で質問したり、話したりすることができるようになったと思います。3つ目は、日本や地元、静岡をより好きになることができたことです。アンバサダー活動は私の留学でも思い出に残っていることの1つですが、特に、最終日に友人がくれた手紙に「私が日本に来た時に静岡を紹介してほしい」と書かれていたことは印象的でとても嬉しかったです。訪れたオーストラリアを好きになったことはもちろん、地元を紹介する中で、より静岡愛が育まれたと思います。留学を通して、自分の興味や挑戦を広げることができたと感じています。ふじのくにグローバル人材育成事業1期生として留学したことは私自身に大きな自信と探究心を持つことの楽しさを教えてくれました。充実した経験をさせていただいたことを忘れず、これからも挑戦し続けたいと思います。ありがとうございました。



▲ホストシスターのお誕生日を彼女のお友達とお祝いしました。同い年の子と英語でコミュニケーションをとることは難しくもとても楽しかったです！



▲留学中の相棒だったノート。探究活動のことはもちろん、日常生活で感じたことを英語と絵を交えながら3週間毎日記録していました。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

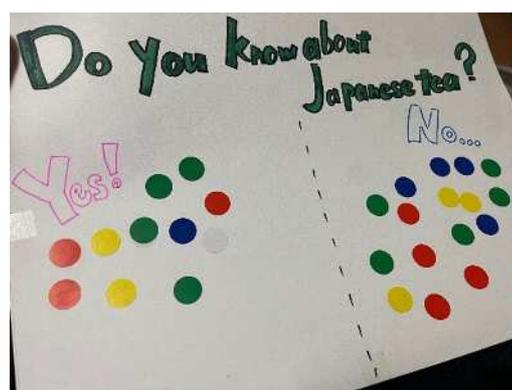
参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)			訪問国	カナダ
学校名	静岡県立藤枝東高等学校	氏名	木村優奈	学年	2年

・応募理由

私はお茶の文化や魅力を発信したいです。私は色々な楽しみ方のあるお茶が大好きです。そこで世界中の方にお茶の魅力を発信するとともにお茶を活用した観光業を活発にし、地元である牧之原市を盛り上げたいです。そしてこの「トビタテ！留学 JAPAN・ふじのくにグローバル人材育成事業」なら、自分の考えた計画通りに行うことができるからです。

・日程

7月15日	留学開始
15～20日	午前：言語学校～17時頃まで 放課後：街中アンケート
20日	ホストファミリーやルームメイトとドライブ 夜：花火大会に参加
21日	「SCIENCE WORLD」でアンケート活動
22～26日	午前：言語学校～17時頃まで 放課後：街中アンケート、お茶試飲体験
27日	午前：「whiskmatchayvr」さんへのインタビュー 午後：街中アンケート
28日	スーパーマーケットにお茶がどれだけ置かれているのか調査
29～30日	午前：言語学校～17時頃まで 放課後：街中アンケート、日本のお菓子配り
31日	在バンクーバー日本国総領事館へインタビュー
8月1日	午前：言語学校～17時頃まで 放課後：ホストファミリーとお別れ会(ホストファミリーが旅行に行くため)



2日	午前：言語学校 夜：ルームメイトとお別れ会
3日	卒業式



留学とは

日本に帰国してしばらく経った今、私が考える留学とは、自分をより深く理解し、成長するための貴重な経験だと思う。異文化に触れることによって、自分の価値観や強み、そして弱みを再確認し、自己成長のきっかけを得ることができる。また、困難に直面することで自信を深め、日常生活における新たな挑戦に立ち向かう力も身に付く。留学中、私は改めて日本の素晴らしさを実感し、海外で日本文化を伝えることの大切さを感じた。さらに、留学先で出会った多様な背景を持つ人々と交流する中で、視野が広がり、世界をより深く理解することができた。このように、留学は新しい自分に出会い、さまざまな挑戦に立ち向かうことで、成長し続ける力を養う絶好の機会だと感じている。



感想

私は留学を体験して自分自身を大きく成長させることができるようになったと思いました。さまざまな困難に出会うことで臨機応変に行動出来るようになったと思います。これから先何か問題が起きても冷静に判断し、何か行動を起こしていきたいです。

参加した コース	富士の国地域探究コース（農林水産業みらいプロジェクトコース）		訪問国	カナダ	
学校名	藤枝明誠高校	氏名	多々良大和	学年	高2

目的・応募理由

私の夢は茶の魅力を世界にもっと広めることです。両親が静岡でお茶屋を営んでいるため幼い頃からとてもお茶に慣れ親しんできました。そのため私はお茶が大好きです。しかし最近では急須で飲むという文化が廃れてきていて日本茶の消費量が減少傾向にあるという状態です。私はこの状況を知った時自分がこの状況を打破しなければいけないと強く感じました。そしてもっと多くの人に静岡茶を知ってもらうには国内だけでなく世界へと市場を広げることが必要だと感じました。そのためわたしは実際に海外に行ってどのような種類のお茶や飲み物が好かれているのかを研究し静岡茶の海外での可能性を探りたいと思いこ所留学を決意しました。

探求内容等

私は今回の留学ではとにかく様々な現地のお茶屋さんを巡ることで好まれる味や香り見た目などを探求しました。お茶屋さんでは店員さんとそれらのことについて話し合い多くのことを意見交換できました。そのなかで多くのお茶屋さんで人気だったのがコンブチャという発酵飲料です。コンブチャは茶葉と砂糖を発酵させる甘みのある発酵飲料なのですが店員さんの話によると発酵飲料ということで体にもよくかつ甘くて飲みやすいという理由で好まれているということがわかりました。そのため私は本来の静岡茶と外れてしまいますが広めるという点から考えればこのような形のものを作るというのもひとつアイデアとしてあるのではないかなと考えました。またそれぞれのお茶屋さんで共通していたものとしてフルーツなどが入っていて香りが強かったということです。そのため静岡茶にも日本ならではの桜やみかんなどを入れてフレーティーにするのもありだなと考えました。



そして私は静岡茶の果たす海外での役割についても考えました。正直私が行ったカナダのバンクーバーの中でも治安が悪いところがありました。しかしお茶屋さんに入ると本当に心が落ち着き安心することができました。少し殺伐としたような街の中や時間に追われて息を付く間もないときにホッと安心できる空間を提供できる、それがお茶の魅力だと感じ、静岡茶の果たす役割だと感じました。その点から考えると日本に比べてあまり治安が良いところばかりではない海外でこそ静岡茶の真価が発揮されると考えました。

留学を終えて

留学を終えて3ヶ月後ほどに海外で知り合ったお茶屋さんの方が静岡に来る機会があったので両親のお茶やに来てもらって静岡茶を紹介したり母親が放棄茶園の茶葉を使った茶染めを行っているのを体験してもらったりしました。また海外で人気のお茶など様々な有意義な情報交換をすることができました。

留学の体験、そしてこのような経験から私はまず自分が得て、感じてわかったことを自分なりにまとめて家業でお茶屋を営んでいる両親にフィードバックしました。また海外での静岡茶の販売の仕方を深く考えて将来は海外で静岡茶を販売するお茶屋をしたいと考えています。そのためには大学で商学を学ぶとともに静岡茶を含めた世界のお茶の歴史について深く学び多くの知識をつけていきたいです。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (農林水産業みらいプロジェクトコース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	浜松西	氏名	川島 和	学年	2年

〈留学テーマ〉

石垣いちごにスマート農業は導入できるのか？

〈テーマ設定の理由〉

私の祖父母が静岡県久能地区で石垣いちごを栽培しており、私も小さいころからよく食べている。そんな石垣いちごが近年高齢化や後継者不足により栽培する農家が減ってきていると聞いて何とかしたいと思った。そこで、近年話題の「スマート農業」についてインターネットで調べてみたところ、高齢化が進んでいる所で活用されている例が多く、石垣いちご農家にも取り入れられるのではないかと考え、このテーマにした。

※留学前に行った「石垣いちご農家さんへのインタビュー」で、石垣いちごにスマート農業を導入することは難しいと考え、視点を変えて、石垣いちごの特徴である家族経営について詳しく探究した。

〈留学中に行ったこと〉

平日：バター工場での労働



土日：マーケットでの販売



〈留学中に感じたこと〉

1つ目は、社員の仕事に対するモチベーションが高い

→自分の好きな音楽を聴きながら作業することができたり、自分の好きなタイミングで小休憩 (Break Time) をはさんだりすることもできてとてもものびのびとした環境であった

社員同士でのコミュニケーションが取れていたこと

→生産するところと加工するところでの伝達ミスも少なく、スムーズに作業することができたまた、人手の足りなそうなところを積極的に手伝ったりできる柔軟性があるところも魅力に感じた

<アンバサダー活動>

- ・日本のバターを食べてもらう
- ・日本のお菓子や文房具をホストファミリーにプレゼントする

→特に喜ばれたのは、発音が面白いからという理由で「ねるねるねるね」というお菓子と、インクが濃くて書きやすいという理由でボールペンが人気だった

<エヴァンジェリスト活動>

- ・留学前にインタビューを行った石垣いちご
農家の方に留学で学んできたことを報告
- ・学校で報告会と、興味がある生徒に向けての説明会
を開催



→新高校1・2年生を対象に先生に頼んで、説明会を実施させてもらった。また、これまでお世話になった先生方も見に来てくださり、感謝の気持ちも伝えることができた

<今回の留学を通して>

私は、今回の留学では何事にもチャレンジすることを目標にしていました。しかし、一人で海外に行くことが初めてだったため、最初の頃はとても緊張しました。また、失敗してしまうことが怖く、つい嫌なことから目を背けてしまう性格が邪魔して、初めは自分から話したり、何かをやってみたりしようよという気持ちにはなれませんでした。そんな中、留学先で唯一の日本人の女性と、自分が留学に来た経緯やどんな思いできているのかを話すうちに、失敗を恐れてやらないことよりも、せっかく海外に来ているのだから、やりたいこと、学びたいことを全部吸収して帰りたいと思うようになりました。そこから、社員の方々に積極的に話しかけるようになったり、ホストファミリーとの会話でもなるべく多くのことを質問したりしました。また、失敗しても、周りの人が大丈夫だよと快く許してくれたおかげで、いつもより大胆に、いろんなことにチャレンジできるようになりました。その結果、本当に行ってよかったと思えるような留学を経験することができました。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (農林水産業みらいプロジェクトコース)			訪問国	シンガポール
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	内野友鈴	学年	2年

・留学内容

無農薬で体に良いというのが売りのお茶を様々な場所で販売していく中で、お客さんの層によって、購入率が異なることを学ぶ。

→この経験から、人の「体に良い商品を買おう！」という食意識があることで、もっとより多くの人に静岡のお茶を飲んでもらえると思った！

→日本より食意識が高い国に行って探究しよう！

(シンガポール)

- ・オーガニック認証というのがあり、そのような商品を多く売買されている
- ・日本と同じく食料自給率が低い
- ・東アジアの国
- ・中華系の人も多く、お茶というものが浸透している

Q. 本当にシンガポールは食意識が高いのか。本当ならば、それはなぜなのか。

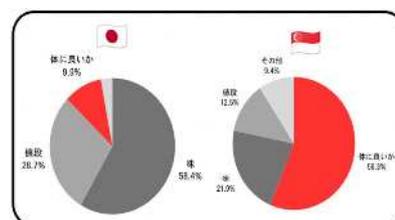
・街頭インタビュー

最初は質問し、回答を私が持っていたボードにシールを貼ってもらうという形式にしていたが、風が強かったり、貼ってもらうのに手間がかかったりしてしまうという理由で回答方法を変更した。変更後は、私が質問を文字で見せながら、回答を聞き、メモするという形にした。自分の英語に苦手意識があるため、聞き取ってもらえるかなど心配だった。数人聞き取ってもらえなかったが、多くの人が私の拙い英語に耳を傾けてくれて親切にインタビューを受けてくださった。

「食品を購入するとき、最も重視する点は何か？」

留学前に日本で同じ質問をしたときの結果と比較

この結果からシンガポールは日本に比べて食品を購入するとき“値段”を気にするという人よりも、“体に良いか”というのを気にする人が多いということがわかりました。



「Nutri-Grade ラベル*を知っていますか。」



*シンガポール政府による国民の健康維持のための取り組みの1つ。飲料の砂糖の含有量を示すラベルで、含有量が少ない順に ABCD の4段階あり、C、D はラベルの表示が義務つけられている。

私はこの取り組みに対して、シンガポールの人たちがどう思っているのかを調査したく、この質問をしました。しかし、認知度を調査していると近年導入された取り組みということも相まってほとんどの人が「No」と答えました。オフィス街のパークでお昼ごはんを食べている人を主に対象にしていく中で「No」と言っている人の手元に Nutri-Grade ラベルがあったので、「これ！」と言ったら「ああ、砂糖」と言っていたので、名前だけで聞くよりも、そのビジュアル、見た目を見せながら聞いたほうが効果的なのではないかと思い、変更しました。その結果、約半分の人が知っているという結果になりました。

・店舗調査

店舗においてオーガニック製品がどの場所に置いてあるか、お客さんの通りはどのくらいかを調査するために実際に様々なタイプのスーパーや食料品店を訪れました。庶民的なスーパーにもオーガニックの自社製品があったり、そのコーナーが入口付近にあったりしました。そのコーナーには「J」とも書いてあり、印象的でした。日本の多くのお店ではあまり目立たないところにあることが多いので、その違いを感じました。また、街なかにも健康を促す広告があったりしました。



・探究からの考察

日本とシンガポールは政策から店舗の環境まで異なることが多く、そこから国民の意識の違いが生まれているのではないかと思います。私自身法律にも興味があるため周りの環境からの影響など今回の留学が少しステップになりました。

・シンガポール国立大学見学

私は高校で国際バカロレアのカリキュラムを受けているため、実際に国際バカロレアでシンガポール国立大学に入学された方々にお話を聞いたり、大学内を案内していただいたりしました。私自身 IB に対して無知なところもあったのですが、色々なお話を聞き、日本での勉強意欲も上がりました。シンガポール国立大学はオープンキャンパスのため、観光客が自由に訪れることができ、良いこともあるのですが、生徒にとってはオーバーツーリズムによって勉強の邪魔になってしまっているという問題もあります。実際に行ってみて、食堂など多文化なご飯の種類が用意されていたり、色々な言語が飛び交っていたりすることに驚きました。



・シンガポール国立博物館 / チャンギ・チャペル&博物館

シンガポール国立博物館、チャンギ・チャペル&博物館では、日本の教育では学ばない日本と東南アジアの歴史を学ぶことができました。日本での授業だと、日本が被害を受けたと私達は受け止めがちですが、戦争は日本も多くの国を占領していたということに気付かされました。日本の占領の動きなどの展示がこの東南アジアの地にあることや「Japanese vs The alls」という表現を初めて見たので驚きました。実際に、取監されていた再現の場所では狭いコンクリートの中で生活していたことにストレートに現実味を感じる展示でした。他の国でこのような展示を見ることで視点を変えることができ、留学しなければ広がらなかったです。



・アンバサダー活動

アンバサダー活動では日本の食べ物を配ることを中心に行いました。一緒に知育菓子を作ったりすることでお互いの国を話す機会を作ることができたり、日本のお菓子を「私の宝物」と言ってくれる子もいました。また、街頭アンケートに答えてくださった方に感謝として日本のお菓子を渡しました。「日本のお菓子です」というとみんな喜んでくださって嬉しかったです。しかし、様々な宗教がある多文化国家だからこそのこともありました。私のホストファミリーはヒンドゥー教の家だったため、ベジタリアンでした。私は留学期間中ベジタリアンフードを食べました。最初は慣れない食生活だったのですが、ホストファミリーとご飯について話したり、色々話して大切な思い出になりました。本当は日本のお味噌汁を渡したかったのですが、その中に魚のエキスが入っていたので断念しました。向こうもごめんねと言ってくださり、お互いの文化を強調することができました。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡県立静岡高等学校と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	ニュージーランド	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	増田 匠飛	学年	2年

僕は仮面ライダーが好きだ。

どれほど好きかと言われれば、変身ベルト集めに飽き足らず、その名言に心を震わされ、高校の探究活動で「仮面ライダーと人々の成長への影響とは」と題して仮面ライダーの職業と名言に注目してその影響力の大きさを調べたほどである。

そんな僕の留学テーマは「多民族国家、ニュージーランドで学ぶ世界の理想のヒーロー像とは」で、探究活動の問いは、「仮面ライダーや静岡のご当地ヒーローを国際的なヒーローにするための条件とは何か。」である。

僕は仮面ライダーと同じくらい、地元静岡の魅力が世界に広がったらいいのにと思っていた。そんな時に、静岡新聞で静岡のご当地ヒーローの茶神888さんのことを知り、静岡の魅力発信にご当地ヒーローが一役買っていることを知った。そこでそんなご当地ヒーローをもっとたくさんの人に知ってもらい、静岡のことも知ってもらいたいと思い、ニュージーランドへの留学を決意した。

ニュージーランドに留学しようと思ったのは、ニュージーランドは多民族国家で世界の縮図であり、日本と同じ島国でありながらもニュージーランドといえばラグビーと誰もがこたえられるくらい文化発信に長けた国であるからだ。

そして、ニュージーランドで僕は①出身国、②ヒーローは好きか、③お気に入りのヒーロー、④ヒーローを魅力的にしているものとは、⑤ヒーローに適した色の5つを60人にインタビューをした。およそ8割の人がヒーローを好んでいて、ヒーローの能力、人を守ること、そしてアクションがヒーローの魅力であり、そして他を圧倒して赤、黒、青の順でヒーローのイメージがあることを発見した。



また、” LORD OF THE RINGS “の制作会社である WETA のワークショップと、そのロケ地である HOBBITON を訪れた。映画で使用されたセットや、映画の世界観に合わせてつくられたロケ地の世界観の深さを体感した。

このことから、理想のヒーロー像には、ヒーローの能力や人々を守る姿勢という表層のものだけでなく、それらを際立たせるバックグラウンドストーリーや、名言やハートなどのストーリー性が重要であると分かった。

ただ、僕が思うご当地ヒーローの魅力とは地域に根付いていて、その地域に行けば実際に会えるということなのだ。理想を追求しすぎた結果、CGなどに頼りすぎてしまい、実際に会ってみたらちょっとがっかりしてしま

うようではいけない。だからこそ、お祭りやイベント、地元のTV番組などに出演し、露出度を挙げ、ヒーローとしての真価をステージ上で発揮するような、戦えるゆるキャラを目指すべきなのではないかと考えた。

これが僕のニュージーランドでの探究活動での成果だ。正直に申し上げると、60人へのインタビューは骨だけでなく心も折れてしまいそうな出来事であった。知らない土地で知らない人になれない言語で話しかけるのだ。断られてしまってもその場で慰めてくれる人はいなかった。それでも最後までやり遂げられたのは人々の温かさに触れたからである。



渡航前には先生方や家族、友達がたくさん応援してくれた。留学中もニュージーランドの人々にたくさん励まされた。それに同じ時どこかで頑張っているトビタテ生、そしてふじのくにグローバル人材育成事業1期生の仲間がいた。なにより、援助して下さった企業様や県の皆様に土産なしでは面目が立たなかった。そして結果的に目標を達成することができてとてもうれしかった。

他にもうれしかったのは、人として大きく成長することができたからである。ニュージーランドへの留学は、確実に仮面ライダーと同等かそれ以上の影響を僕に与えた。

たくさんの友達との出会いもそうである。ルームメイトのLucaはニュージーランドでの初めての友達で、たくさん笑いあったBroであるし、同じ語学学校だった友達や、HOBBITONへのツアーでの友達もいる。彼らのおかげで最初の1週間は早く帰りたいと思っていたニュージーランド留学から帰りたくないと思えたり、より活発に様々なことに挑戦してみようと思えた。

自分の行動の責任を持つのは自分一人だけか、日本人全員だという境遇も成長できる要因だったと思う。もし寝坊してバスを逃して語学学校に遅れたり、計画が不十分で探究活動に手が回らなくなったりしたらもう責任を取るの自分しかない。また、世界にトビタツと、僕は日本人という大きなくりに入る。そんな僕がバスの運転手や店員さんに挨拶をしなかったら日本人ってそうなんだと失望させてしまう。サッカーワールドカップでごみ拾いする人々の日本人というイメージをたった一人で壊しかねない。このような重圧の中での生活は自分を律するきっかけになった。どうしても甘えが出てしまう自分が、留学を通して少しは自己をコントロールすることができてきたように感じる。



このように、ニュージーランドでの留学は今でも忘れられないものとなっている。今後、僕は静岡のご当地ヒーローを通じて静岡を発展させ、そして日本のヒーローが世界にトビタツために成長し続けることを誓う。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)			訪問国	ニュージーランド
学校名	掛川西高等学校	氏名	平澤一真	学年	3年

私は夏休みの1ヶ月間を利用して、ニュージーランドの音楽教育について学ぶために現地の高校に留学しました。部活動や音楽の授業を通じて、ニュージーランドの音楽教育の高さを実感しました。特に、日本と比較して生徒の自主性や創造性が重視される教育方針に驚かされました。ニュージーランドでは、音楽の授業が実践的であり、演奏や作曲の機会が多く提供されています。進路決定のタイミングが早いことや、地元の高校に自然な形で進学する仕組みも日本とは大きく異なり、地域との結びつきの強さを感じました。

留学中には、日本食をホストファミリーや他の留学生にふるまい、異文化交流を図りました。特にホストファミリーが日本食を喜んでくれたことが印象的でした。また、サクソで坂本龍一の「戦場のメリークリスマス」とバッハの曲を全校生徒の前で披露し、日本の音楽文化を広めることができました。その中で、音楽による人と人をつなげる力を改めて感じるようになりました。

留学中に多くの人々に助けられ、ニュージーランドでできた友人たちとの関係を通じて価値観が大きく変わりました。食事や遊び方、生活の仕方まで、すべてが新しい経験であり、楽しいものでした。特に、友人たちとビーチでバーベキューをした日が印象深く、地元の食材を使った料理やビーチバレー、焚き火を囲んでの会話を通じて、ニュージーランドのリラックスしたライフスタイルを体験しました。それだけではなく、友人と夜の星空を見に散歩をしたのも思い出に残っています。これらの体験は自分に取り込まれ、モチベーションは常に高い状態を保つことができました。

私の探求活動は、音楽教育や学校体系の日本と海外の違いを探し、日本に活かせる点を見つけることが目標でした。しかし、ニュージーランドと日本の教育システムや理念は全く異なっていたため、想像していたものとは大きく異なりました。これが逆に新たな興味を引き起こし、ニュージーランドの教育方針や学習方法の柔軟性に感銘を受け、日本の教育にどのように応用できるかをさらに深く探求したいと思うようになりました。

今後の挑戦として、海外の大学に進学し、国際的に活躍する公認会計士になることを目指しています。異文化の中で学び、さまざまな背景を持つ人々と交流することで、国際的な視野を広げたいと考えています。最終的には、日本と海外を繋ぐ架け橋となり、グローバルなビジネス

シーンで活躍することを目指しています。

学校帰りにカフェに行った時の写真



学校でサッカーをした時の写真



パーティーをした時の写真



パーティーをした時の写真



ホームステイ先のすぐ近くにある広場の写真



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立駿河総合高等学校	氏名	渡邊 心	学年	3

1. 目的・応募理由

私が留学を希望した理由は、ストリートアートを通じて自己表現の大切さや多様な価値観を学びたかったためです。特に、日本のシャッター商店街に彩りを加える方法を模索しており、現地のアート文化や人々の考え方を学び、清水に還元したいと考えています。また、日本文化を他国の人々に紹介し、異文化交流を深めることも目標にしています。

2. 研修内容

(1) 探究活動

テーマ：「ストリートアートから考える人々の思考とは」

(留学前の準備)

清水区役所と駿河区役所で商店街について調査を実施。校内で「シャッター商店街」やストリートアートのイメージについてアンケートを行いました。

結果：多くの人が言葉自体は知っているものの、その深刻さについてはあまり理解していないことが分かりました。

(留学中の活動)

現地でストリートアートを撮影し、壁や車、広告に使われているアートの多様性を発見しました。日本人3名へのインタビューを行い、現地においてストリートアートは「治安の悪さの象徴」から「クリエイティブな表現」へと変化していると分かりました。

BushWick のアート街を訪れ、アートツアーガイドから「ルーツが表現に大きく影響する」と学びました。

(成果と学び)

ストリートアートは自己表現や心の繋がりを生む手段であることを実感。

(2) アンバサダー活動

浴衣や日本食、漫画、ちいかわ、分解消しゴムなど日本文化を語学学校の友人に紹介しました。細かい模様や作りに驚き、日本文化の精密さが伝わったことを実感しました。



(3) エヴァンジェリスト活動

活動タイトル：「清水銀座商店街に彩りを！！」

目標：地域のシャッター商店街にアートを施し、商店街を活性化させる。

対象：高校生や親子

(具体的活動内容)

清水区役所と連携してシャッターの使用許可を得る。

資金集め、ボランティア募集、広告展開を行う。

3. アクティビティ

ストリートアートツアーへの参加やインタビューを通じて、現地の文化や価値観を深く理解しました。また、日本文化の紹介活動を積極的に行い、友人たちと異文化交流を楽しむことができました。そして、ホームステイ中、公園で鍵を紛失し、ホームレスの方に話しかけて助けてもらうという経験を通じて、勇気を出して行動する大切さを学びました。

4. 感想等

この留学を通じて、異文化理解や自己表現の大切さを学ぶことができました。自分の夢や未来がより明確になり、探究活動の成果を静岡県内でイベントやワークショップを通じて還元したいと考えています。

留学は「人生を豊かにする切符」であり、挑戦することで新たな成長が得られると実感しました。これからも自分の経験を活かし、行動することを大切にしていきたいと思います。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	佐藤 桜香	学年	第2学年



生徒が形から授業を楽しむことができるよう、クリスマス
の時期にはクリスマス仕様の
洋服を着てくるクリスマス
DAY やパジャマ DAY、ブルー
ホワイト DAY など様々な DAY
が存在する。楽しく主体的に
学ぶための一つのいい方法。

「サザン高校の授業方針」

1. ディスカッション法

⇒授業では生徒同士がそれぞれの考え方などを共有することで様々な視点から物事を考える力を養う。

2. 自己主張・否定禁止法

⇒何事でもまずは言う、他人の意見を否定せず受け入れることで自己主張に自信がつく。

3. 授業プログラム法

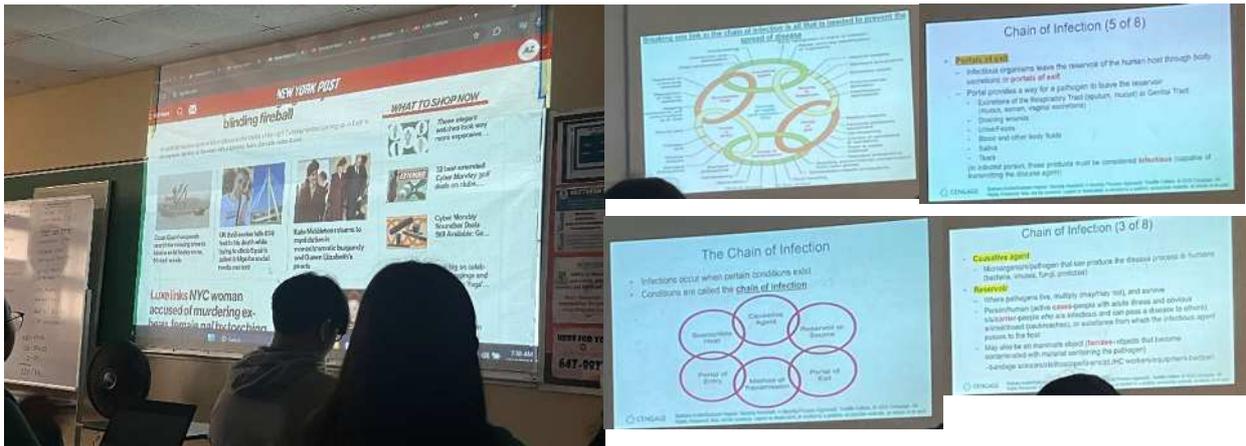
⇒授業を大学のように自分で取捨選択することで、将来の自分を見据えるとともに今自分が何をすべきかが明確であり、授業に対するモチベーションの増加。

4. テスト・表現二分法

⇒テストを年に2回行うほかに授業内容を応用・発展し、授業内容を用いて何かを創り出すことで、より楽しく・意欲的に授業に取り組むことができる

三角関数表を用いた制作物





ディスカッション法授業のほかに講義型の授業の2種類を受講することで、受動的かつ能動的に考え、より深い理解につながるほか、状況に応じた学び方を身につけられる、得意・不得意を補えるなどのメリットがある。

【全体を振り返って】

日本の教育と比較して、アメリカの教育は生徒の自主性を尊重している点が特徴的でした。授業中の発言やプレゼンテーションの機会が多く、生徒たちは自分の考えを自信を持って発信していました。この点は、日本の教育における「受け身」な学習スタイルとは対照的であり、新鮮な経験でした。ホームステイ先の家族はとても親切で、日常生活の中で英語を使う機会が多く、生きた英語を学ぶことができました。特に、毎日の食事や会話を通じて、文化の違いや生活習慣について深く理解することができました。週末には一緒に観光地を訪れるなど、グアムの美しい自然と歴史を楽しむことができました。タモンビーチや恋人岬などの観光地は特に印象深かったです。この留学を通じて、異文化理解の重要性を再確認しました。異なる文化や背景を持つ人々との交流は、自分自身の視野を広げ、柔軟な考え方を養うきっかけとなりました。英語力だけでなく、コミュニケーション能力や適応力も向上しました。帰国後も、この経験を活かし、さらに英語の学習や国際交流活動に積極的に取り組んでいきたいと思えます。今回の留学は私にとって大きな成長の機会となりました。この貴重な経験を胸に、今後も新たな挑戦を続けていきます。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	英国	
学校名	静岡県立富士高等学校	氏名	齋下 日和	学年	高校2年

私は「演劇は最強のコミュニケーションツールだ」という持論を持っている。小学校4年生のときから私は地元富士市の市民ミュージカルにキャストとして参加するようになった。同じ場面を演じるとしても、役者によって演じ方は少しずつ違う。その違いを生み出すのは個々の経験からなる価値観であり、芝居を作る上では役者同士、演出家、裏方、観客の間で互いの価値観を知ることができると感じたためだ。しかし、日本人は「空気を読む」「遠慮」といった風潮のもと、自己表現が希薄で互いの内面をよく知らないまま意図せず相手を傷つけてしまうことも多いだろう。ここで私は「演劇教育」とそれにおいて長い歴史を持つ英国に目をつけた。英国では演劇を学校の授業で学ぶことで、舞台に立つことが人々に身近にある環境であると仮定して、「演劇が身近にある環境で形成されるコミュニティでは、お互いに自己表現やコミュニケーションをどのように行っているのか」という問いのもと英国での探究活動を行った。

滞在形態はホームステイで、平日の午前中は語学学校で英語の授業を受け、平日の午後や休日で探究活動を進めた。行った探究活動は主に4つである。

1. アンケート 英国と日本で同じアンケートを行った。英国では語学学校で同じクラスだった生徒やホームステイ先近くの公園にいた親子連れ、演劇学校の体験授業（合計18人）に、日本では学校のクラスメイトや所属している演劇部の部員に回答してもらった。意外な結果となったのは、「演劇の授業を受けたことがあるか」という問いに対して「ある(55%)」「ない(45%)」と割合が近くなった点だ。演劇の授業が選択制になっている学校もある可能性があること、英国が多様なルーツを持つ人々が生活する国であることが理由として予想される。日本との比較で興味深いのは、「人前で自分の意見を言うのが好きか」を5段階で評価する質問に対し、英国の演劇教育経験者の方が日本人より平均が高評価であった。演劇教育を通して、上手くできるかに関わらず自分の意見を発信することの大切さを理解することができているのだと思う。

2. 観劇 日本との公演の形態の違いを調査した。日本の公演と大きく違ったのは、客席で飲食ができる点、観客が積極的に大きいリアクションをとっている点、ルーツによる見た目の違い（肌の色など）を無視して配役され様々な人種の人々が1つの舞台に立っている点である。客席で劇の邪魔をしないように静かに観なければならないという堅い雰囲気は保たれている日本の劇場に対して、英国の劇場では、演劇の授業を経験している人がいたり客席での飲食が認められていたりして日本より軽い雰囲気ができているため、観客の素直なリアクションが引き出され、より劇場の一体感や物語世界への没入感を感じた。また、様々な肌や髪の色役者が

写真1



写真2



1つの作品を作っている様子は、多文化共生社会・違いを認め合う理想的な社会のロールモデルとして特に子どもたちに良い影響を与えられると感じた。(写真1：客席で休憩時間にアイスクリームを食べることができる)

3. シアターツアー シアターツアーとは、観劇を目的とせず客席や舞台裏を案内しながら劇場の歴史や舞台装置についての説明を受けられる劇場での取り組みである。役者や裏方の稽古中の様子も見る事ができた。様々な国の言語に対応したパンフレットが用意されるなど海外からの旅行者への工夫、スタッフ2人による劇仕立ての紹介など参加者が楽しく学べる工夫があり、観劇が目的ではなかったが観劇にも興味を持たせる内容であった。(写真2：Shakespeares' s Globe (シェイクスピアのグローブ座) のシアターツアー)

4. 演劇学校の体験授業 演劇学校 Wac Arts の俳優育成コースの半日体験授業に参加した。「俳優とは何か」という問いへの自分なりの答えを発表する活動から始まり、講師や参加者が自分の意見を否定しないという信頼感を得ることができた。その後は身体や表情を動かす活動、台詞を練習して参加者の前で発表する活動を行ったが、最初の活動で作られた温かい雰囲気によって自己表現に対する抵抗感が薄まり積極的に活動に取り組むことができた。

当初仮定していた身近さとは異なるが、観劇が人々にとってポピュラーな活動であったりシアターツアーという取り組みがあったりすること、上記の他にも、公演の直前に余っている客席のチケットを安く買うことができるサービスや子どもたちが遊びで舞台を使える場など演劇に触れる機会が多く(写真3：子供博物館にある子どもたちがなりたい姿を表現するステージ)、日本より演劇が身近な存在であるということがわかった。そして、その環境の中で人々は、「自己表現に楽しさを見出すことができる」「演劇を観たり参加したりすることを通じて違いを認め合った上で協力するコミュニケーションへの姿勢を学んでいる」「舞台作品への理解があり気軽に自分の素直な反応をもとに物語世界に入っていくことができる」という日本人とは異なる姿勢で演劇、自己表現、コミュニケーションと向き合っていることが見てとれた。今後の展望としては、演劇を学ぶこと、参加することの効果をも自分の目で見て実感することができたため、様々な年代の人にとってより有効な演劇ワークショップの形や観劇の形を考え、企画・運営まで行いたい。今の時点では知識や技能が足りないため、高校生のうちは本を読んだり様々なワークショップに参加したりして、大学で演劇を学問として学び演劇の効果をもより理論立ててプレゼンできるようにしたり演劇の歴史を学んで世界を演劇の魅力で結びつけるヒントを探したりする。そして、子どもから大人までが演劇を通じて結びつき人間性を磨ける演劇団体を設立したいと考えている。今回の留学は自分の中の演劇への視点を増やすような経験になった一方、演劇の知識や違う言語でも相手に自分の思いを伝えられる表現力や語学力の不足に気がついた。世界中のどのような人に対しても自分の言葉・表現で相手の心を動かせるように、最終目標である「演劇を世界中の人の心の居場所にする」を達成するために、日々の努力と、自分の言葉のもとになる豊かな経験を多く積んでいきたい。

写真3



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース（静岡と世界を繋ぐ マイプロジェクトコース）		訪問国	フィンランド （ヘルシンキ・エス ポー）	
学校名	静岡県立浜松西高等学校	氏名	吉田恋菜	学年	2年

テーマ

なぜ浜松市とフィンランドは幸福度が高いのに浜松市は貧困率も高いのか

留学概要

活動期間：2024/08/13-2024/09/15

場所：フィンランド（ヘルシンキ・エスポー）

活動内容：ヘルシンキの中学校1校・エスポーの小学校2校・中学校1校・高校1校でアシスタントティーチャーとして活動

～事前にした活動～



浜松市の子供の貧困について知るために、毎週水曜日に行われている子ども食堂のボランティアに参加

→活動していく中で孤立してしまうと貧困に陥りやすいことを知った。子供の居場所づくりや大人でも悩みを話しやすい場所を作ることが貧困を変える一歩だと知ることができた！



浜松市内の小学校2校の生徒合計100人にアンケートを行った。アンケート結果から、幸福度と貧困の関係よりもフィンランドと日本の文化や教育の違いが大きく、想像していた結果とは違う結果が出た

～留学中にしたこと～



フィンランドの小学校2校、中学校2校、高校1校でアシスタントティーチャーとして活動をし、日本の授業や先生の手伝いをしたり生徒と一緒に授業を受けたりした。また、幸福度に関するアンケートを英語のものとフィンランド語のものを用意して全ての学校で行った。フィンランドの子どもたちと実際に教育現場で過ごす中で、語学力の凄さとたくさんの方に挑戦する環境が好奇心に繋がって幸福度が向上するのではないか、と考えた。



～アンバサダー活動～



静岡の名産品である「ウス茶糖」を企業に100本協賛していただき、フィンランドの子どもたちに配った。ホストファミリーや友達にお弁当を作ったり、ちらし寿司を作ったりした。ホストシスターに日本のお餅を食べたいと言われて、日本から持ってきていたお米でお団子を作った。



～エバンジェリスト活動～



留学から得た体験や探究活動を講演会を通して広めたり、子ども食堂の活動を継続したりしている。

また、留学を通して挑戦できる環境づくりが幸福度に繋がるのだと知り、学生団体「Fuji's teens」を立ち上げて代表となった。静岡のトビタテ生約50人が参加していて、STCというイベントに出展したり私たち主催のイベントを開催したりしている。



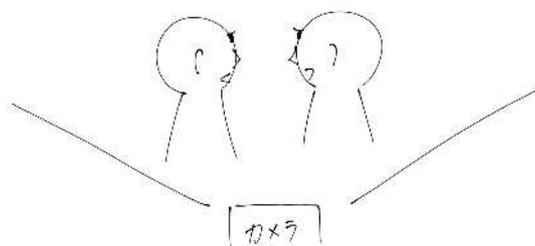
ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	安部心葉	学年	2

1. 日時 : 2024. 07. 15~2024. 08. 02 19 日間
2. 渡航先 : アメリカ合衆国 ロサンゼルス
3. 受入先 : FLS International Citrus College
4. 留学計画 : 授業選択できる演劇はどのようにしてアメリカの人々の生活に馴染んでいるのか
5. 探求テーマ : 自己表現の仕方や演技指導方法、受講生の感性や育ち方、意識は日本とどのように異なるのか
6. 研究方法 :
 1. 現地の講師のもと、映像について学ぶ
 2. 映画を制作する
 3. 現地の人に演劇について質問する
 4. スタジオ見学に行く

7. 研究行動 :

・ショートムービーを制作する前に、カメラの基本的な使い方や撮影に用いる道具の名称などを教わった。また、人物を撮影するときには、一つの視点から見た角度で撮ることを意識するなど、普段何気なく映像を見ているだけでは気が付かないような知識を獲得できた。



- ・舞台設定、セリフ、役柄、撮影場所、編集方法など、一から映画を作るにあたって、すべてプログラム参加学生で作上げた。
- ・SONY スタジオやワーナー・ブラザーススタジオなどを見学し、映画の歴史的背景や、実際に撮影中の倉庫の真横を通過するなど、ハリウッドの空気感を味わった。

8. 研究結果：

- ・ホストマザーに映画への関心についてインタビューを行ったところ、「ロサンゼルスにはハリウッドという聖地やスタジオがたくさんあり、必然的に映画への関心も高くなる。映画を見ることでリラックスできる部分がある。」と述べていた。
- ・ショートムービーを完成させた。映像と音声のタイミングを合わせたり、英語での芝居に苦戦したが、プログラムに参加する学生同士で励まし合い、最後まで作り上げることができた。



9. 考察：

- ・映画を見ることでリラックスできるが、ロサンゼルスに住む人はより映画への関心が高く、その分心の拠り所になる割合も高いと考えた。
- ・演技において、台本を覚える、理解する、ディスカッションをして解釈を一致させるときに言語は必要不可欠だが、自身の内面に落とし込んだあとは語学力よりも分析力が求められる。それは言語に関係なく、日々の練習の積み重ねが大切だと考えた。

10. トビタテのつながり

小学生のとき、「高校で留学したい」と考えていたが、高校生に近づくに連れ、そして高校生になるとなおさら「留学は夢のまた夢」と思うようになっていた。そんな中で飛び込んできたトビタテ留学 JAPAN のチラシが、私の運命を変えた。もちろん留学で困難もあった。しかしずっと追いかけている夢を目標にしたいと思っていた中で、日本の外に視野を向けるタイミングができたことは、さらなるモチベーションアップに繋がった。また、海外に第二の故郷ができ、日本とはかけ離れた場所に私のことを知っている人がいるという事実は、私の居場所が日本だけではないという豊かさをもたらしてくれる。留学は確実に私の人生を変え、さらなる目標達成のために活かされていく。



参加した コース	ふじのくに地域探求コース 観光交流促進コース		訪問国	オーストラリア タスマニア島	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	福地まや	学年	高2

まず私がこの事業に参加し留学に行こうと思った理由は海外へ強い興味があったのと自分の目を通して世界を見て知らない文化や生活を味わいたいと思っていたからです。このトビタテの特徴の一つは自由な探求活動、そこで私はもともと好きだった自然と関連付けようと思いました。自然保護と観光業を合わせたエコツーリズムをキーワードとし、オーストラリアのタスマニア島へ留学しました。

探究活動では地元の人たちの日常生活や施設、保護環境からタスマニアの自然保護の特徴を調べ静岡に活用するというものでした。タスマニアと聞くと人によってはタスマニアデビルを連想すると思います。ですがそれだけではなく、タスマニアは固有種を守るための国立公園と保護区が多くあり、オーストラリアの中でも自然保護の質が高い



場所です。そんなタスマニアへ行って私が驚いたことは”人々の自然保護に対する意識”でした。こう聞くと自然保護への関心や意識が強かったように感じますが、その逆で思ったより意識をしている様子はありませんでした。しかしそれでも、ほとんどの人がマイバックを持っていたり、生ゴミでコンポストをつくって肥料にしたりと日本に比べるとエコや地球にやさしいことを意識していました。また私が感心したのはレジ袋の素材がエコだったり、人々が無意識に生活していても自然保護につながる環境づくりがされていたことです。そこで私は関心を持ってもらうことはもちろん大事だけれど最終的にはエコな生活が意識されずとも行われる状態にしたいと思いました。



次にいくつかの国立公園と保護区を訪れました。マウント・フィールド国立公園では森の中にいくつかのハイキングコースがあり、看板に往復でかかる時間が書かれていてこれはエコツーリズムのひとつとして静岡にも活かせるのではと思っています。他にもボノロン

グ野生動物保護施設のツアーに参加したり、家の近くの保護区に指定されている森や川に行ったりしました。ボノロングでは職員さんが保護した動物たちの経緯や現状について説明してくれました。ほとんどが観光客でこんなふうに伝えていくのかと勉強になりました。

タスマニアでは政府や保護区などが行う大きな保護から個人の意識による小さな保護まですべてが合わさってこの自然が守られていると現地の生活で強く感じました。

留学では初めての一人旅、しかも海外ということで不安でした。しかしそれを大きく上回るほどのドキドキがありました。もともとずっと行きたかった留学でなにより未知への好奇心が強かったです。ただ何事もうまくいくものではなく、飛行機が遅れたり、乗り換え先の空港で迷ったりと初めからトラブルに見舞われました。しかし行きでそんなことがあったからこそ、その後は自分から人に聞きに行く・わからないことはしっかり聞くことを意識しました。



印象に残っていることは語学学校が終わったあとに街のいろいろなところを歩いてことと現地の高校に訪問したことです。タスマニアの州都ホバートに語学学校があったため放課後はチョコレートのお店やパン屋に教会など日本とは全く異なる町並みを眺めながら自分の足で探検したのはとても楽しかったです。また2日間だけ地元の高校ホバートカレッジの授業に参加することができました。語学学校の生徒は幅広い年代でいろいろな国の人がいましたが、高校は年の近い子が多く語学学校とはまた違った交流でいい経験になりました。

最後に、私は留学へいったことで今までにない経験をし、様々なものを得ました。特に”自分から行動する力”と”物事を広く考える力”が強くなったと感じました。留学前から自分で計画を立ててこの事業に申し込んだことで自身に繋がりましたが、留学先でわからないことや知りたいことは積極的に聞くことを意識して無事留学を終えたことで行動に移すことへのハードルが低くなり、積極的に動けるよう



になりました。また今までより考える規模が大きくなり視野も広がりました。この力がついたことで将来像が具体的になりました。私はこの経験を活かしていくと共に、より多くの人に留学の良さを広めていけるよう活動していきたいです。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	オーストラリア	
学校名	静岡県立駿河総合高等学校	氏名	本杉璃乃	学年	2年

1 留学に行こうと思った経緯

静岡県が抱える人口減少問題に関心がありました。人口減少の大きな原因は出生数の減少による自然減と言われているため、静岡県外の方が静岡県に移住することが人口減少解消の鍵になると思い、どうしたら静岡がもっと魅力ある街になるだろうと考えました。留学先はオーストラリアのメルボルンに決めました。メルボルンは世界で最も住みやすい街として去年は4位、一昨年は3位、2010年から2017年までは7年連続で1位を勝ち取っている街です。歴史的な建物が多く存在し、それをリノベーションして、より多くの人が利用できるよう活用しています。歴史的建造物や趣ある建物が多くある静岡県にも、メルボルンが行っている街づくりの工夫を生かせることがあるのではないかと、それを現地で調査したいと思いました。

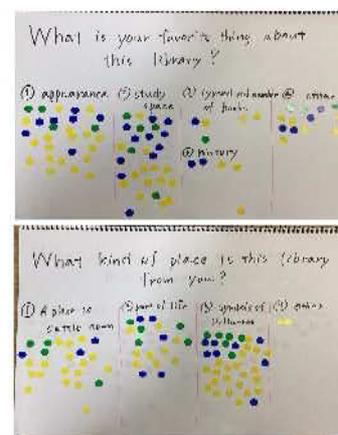


2 出発前の活動

現地での探究活動をより有意義なものにするため、出発前には静岡市の総合政策局・企画課に伺い、静岡の人口推移や行っている取り組み、静岡をどんな街にしたいのかについてお話を聞きました。静岡市は様々な子育て支援やスポーツ交流などの取り組みを行っていますが、それでも人口減少問題を解決するのは難しいと分かりました。

3 現地での活動

200年以上の歴史があるビクトリア州立図書館で、スケッチブックを使って100人近くの人に街頭インタビューを行いました。また、リノベーションされたホテルのスタッフの方やメルボルン観光案内所の方にリノベーションや街の魅力についてのお話を伺いました。ビクトリア州立図書館での街頭インタビューの結果からわかったことは、図書館の存在を聞いたところ、世界で最も美しい図書館のひとつと言われ、200年近くの歴史もある図書館なので、メルボルンのシンボルと答えたのが一番多かったです。



一方で、学習スペースが充実しているところが好きという意見も多く、実用的な面でも活躍している図書館でした。観光客や地域の人どちらかではなく、両方が満足に利用できる図書館となっていました。

4 アンバサダー活動

アンバサダー活動では、空手と茶道を行いました。現地の空手道場に自分で電話をして、習っている空手を一緒に行いました。英語で電話をかけるのは初めてだったので緊張しましたが、無事に訪問できました。日本のスポーツを海外で触れられたのは貴重な体験で、空手を通して交流することができました。

茶道については、茶華道部の経験を生かし、お茶と和菓子をホストファミリーに振る舞いました。美味しいと喜んで食べてくれたので嬉しかったです。また、折り紙の折り方を教えたりして、日本文化を紹介しました。

5 探究活動の成果

メルボルンでは、歴史ある古い建物の良さを生かし、風情ある建物が多く、それが歴史や文化を広めることにも繋がっているなと思いました。レトロな雰囲気を感じたいという思いと近代化によって現代の人の要望に合った街づくりを行うには、メルボルンが行っているようなリノベーションが効果的なのだと感じました。メルボルンは都会でありながらもものんびり豊かな雰囲気が確かにあります。バランスをとりながら、様々な建物が共存することで、いつどんな人が来ても飽きることのない街になっており、それが住みやすい街へと繋がっているのだと感じました。



6 留学を終えて

私にとって、メルボルンで過ごしたことが、自分の強みや自信になりました。1人で飛行機に乗ったり、100人以上に英語でインタビューしたり、海外で家族と離れて生活をしたりしたことは、以前の私では考えられないことです。そのため、前よりも難しいこと、新しいことに1歩踏み出すのが楽になりました。また、将来について大学で具体的に何を学びたいか、前向きに考えるようになりました。

現在、留学で学んだことをきっかけに、清水駅前銀座商店街のシャッターに高校生や親子を交えて絵を描くイベントを企画しています。もの寂しく閉ざされたシャッターに色を付けることで、商店街がカラフルで親しみやすい場所になると同時に、イベント開催によって人が商店街に足を運ぶきっかけにもなります。留学の経験を活かして今後も、このような人が集まるような場所やイベントを増やして、静岡を盛り上げて行きたいです。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (⑤静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	フィジー共和国	
学校名	静岡サレジオ高等学校	氏名	土屋侑大	学年	1年生

まず、僕がこの探究をしようと思ったきっかけを最初に簡単に説明します。実は僕の兄はトビタテ生で現在、アメリカの大学に留学をしています。昨年春、家族で兄を訪ねました。ホテルの売店でミネラルウォーターを買おうとした時、英語を読み間違えて「あ、富士山の水だ」(Mt. Fuji Water / 右下写真の中の右のボトル) と思い、ボトルを手を取ったところ、よく見たら「FUJI WATER」(右下写真の中の左のボトル) と書いてありました。ボトルがおしゃれで高級なミネラルウォーターに見えました。

後で調べたところ、「FIJI WATER」には美容によいシリカが含まれ、アメリカのセレブに人気で、アメリカの輸入ボトルウォーターで売り上げNO1だそうです。ぼくはこの時、なぜ遠く離れたフィジーの水が世界ブランドとして売られているんだろうか？富士山の水は有名なのに、なぜ海外で売られていないんだろうか？と疑問を抱きました。そこで、富士山のミネラルウォーターを世界ブランドにするためにどうしたらよいかを考えようと思いました。これが、僕が今回のトビタテ留学をしようと思ったきっかけです。



そこで、フィジーで英語を勉強しながら、富士山とフィジーのミネラルウォーターを飲み比べし、アンケート調査を行い、どうしたら静岡の水が世界ブランドになれるかを考えることにしました。

留学前の事前調査として、静岡で Mt. Fuji Water というミネラルウォーターを生産している旭産業株式会社さんに取材と工場見学に行きました。

そして、その時、お聞きしたことやいただいた資料をもとに、①Mt. Fuji Water の修正ボトルの提案 (上写真)、②富士山と Mt. Fuji Water の紹介パンフレット、③アンケートを作成しました。①は Mt. Fuji Water のボトルのパッケージデザインの提案です。現在の表記を英語に変え、桜の花のイラストを付け加えました。



飲み比べ (左写真) ・アンケート調査の結果を簡単に説明します。まず、「どちらをおいしいと思ったか」という問いに対し、FIJI WATER のほうをおいしいと答えた人が約 69% でした。普段飲み慣れているほうをおいしいと思ったのかもしれないと思いました。また、「どちらが FIJI WATER だと思うか」という問いに対し、正解したのは約 57% でした。確率的には 50% で普通なので、あてた人がやや多かったという結果です。

次に、フィジー人が考える、FIJI WATER が世界ブランドになれた理由について聞きました。1 位が「水の質がよかったから」、2 位が「販売戦略がよかったから」、3 位が「パッケージ

デザインがよかったから」でした。僕の仮説としては、「水の質はそれほど関係なく、パッケージが素敵だから売れているのではないか」と思っていたのですが、予想に反して水の質を誇りに思っている人が多いことがわかりました。

最後に、パッケージデザインに対する意見をもらいましたが、圧倒的に肯定的なものが多かったです。しかし、さらなる改善の提案もありました。フィジー人は、桜の薄紅色よりももっと濃いピンクなどを好むほか、英語表記をとにかく早く見たいということで、富士山よりも先に商品名を書くといいという意見もありました。

FIJI Water はフィジーの主要産業の1つになっているのですが、この背景にはアメリカ企業の関与、フィジー政府の援助がありました。しかし、フィジーの人は「水の質が素晴らしいから」と理解し、それを強く誇りに思っているのが印象的でした。飲み比べてみて、僕は Mt. Fuji Water のほうが、少し甘味があっておいしいと思いました。旭産業さんによると、ふじのくにの水を海外で販売するには運搬コストの問題等があるが、海外展開を考えないわけではないとのことでしたので、これからも、ふじのくにの水の価値をみんなが誇りに思っていくべきだと思いました。そして、海外で必要とされる時がきたら、今回の結果を生かしてもらいたいと思いました。これらの調査結果を報告書にまとめ、旭産業株式会社さんに送りました。

現地での探究活動を通して、フィジー人が地元愛や FIJI WATER に対する誇りをとても強く持っていることがわかり。それらは僕が想像した以上でした。現地に行かなければわからないことだったので、留学してよかったと思いました。

また、アンバサダー活動として、近くの学校やホームステイ先で、折り紙(右写真の上)や将棋、日本語や日本の歌を教えるなどして交流しました。その他、教会(右写真の下)にも行きましたが、そこに集まってきた人は一緒に歌を楽しく歌ったりして、想像していたよりずっと気軽な感じでした。語学学校の教室だけではなく、生活の中で英語を使って現地の人と仲良くなれたことが良かったです。



最後に。この留学を通して、僕は本当に成長できたと思います。留学中に、ホームステイ中に、シャワーが水しか出なくなったり、茶色くなったりしたことがあり、ちょっとつらかったです。水道事情やお風呂に関する考え方は国によって違うので何も言わず我慢しようかとも思いましたが、近くに親戚の家があったので、勇気を出してそこに入りに行かせてもらえないかお願いしてみました。すると OK をもらい、温かいシャワーを浴びられました。小さな交渉ですが、英語でお願いできたことに達成感がありました。



左写真は泥温泉に留学仲間たちと出かけた時のものですが、僕は一番左でジャンプしています。僕は自分がこんなに高く跳べるなんて思いませんでした。これは僕の心の中を表していると思います。フィジーで、37日間、家族から離れて1人でやれた経験は本当に貴重でした。支援してくださった企業の方、事務局の方、高校の先生方、両親…すべての方に感謝して終わりたいと思います。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	ニュージーランド	
学校名	静岡聖光学院高等学校	氏名	阪脇 鉄平	学年	1年

私は静岡ブルーレヴズでシズオカショックを起こすため、参考クラブであるクルセイダーズがなぜ地元から愛され街興しに成功したのか？について探究しました。クルセイダーズのクラブハウスでは、クルセイダーズの常勝軍団の作り方や、地元から愛され街全体を巻き込んで盛り上げる方法を聞きました。また、街のラグビー場や資料館に行き、クライストチャーチとラグビーの繋がりを調べました。

探究活動から分かったこと。

Q クルセイダーズの魅力、愛されている理由は何か？

→優勝 13 回を誇る強さ、クライストチャーチに根付くラグビー愛。

月に 2 回の学校訪問、地域イベントの参加 (オフシーズン)

Q. クラブが地元から愛されるため、街興しのためにどのような活動、考えをしているのか？

→クルセイダーズは公開練習やファンとの交流会、地域貢献のためのチャリティー活動。

年に 1~2 回の大規模イベント、募金活動 (オフシーズン)

Q. クラブが熱狂的なチームをつくるために競技力を上げる方法は？

→高校生、大学生のユースチームを作り、若い頃から高いレベルでのプレーが可能になりそのままプロに上がれる育成システムづくり。Crusaders Academy

(クルセイダーズのクラブハウスで探究活動した際の写真→)





(最終戦で勝利した際の写真)

私は、ニュージーランド、クライストチャーチにある中高一貫の男子校 St bede's college に留学しました。IRP（インターナショナルラグビープログラム）があり、現地の生徒だけでなく、留学生も在籍している学校です。平日の学校では、現地生徒や他の留学生とラグビープログラムや部活、授業を行っていました。休日には試合に出場したり、探究活動に努めました。探究活動は学校でも行い、インタビューでは現地生徒や先生にクルセイダーズを愛する理由は何かを聞き、留学生には（アメリカ、アルゼンチン、イタリア、ルーマニア）等の生徒に自国のラグビーがどのような影響を人々に与えているのかを聞き出しました。

私は探究活動を通して、相手から話しを聞き出したいときには、積極的な姿勢や態度で行動すれば相手もそれ相当の返事をくれることを学びました。なので、今後も謙虚に探究活動を行っていきたいと思っています。

今後、私はラグビーを静岡に地域密着させるためには？について探究していきたいと考えています。マイナー競技であるラグビーを静岡に普及させシズオカショックを起こすために、教育でラグビーを採択しているフランスや、年々ラグビーの人気度や競技力が高まっている南米等、視野を更に広げながら探究し、静岡での導入方法を模索していきます。

シズオカショックを起こし、静岡県が日本一の街になることを目指して、日々奮闘していきます。

ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加したコース	ふじのくに地域探究コース (観光交流×アジアコース)		訪問国	台湾	
学校名	角川ドワンゴ学園 N 高等学校	氏名	井上 颯	学年	2 年

私の留学の動機はコロナ後静岡県を訪れる外国人観光客の回復率が50%と低く（全国最低）、その原因と解決策を知りたいと考えました。中学入学以来中国語を勉強していたこと、地方創生に関心が高かったことから、台湾での探究活動を目標に、トビタテの応募を決意しました。

私の留学目的は、静岡県に台湾からの外国人観光客を増やすために、デジタルマーケティングの効果的な活用方法を学ぶことでした。そのために、以下の探究活動を行いました。

まず、受け入れ先機関でDX（デジタルトランスフォーメーション）の基礎知識やマーケティング手法について学び、観光業に関連する中国語の授業を毎日受講しました。次に、ふじのくに静岡台湾事務所を訪問し、現地での取り組みや課題についてインタビューを実施しました。また、台湾での静岡県の認知度を把握するため、街頭インタビューを行い、現地の人々の意見や印象を収集しました。さらに、台湾の旅行代理店も訪問し、日本旅行がどのように紹介・販売されているのかを調査しました。

また、アンバサダー活動としては、静岡茶の歴史や特徴を中国語で説明しながらお茶を淹れ、台湾の方々にふるまい、静岡県の魅力を直接伝える機会を設けました。

これらの活動を通じて、静岡県の観光促進における課題や可能性について理解を深めることができました。

特に印象に残っている活動は静岡県の認知度を調査するための街角インタビューで、約50組の台湾の方々に飛び込みでお話を伺いました。すべて中国語でのインタビューでしたが、拙い言葉にもかかわらず、多くの方が温かく協力してくださいました。老若男女、さまざまな背景を持つ台湾の方々と直接交流する中で、異文化コミュニケーションの素晴らしさを改めて実感しました。また、台湾の方々が日本文化への深い愛情を持っていることを知り、誇らしい気持ちになったと同時に、台湾の人々への親近感が湧いてきました。お互いの文化を尊重し、楽しみ合える関係性の素晴らしさを肌で感じる事ができた瞬間でした。



さらに驚いたのは、静岡県が想像以上に認知されていたことです。留学前には考えもしなかった嬉しい発見でした。しかし一方で、実際に静岡を訪れたことがあるという台湾人は少なく、静岡県の観光業が抱える課題の大きさも痛感しました。

今回の経験を通して、私は台湾という国に強く惹かれ、大好きになりました。文化を超えてつながる喜びを知り、自分自身の視野が大きく広がった気がします。

今回の台湾への留学を通して、しっかりと事前準備をし、情熱を持って行動をしていれば、周りからの協力を得られるということを知れました。

静岡県には「やらまいか精神」という、「やってみよう」と前向きに挑戦する姿勢を表す言葉があります。失敗を恐れず新しいことに挑戦するこの精神は、地域の気風を象徴しています。留学中、不自由や困難に直面することもありましたが、気後れせず思い切って飛び込むことで、不思議と道が開ける瞬間がありました。この経験を通して、「やらまいか精神」の大切さを実感し、今後の人生でもこの姿勢を守り続けたいです。

将来は日本と世界をつないで、日本の魅力をより高めて、より活性化させたいと思っている。

そのためにも日本の都市の魅力を高めてより多くの人を惹きつけて、感動させられるようにしたい。

世界を飛び回り、多くのことを見て学んで、日本の都市を活性化させて、世界と日本の、都市と都市、都市と人、人と人をつなぐ事業にたずさわっている。

この夢を実現するために、多言語を学び、より多くの国を訪れたい。



参加した コース	ふじのくに地域探究コース (観光交流促進コース)		訪問国	インドネシア	
学校名	静岡県立藤枝東高校	氏名	水野美咲	学年	3年

1. 留学テーマと概要

留学テーマ：エコツーリズムの視点から静岡と東南アジアの結びつきを強くする

コロナ禍があげ、インバウンドが高まる中、静岡でも大型連休や長期休みにオーバーツーリズムがみられるようになった。オーバーツーリズムは環境破壊はもちろんのこと、騒音やゴミ問題、交通渋滞などにより、住人の生活に支障をきたしてしまう恐れがある。エコツーリズムという地域の自然環境や文化を保護しつつ、経済発展にも寄与する持続可能な観光を維持するにはどうすればいいのか。特にバリ島とのエコツーリズムを通じた交流を深めることで双方の地域活性化や環境保全に繋がると考えた。

2. 探求活動について

仮説：住人、企業、観光客が三位一体となって取り組む必要があるのではないかと

活動内容

A. 事前学習

・焼津さかなセンター 焼津市(右写真)

- ・製茶 焼津市
- ・用宗漁港 静岡市
- ・茶の都ミュージアム 島田市
- ・石畳茶屋 島田市
- ・KADOTE OIGAWA 島田市



分かったこと

静岡県内の観光地を訪問しインタビューやアンケート調査を行った。年末年始や長期休みに大勢の観光客で賑わう焼津さかなセンターを訪れたところ、平日は約半数の店しか営業していなかった。GWや長期休み等は大型バスで国内外からの客が来るそうだが平日は極端に人が少ないため、すべての店を開けておくと赤字になってしまうそうだ。休日はまさにオーバーツーリズムともいえる状況になってしまっているため、分散させることが必要。しかしながら、スケジュール上での問題や、駅から離れているという立地の問題もありなかなか解決は難しいようにも感じた。また、海外の方とのやり取りで困ったことはないかどうかを訪ねると、今は翻訳アプリを使えば必要最低限の会話ができるので問題はないそうだ。また、私が観光客の立場であったら「これは保安検査に引っかからないかどうか」をしれるようなポスターがあると便利だと思った。生ものは勿論のこと、鯉節や、だしなどせっかく買ったのに持って帰ることが出来なかったということがないように安心してお土産選びができるような取り組みがなされるべきだと考える。

B. 現地での活動

- ・フリースクールへの訪問
- ・障がい者施設への訪問
- ・ホテルインタビュー
- ・該当調査
- ・ランドフィル見学



分かったこと

まず、私は現地のフリースクールと障がい者施設を訪問した。フリースクールでは、経済的な理由で学校に通えない子どもたちが、観光業に関連する英語やダンスを学んでいました。観光産業が盛んなバリ島では、観光業の仕事に就くことが生活を支える大きな手段となっている。しかし、地元の人々が必ずしもそ

の恩恵を受けられているわけではなく、教育の格差が広がっていることを実感した。施設を訪問し、住民が観光業をどう受け入れ、関わっているのかを知ることで、地域社会の中での観光の役割について考えさせられたと思う。次に、私はバリ島の埋立地（ランドフィル）を訪れた。バリ島は観光客が多いため、ゴミの量も膨大で、その処理が大きな課題となっている。特にプラスチックごみの問題は深刻で、埋立地には大量のプラスチックが積み重なり、悪臭が漂っていた。この現場を見て、私は観光業の裏側にある環境負荷の大きさを実感した。観光業に関わる企業の中には、プラスチックごみを削減する取り組みを進めているところもあるものの、まだまだ対策が不十分であると感じた。この経験を通じて、企業が観光と環境のバランスをどのように取るべきかを考える必要性を強く感じ、観光業の中心となるホテルにも実際に訪れ、経営者やスタッフにインタビューを行った。観光客の求める快適なサービスを提供しながら環境負荷を減らすことは簡単ではないという課題も聞いた。これにより、企業は単なる利益追求だけでなく、地域社会との関係を大切にすることが求められていることを改めて認識した。バリ島では、持続可能な観光を実現するために「観光税」の導入が検討されており、この制度が観光客にどのように受け止められているのかを知るために、私は観光客にアンケートを実施した。観光客の中には、「少額なら環境保護のために払ってもよい」と考える人がいる一方で、「すでに宿泊費や食費で十分に貢献している」と反対する意見もあった。この調査を通じて、観光税の導入には観光客の理解を得ることが重要であり、そのためには明確な目的や使い道を示すことが必要だと感じた。



C. 帰国後の活動

バリ島での留学を終えた後、私は静岡の観光産業とバリ島の関係について探究を続けている。その一環として、江の島で昨年の九月に開催されたバリ島の文化イベントに参加し、観光客や出店者へのインタビューを行った。このイベントには、バリ島を訪れたことのある人や、バリ文化に関心を持つ日本人が多く集まっていた。インタビューを通じて、日本人観光客がバリ島に求めるものは「癒し」や「非日常的な体験」であることが分かった。また、現地の文化や自然環境に対する関心が高い一方で、同時にバリ島の環境問題や観光による負の影響についてはほとんど知られていないことにも気づいた。この点は、静岡の観光産業にも共通しており、観光客に対して地域の環境保護や文化の継承について発信することの重要性を改めて認識した。今後は、バリ島と静岡の観光のつながりを深め、持続可能な観光の在り方を考える活動を続けていきたいと思う。

3. 今後の展望について

エヴァンジェリスト活動

- ・全校発表　・学校公開日でのトビタテ展示会の企画
- ・STC でのトビタテブース出展
- ・県内の高校での出前授業　ゲストスピーカー
- ・smile や Fuji' s teens での活動



バリ島での留学とその後の探究活動を通じて、私は「観光が地域社会や環境に与える影響」について深く考える機会を得た。特に、住民・企業・観光客の三者が協力することの重要性を学び、観光の恩恵が均等に行き渡らない現実や、観光客の意識を変える難しさを実感した。また、留学当初はホームシックやカルチャーショックでふさぎ込んでいたが、「頑張らなくてもいい」という言葉に救われ、自分らしく行動する大切さを学んだ。

高校3年生という時期にインドネシアに留学して多くの出会いや静岡の仲間とも出会うことができた。普段なら忙しさを理由に色々なことを諦めていたけど、トビタテを通して自分の心には素直でいるべきだと教えられた気がする。これからも自分の大好きな観光について探求していくと同時に、留学をしたい高校を増やすために自身の経験も発信していきたい。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立静岡高校	氏名	中谷里緒	学年	2年

【問い】 静岡の特徴に合ったスポーツ医療の形を模索することで、それらを幅広い世代に応用させるためには誰が何をしたら良いのか考える。

【仮説】 スポーツジムの経営者が割引キャンペーンなど、通りすがりの人にも興味を持ってもらえるようなイベントを実施する。

【探究内容】 赤…見る側からの探究 青…する側からの探究

①スポーツジム訪問

語学学校の近くにあったスポーツライミングジムを訪問し、実際に体験をした。

また、スタッフ（トレーナー）の方にインタビューを行い、どのような年代の人がこのジムを利用しているのか、頻度はどれくらいの人が多いのかなどインタビューを行った。

②ドジャース観戦（2回）

するのもみるのも好きな人が多いと言われるロサンゼルスで有名なロサンゼルス・ドジャースの観戦に自主的に申し込んだものと学校のアクティビティで2回行き、どのようなサービスが行われているのか探究した。

日本のスポーツ観戦とは異なり、応援グッズというよりは選手のフィギュアが無料でもらえたり、ドリンクを無料で配っていたりと、気軽に楽しめるサービスが多く見られた。また、学校のアクティビティとしてスポーツ観戦が組み込まれていることで1人では行きづらい人も友人と観戦を楽しめたり、興味がなくても誘われて行ってみると意外と楽しくてハマってしまうというケースもみられた。



③語学学校&街中でのインタビュー

語学学校でスポーツ習慣&スポーツ医療に関するインタビューを行った。

アメリカに住んでいる方だけでなく、語学学校において多国籍の方にインタビューを行うことで先進国と発展途上国のスポーツの実態のギャップや、日本との比較を行うことができた。

④インスタグラム上でのアンケートの公開

さらに多くの国のスポーツ医療の実態を探るためにインスタグラムでアンケートを公開し、さらにトビタテのコミュニティで拡散してもらうことで、多視点からの意見を集めることができた。

質問、結果は以下の通り↓

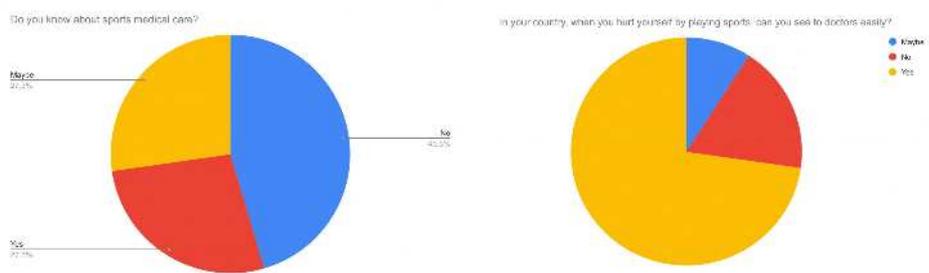
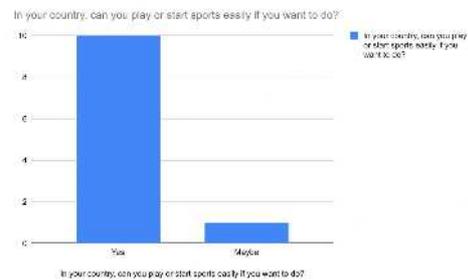
①出身国…国によってどんな違いがあるか探るため

②年齢…様々な年代にあったスポーツ医療の形を探るため

③スポーツ医療について知っていることはあるか

④あなたの国ではスポーツをしたいときにすぐできるか

⑤スポーツをして怪我をしたときにすぐ治療を受けられるか



⑤アスリートインタビュー

大学内で出会った方の妹さんがたまたまアスリートの方でインタビューを行うことができた。

↓インタビュー内容

—自分にとってのスポーツ医療— ・専門性のあるアスリートにとってとても大事 ・高校から大学への進学で多くの人がスポーツを辞めるから、大学以上は怪我にめちゃくちゃ気をつける必要がある ・体のことで不安なことがある時に行っていた ・リハビリとか怪我した後の治療とか ・大学に来た時、自分の体が動く範囲とかを測定して、自分の体についてより知ってパフォーマンスを良くできるための治療を受けた

【結果・考察】

《これからの静岡の取り入れるべきこと》 ・スポーツをより身近に感じられるように、スタジアムの中継をするカフェを作ったり、簡易化したジムだけでなく特色に富んだジムを増やしていくこと ・若い世代はアメリカにはない部活やサークルの制度、体育の授業をもっと活用できるよう、大人は仕事とジムが両立できるような環境を作ること

参加した コース	ふじのくに地域探求コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国 ロサンゼルス	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	澤田優菜	学年	2年

1. 探究活動の概要

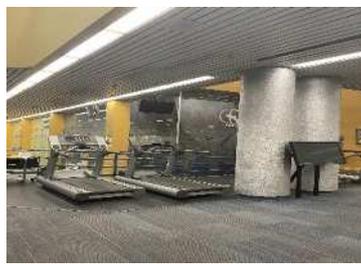
1. 留学地域 アメリカ合衆国ロサンゼルス

2. 受け入れ先機関名 カプラン・インターナショナル・ランゲージウエストウッド校

3. 留学期間 2024/8/5～2024/8/23

4. 探求活動の問い

静岡の特徴に合ったスポーツ医療の形を模索することで、それらを幅広い世代に応用させるためには誰が何をしたらいいのか考える



5. 探究活動の成果

留学前にはアメリカで盛んなスポーツやジムに関する調査や国内で身近にスポーツをしている人へのインタビューなどを行った。これらを通じて分かったことをもとに、「アメリカはスポーツも医療も発展しており、相互の関係性が良いためスポーツが盛んである」というおおまかな仮説を立てて留学に臨んだ。

留学中は主に「インタビュー」、「スポーツ観戦」、「ジム体験」の三つを行った。

インタビューは主に語学学校の生徒を対象に行った。スポーツ医療という言葉の知名度や自分の国のスポーツサポートの体制について話を聞いた中で予想外だったのが、ロサンゼルス市民の意見だった。インタビューを行う前までは、医療が発展しているから安心してスポーツができるのだと考えていたが、病気や怪我をして病院にかかるとお金がかかってしまうからという理由でスポーツをせざるを得ない人もいたようだった。また、アスリートにお話を伺える機会があったが、アスリートにはやはり多方面でサポートがなされているようだった。予防的な面でも、自分の能力を知るという面でもスポーツサポートがなされていると知り、医療を本格的に利用するとなるとやはり違うなあと感じた。アメリカは小さい福祉の国であるのに対し、日本は大きい福祉の国であり、アメリカに比べて同じ値段でできることの幅が違うので、日本の体制にあったスポーツサポートの形を提案していきたいと思った。

スポーツ観戦では、野球チームであるドジャースの試合を2回観戦しに行った。1度目に行った平日は地元の人が多く、お酒の販売もあったのでアットホームな印象が強かった。2度目に行った休日は外国人が多く、観光地感が出ていたことに驚いた。また、球場には英語以外の言語での表記も多く、観光資源としての役割も果たしているのだと感じた。スポーツ観戦を通じて、アメリカのスポーツの商業化を肌で感じられた。

ジム体験では、語学学校から徒歩で3分ほどのところにあるジムに行った。そこはクライミングと通常の器具がどちらもできる場所で、初心者も経験者も楽しめる工夫がなされていた。また、かなり都会の真ん中であつたにも関わらず日本ではあまり見ない形態のジムが普通にあることが衝撃的だった。自分に合ったスポーツを手軽に見つけやすいのは大きな魅力だと考えた。

アメリカはスポーツが盛んな国であるが、日本とはスポーツをやる目的も形態も大きく違うことがわかつた。また、日本では学校の体育の授業や学生時代の部活動などである程度の運動習慣がついていることも多いが、アメリカでは自分から始めない限りあまりそういう機会がないことも明らかになった。静岡にはプロのチームが、サッカーにバスケにバレーボールと充実しているので、もっと商業的な価値を高めてより多くの人にスポーツを大人になっても続けたいと思ってもらえるようになるのではないかと考えた。また、企業と医療機関が連携することで、安い値段で手軽にスポーツサポートを行えるようになると思った。

2. 留学を通じて

留学中に痛いほど学んだことが、ウジウジしていたら伝わるものも伝わらないということだ。私はホームステイだったが、初めの三日間ほどは英語に慣れておらず緊張していたこともあり、ホストファミリーともうまくコミュニケーションをとることができなかつた。しかしそれではもったいないと思い、相手のことを思いやりながら話しかけることで、周りの人々の優しさに気づくことができた。これをきっかけにして、ホームシックも乗り越えることができたので本当に人の力は偉大だと思う。周りに頼らず、自立しようとか自分だけで行動することも大切だが、それ以上に周りの人とのつながりも大事にしていきたいと感じた。

私にとって留学とは、言語の幅、考える幅、価値観の幅が広がることだった。何をするにも周りの人がいないと成り立たないし、自分が何より変わらないと成長はない。留学はあくまで手段だ。自分をどれだけ成長させられるかは自分にかかっているし、周りの環境にもかかっている。他の人への感謝を忘れずに変わろうと努力する環境をもらえることが何よりの価値だと思う。留学はあまりに短く、そしてとても濃かつた。自分の中で指針として作ることができたものを一生忘れずにいられるよう、これからも頑張っていこうと思う。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	山本蒼甫	学年	2年

サンフランシスコにある Japanese tea garden を訪れサンフランシスコと日本文化の結び付きについて調査した。またサンフランシスコのジャパントウンにある Japanese center 内の「Cha-to」というお茶屋さんの一角を借りて煎茶のお点前を披露したり、お茶製品についてまとめたポスターを渡してお茶製品について説明したりした。イベントには合計で11カ国、24名の方が参加してくださり、イベント後に参加者を対象に行ったアンケートでは日本茶の知名度の高さや、想像以上に日本茶の味が海外の方々にも受け入れられており日本茶に親しみを持ってもらえていたことが分かった。

今後の活動の予定としてまずは地元静岡を中心にお茶の魅力を広めていこうと思い、3/22に OMACHI という場所で静岡で世界と日本のお茶の紹介をした上でそれらをブレンドし自分だけのお茶を作ってもらうイベントを Fuji's teens という静岡のトビタテ生で構成された学生団体で実施する予定。イベント内ではふじのくにジュニアお茶マイスターとしてお茶の成分や効能などについて来場された方々に説明することに加え、煎茶のお点前も行い静岡の方々へも「見るお茶」の魅力を伝えていくつもりである。



正直もう少し大きな規模のイベントを行いたかったという後悔はある。当初は現地のお茶企業もいくつか呼んでマルシェを行おうと思っていたが、現地の治安悪化の影響でマルシェを行

うほど広い場所を借りてイベントを高校生のみで行うことが危険だという判断と、それまでマルシェのようなイベントを行った経験がなかったことから規模を縮小して自分たちだけで行うイベントを実施することになった。しかし今回の留学でイベントの経験を獲得できたため次は治安を調査した上で場所を確保できればマルシェのような大型企画も行うことができるのではないかと考えている。

日本茶の味は繊細すぎる上苦味もあるため海外の方々には受け入れられにくいのかと思っていたが、実際はその繊細さや苦味も楽しんでくださる方が多かった。またお茶を使った製品についても独創的かつ実用的でとても興味深いと評価していただけたため、これらのリアクションをもとに新たな対外国のお茶製品の開発及び提案を今後静岡のお茶企業に行っていくことで市場開拓をしていけるだろうと感じた。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (静岡と世界を繋ぐマイプロジェクトコース)		訪問国	アメリカ合衆国	
学校名	静岡県立静岡高等学校	氏名	杉岡理々華	学年	2年

語学学校は平日のみで、お昼過ぎに終わる日程で行っていたので、午後はフィールドワークやお茶イベントの準備を行っていた。

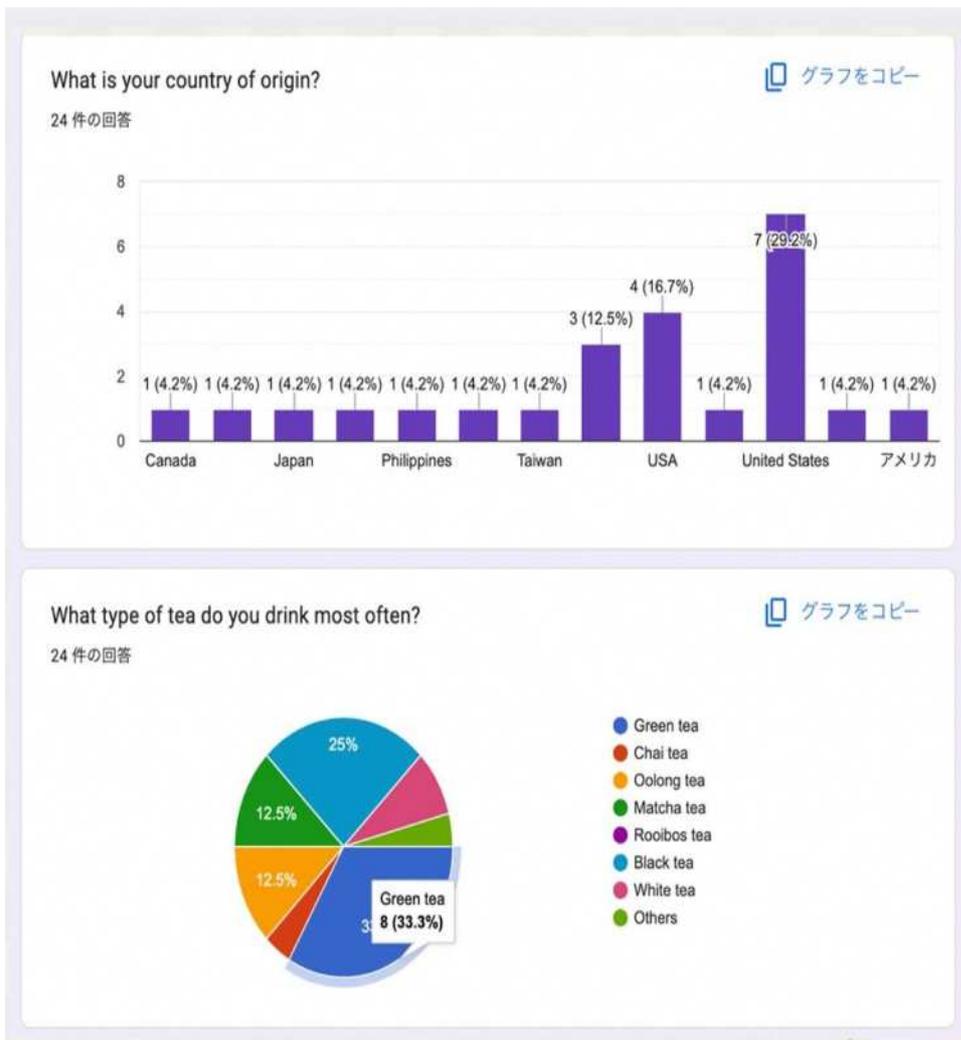
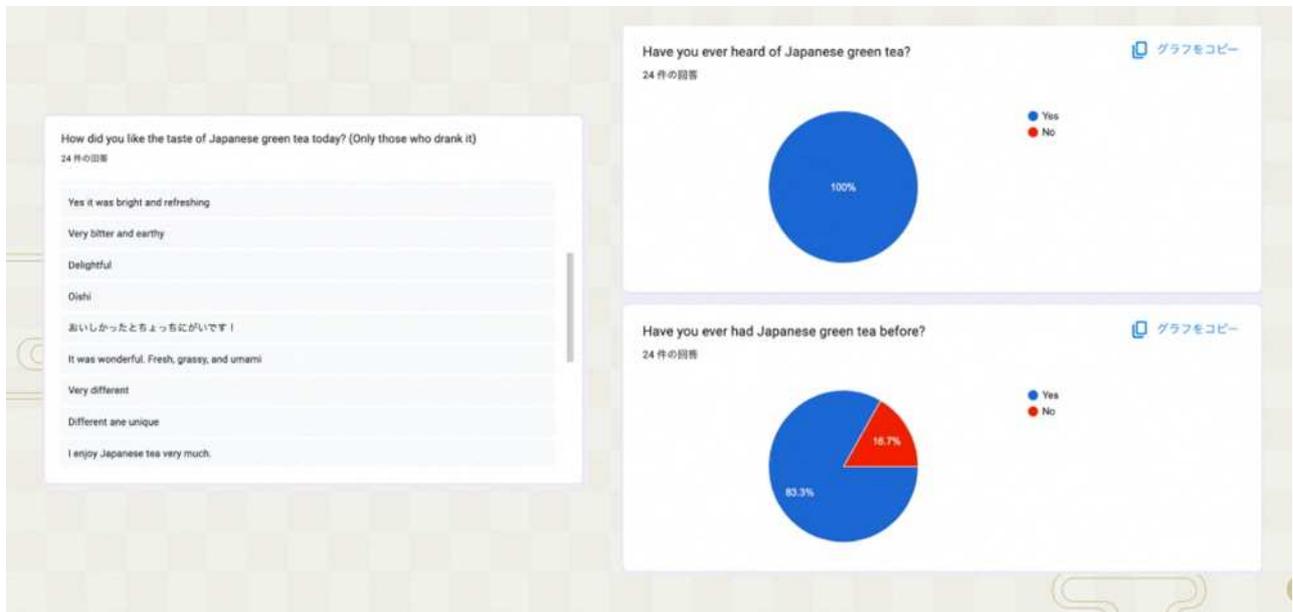
フィールドワークとして、ジャパントウンやサンフランシスコにある日本庭園などを訪れて日本文化や日本のお茶がどれくらい普及しているのかを調査した。日本の食事や伝統的な着物や食器などがたくさんあり、普通のスーパーマーケットなどにも日本のお菓子が置いてあったりと、日本の文化がかなり浸透しているのを感じた。

静岡県の煎茶の魅力を広めるためのイベントを、留学期間の後半にジャパントウンのショッピングセンターのなかにあるお茶屋さんの一角で行った。私たちが普段部活でお稽古をしている煎茶のお点前を、浴衣を着て披露した。

お茶屋さんに来たお客さんに席を用意し、日本のお茶とお菓子を振る舞う、ということをして5回行い、どの会も全ての席にお客さんが入ってくださり、語学学校で知り合った友達も来てくれたりして、好評をいただくことができた。来てくださったお客さんには、Google フォームで作成したアンケートに答えていただき、サンフランシスコで日本茶がどれくらい普及しているのかや、日本茶に対する印象、飲んでいただいたお茶の感想などを調べた。イベントで提供した静岡茶に対しては、少し苦いけど美味しかった、などさまざまな感想をいただき、計 24 名、11 カ国の方にアンケートに回答していただくことができ、私たちがアメリカ合衆国を選んだ理由のひとつである、世界中の人に静岡茶の魅力を知らうことができた。



アンケートの結果、日本茶について聞いたことがあり、知っているという人が100%、飲んだことがあるという人が83.3%だった。お茶のお店に来たお客さんだからというのものもあるだろうが、日本のお茶がかなり普及していると考えられると感じた。



ふじのくにグローバル人材育成事業 報告書

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	ニュージーランド	
学校名	静岡県立小山高等学校	氏名	鈴木天華	学年	2

○目的・応募理由

私は高校一年次の探究学習を通して、LGBTQ に向けたパートナーシップ制度が静岡県内の西部と東部とで、制度の普及に偏りがあるという現状を知りました。
 また、私たちが通う小山高校では、文系理系の男女比率に大きな偏りがあるという現状に疑問を持ち、日本には『女子は文系で男子は理系』といった固定概念があるのではないかと考えました。
 これらの探究学習を踏まえて、私たちの住む日本では、LGBTQ に対する十分な法的制度が行き届いていないこと、またジェンダーギャップが身近に存在するという課題を見つけました。
 そこで、私は静岡のトビタテ留学制度を通じて『学校教育におけるジェンダーと LGBTQ の言説-日本とニュージーランドの比較-』というテーマを掲げ、ジェンダーギャップ指数世界第4位を誇るニュージーランドで、3週間の期間で留学を行うことを決めました。

○留学内容

ニュージーランドのオークランドで3週間、ホームステイを行いながら現地の語学学校に通いました。私の通う語学学校では毎日授業が午前中に終了したため、放課後の午後からは探究テーマに対する探究活動を行うことができ、語学学習と探究活動を両立させることができました。
 ホームステイ先ではホストマザーとホストシスター、またエクアドル、中国出身のルームメイトと一緒に生活しました。それぞれの国の文化を学び、異文化交流を楽しみました。



↑ ホームステイ先での様子



↑ 語学学校での様子



↑ オークランドにて撮影



○探究活動

探究方法としては、街頭アンケートをメインに行いました。街頭アンケートでは、駅前やショッピングモールなどの人が多く集まる場所で、平日の放課後や休日の時間を使って行いました。具体的な方法としては、街を歩く人やベンチに座る人に直接声を掛け、口頭での質問を行い、一人一人の回答を紙に記入しました。探究活動の成果として、街頭アンケートでは、3週間の期間で合計約160人に調査をすることができました。

このアンケートでは、ニュージーランドの人々のジェンダー意識や高校生の文系理系の男女比率、またLGBTQに対する意識についての調査を行うことができました。

他にも、語学学校でLGBTQの授業を履修したり、歴史博物館で先住民族のマオリについて学んだりしたことで、ニュージーランドの多様性社会を構築する要因を歴史的観点から理解を深めることができました。

ジェンダーに関する街頭アンケートでは、自分が想像していた以上にニュージーランドでジェンダーギャップを感じる機会があると答えた人が多かったことに驚きました。ニュージーランドでも学校や職場、家庭など様々な場面でジェンダーギャップを感じることもある、という点においては日本の現状とあまり変わらないように感じました。この結果を踏まえて、ジェンダーギャップ指数というのはあくまで政治や経済、健康、教育における男女平等の値を示すものであり、『ジェンダーギャップ指数上位の国＝ジェンダーギャップを感じることは無い』という訳ではないのだと思いました。

一方で、LGBTQに関するアンケートでは多くの方がLGBTQに対して定的に捉えており、マイノリティに寛容な人が多くいるのだと感じました。



↑街頭アンケートの様子

○トビタテ留学を終えて

私はもともと高校卒業後の進路が決まっておらず、将来の夢も漠然としていました。しかしこの静岡のトビタテ留学制度を通して、高校生のうちに海外留学を経験したことで海外の文化や歴史に興味を持つことができ、卒業後は国際関係学部のある四年制大学に進学したいと考えるようになりました。留学を通して自分が本当にやりたいことを見つけることができました。

そして留学後の今、トビタテ留学 JAPAN を通して得た経験が私の視野を大きく広げてくれました。今回の留学によって得た多くの方々との繋がりを、これからも大切にしていきたいです。

参加した コース	ふじのくに地域探究コース (多文化共生・多様性コース)		訪問国	ニュージーランド	
学校名	静岡県立小山高等学校	氏名	平山佳誉	学年	2

1 留学を決意したきっかけ

私達は高校一年時に、二つの探究活動を行いました。

一つ目に、静岡新聞主催のしずおか新聞感想文コンクールに応募し、LGBTQ+の人々に向けたパートナーシップ制度の一つである縁故者制度の普及に、静岡県内の西部と東部に差があり、西高東低の状態であることを知りました。

二つ目に、静岡大学主催の伊豆半島探究学習サミットに参加し、「女子は文系、男子は理系に特性がある」というジェンダーの固定観念を検証すべく、小山高校の一年生 108 人を対象にアンケート調査を行い、結果を発表しました。そこでは先述の固定観念の通り、女子は文系を選択する傾向があり、また男子は理系を選択する傾向があることを明らかにしました。

これら二つの探究学習を通して、ジェンダー平等と LGBTQ+ の探究をさらに深め、地域社会の課題解決に貢献したいという思いが強くなり、留学を決意しました。

2 留学のテーマ・目的

私達はジェンダーと LGBTQ+ に関する探究学習を行いました。具体的に、「ニュージーランドがジェンダーギャップ指数世界第 4 位を誇る理由は何か」と「ニュージーランドの社会が LGBTQ に寛容なのはなぜか」という 2 つの問いを立てました。これら二つの問いのもと、「学校教育におけるジェンダーと LGBTQ の言説—日本とニュージーランドの比較」というテーマを掲げ、3 週間の探究留学をさせていただきました。

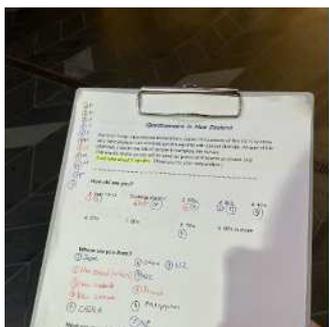
前述の通り、ニュージーランドはジェンダー平等に先進的であると同時に、国民における性的マイノリティの占める割合が世界第 5 位という、LGBTQ + 大国でもあります。

これらの理由から、ニュージーランドを探究の場に設定しました。

3 探究方法

探究方法として、主に街頭アンケート調査を行いました。「現地の人々のジェンダー平等に対する意識」「高校生の文理選択」また「性的マイノリティに対する意識」を調査する 3 つのアンケートを、語学学校と両立して行いました。また、語学学校で LGBTQ+ の授業を履修し、オークランド歴史博物館を訪問しました。

アンバサダー活動としては、アンケート調査の際、回答に協力していただいた人に日本のお菓子(抹茶味のキットカット、ハイチュウなど)を配り、日本の魅力を伝える活動を行いました。



↑ アンケート調査用紙



↑ アンケート調査の様子①

4 探究活動の成果

3週間の留学期間中に行った街頭アンケート調査結果は次のようになっています。「現地の人々のジェンダー平等に対する意識」が56人、「高校生の文理選択」が72人、「性的マイノリティに対する意識」が26人の、合計154人に回答していただくことができました。

また、語学学校の授業や歴史博物館訪問を通して、ニュージーランドの文化背景について知ることができました。

5 アンケート調査の結果

3種類のアンケートそれぞれの結果は、次のようになっています。まず、「現地の人々のジェンダー平等に対する意識」のアンケートです。このアンケートでは「あなたはニュージーランドで男女の格差を感じた経験はあるか」という内容の質問を行い、あると回答した場合には、具体的な場面を記述してもらいました。調査の結果、全体の51%の人が、男女の格差を経験したことがある、と回答しました。具体的な場面として多く挙げられたのは、職場における役割分担、または学校や医療現場という意見です。このことから、ジェンダーギャップ指数第4位を誇るニュージーランドの社会であっても、実際には男女の格差が存在していることがわかりました。

次に、「高校生の文理選択」のアンケートです。このアンケートでは、小山高校で行ったアンケートと同様に、現地の高校生を対象に「あなたは文系か理系のどちらか、またはどちらが得意か」という質問をしました。調査の結果、男子生徒のうち、6割が文系、女子生徒のうち、7割が理系であることが明らかになりました。これは、小山高校で行ったアンケート結果と真逆の傾向を示しています。

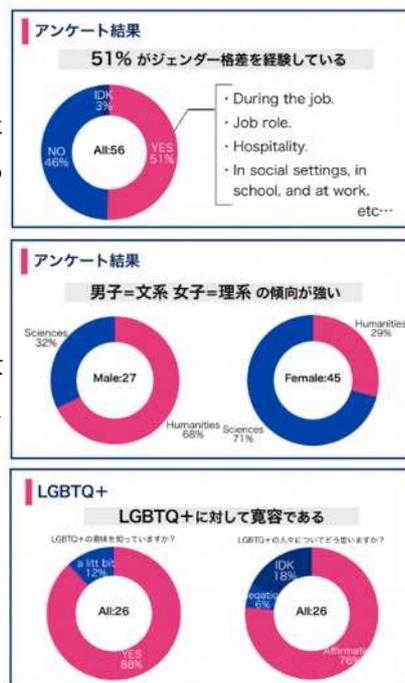
そして、「性的マイノリティに対する意識」のアンケートです。このアンケートは、「あなたはLGBTQ+それぞれの意味を知っているか」また「あなたはLGBTQ+に対して肯定的か否定的か」

という質問を行いました。調査の結果、全体の9割がLGBTQ+それぞれの頭文字の表す意味を把握しており、LGBTQ+が広く認知されていることがわかりました。また、7割がLGBTQ+に対して肯定的な意見を持っていることがわかりました。

6 考察、まとめ

今回の結果から、年齢を問わず多くの人々が性的マイノリティに対して寛容な態度である一方、ニュージーランド社会にはジェンダーギャップ指数とは裏腹に、ジェンダー格差が存在することがわかりました。課題として、ジェンダー平等先進国であっても男女の格差が存在するという事実、また文理選択において、日本と逆のジェンダーバイアスがある可能性が残されました。これらの課題を解決する方法を模索することで、真の男女平等社会、多様性社会を実現したいと考えています。今回の留学では、ニュージーランドの多様性に溢れた社会を構成する要因の発見に至ることはできませんでしたが、しかし今回得られた結果をもとに、今後も探究を深めていきたいです。

↓アンケート結果を示したグラフ



↑アンケート調査を行ったブリトーマート駅

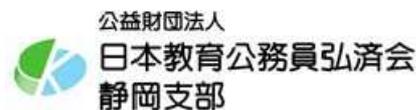
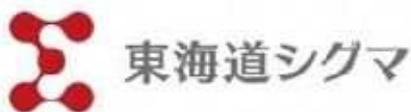
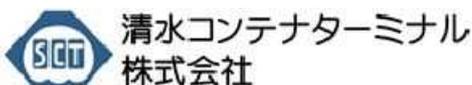
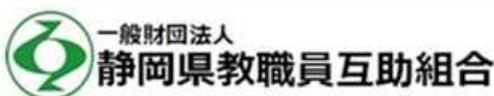


↑オークランド博物館のLGBTQ



↑アンケート調査の様子②

ふじのくにグローバル人材育成基金 寄附企業・団体様
(五十音順)



静岡県高等学校長協会／静岡県高等学校等副校長・教頭会／静岡県公立高等学校事務職員協会／
学校関係団体（同窓会、後援会等）／ふじのくに応援寄附者（個人支援者）